

281号



湘南+新宿

今こそ言おう 戦争は「ノー」

イラクとアメリカを訪れて

阿部 知子

アメリカはなぜイラクを狙うのか

酒井 啓子

グローバルな視点から「平和憲法」を

ダグラス・ラミス

運動は一人から始まる

バーバラ・リー



あごら

281号

03年1・2月 合併号

今こそ言おう 戦争はノー！

表紙 今こそ言おう 戦争はノー！

(撮影 小林アツシ)

戦力行使に今こそ具体的な「ノー」を	斎藤 千代	1
イラクとアメリカを訪れて	阿部 知子	2
アメリカは、なぜイラクをねらうのか	酒井 啓子	33
グローバルな視点から「平和憲法」を	ダグラス・ラミス	48
運動は1人から始まる	バーバラ・リー	74

■TOPICS 高砂建設賃金差別訴訟、勝利/かながわ女性センターが消える ほか	87
■集会から 世界にあふれた反戦の声1.18 統一行動/アフガン国際戦犯民衆法廷 ほか	91
■めじゃーなりすとのめ 神の国・人間の国	李 英 伊 94
■沖縄から 基地はいらない命のひびき	奥石 正 96
■語りかけたいあなたへ 50 ため息	大里 知子 98
■随想 生き方としての百姓仕事	加藤 文夫 100
■あごら読書室 酒井啓子『イラクとアメリカ』/青木みか編『どうして戦争を始めたの?』…	103
■あごらのあごら 松井さんの「地の塩賞」/〈あごら〉世界の女性に不戦を訴え ほか …	106

目次で振り返る『あごら』30年® (1986年12月～1987年12月)	116
--	-----

戦力行使に 今こそ具体的な「ノー」を

イラクをめぐる戦争の動きは、世界の市民の心を暗くしている。

戦争と破壊の二〇世紀の払拭は二一世紀の課題。アメリカの恫喝に道理がないことは、世界の市民の大半が世論調査でも示している。しかし国連の安保理では、反対の意思表示は独・仏・ロ・中の四か国にすぎない。

独走する超大国の暴力に対し、「戦力の行使という罪障」の深い反省として憲法九条を持った日本こそ「ノー」と言つて欲しいと願う日本人の思いは、日々に強くなっているが、日本政府は、「戦後の復興に協力」をいち早く打ち出した。

これは「戦争には協力しない」という響きに聞こえるが、「難民を救済します。破壊された施設は復興します」と誓うことは、「だから存分に破壊を」と公約することにはかならない。

十二年前の湾岸戦争では、日本国民は赤ん坊や病人まで一人一万円ずつの戦費を負担して、戦争という暴力を実現させた。いま「戦後の協力」にどれだけの予算が用意されているのかは明言されていないが、金額の多少以上に、その偽善性に、救いがたい思いを抱く日本人は少なくないと思う。

「イラクの占領政策は日本の占領政策の成功に学ぶ」という米国の意思も報道された。戦後五十七年、今も続く占領、とりわけ沖縄の占有を黙視しているかぎり、占領者にとつては、常に従順で決して抗議をしない日本の例は「希有の成功」と映るだろう。

一方、多くの日本人は、今日の日本の腐敗・墮落・アパシーに、あの戦争の傷の深さを、そして日米安保という軍事同盟が続く中では状況は永久に変わらないことを、改めて認識している。

今こそ軍事同盟を改めて、平和友好条約を実現させよう。

「ノー」という否定を、形あるものにしないかぎり、日本は、日本人は、戦争という暴力を肯定し続けることになる。

現地報告

イラクとアメリカを訪ねて

阿部 知子

二〇〇二年十二月十六日にイージス艦「きりしま」はインド洋へと派遣されました。

先立つ十二月九日、例年よりも一か月近く早い雪の舞う横須賀港に停泊中のその船を視察した折にも、誰がそれを決めたか、意志決定のプロセスは全く隠されて見えないことを改めて実感させられました。

イージスシステムという米国独自のレーダー監視能力とネットワークを共有する国、日本は、やはり太平洋に浮かぶ米国の五一番目の州でしかないという事実をまざまざと見せつけられながら、では日本の生きる道とは何か、どこへ向かうのか、を考えざるを得ませんでした。アメリカとともに対イラク攻撃を戦い、世界を核戦争をも辞さない戦禍へと引きずり込むのか、それとも愚直に平和憲法の誓った武力にたよらない紛争の解決への道を歩むのか？

とにかく、まず現地を訪ねようと、去年の暮れ、十二月十六日から二三日まで約一週間、イラクへ、そして今年一月十四日から一月二十日まで六日間、アメリカへと、あちこちに行つて、地元にほんごい状態になっています。きょうは、その現地で見たことをビデオでお目にかけて、私の感じたことをお話ししたいと思います。

日本に帰りましたら、衆議院解散近しとか、北朝鮮からテポドンが飛んできたらどうするといった話ばかりですね。予算委員会の川口外相の発言には驚きました。「査察に、イラクは決して協力的とは思えない」と言ったのです。

今、核兵器も含む大量破壊兵器の査察という現実をめぐって、アメリカ側は、そもそも国連の査察なんて、あんなものは、実力もないし、本当のことは出さないだろうし、やったって意味がないんだけど、とりあえず国際社会がやれと言うから、まあやらせてやるか、という態度ですね。国連の査察についてのスポークスマンは日本人の植木さんという広報官ですけど、彼は、国連の人たちが、あそこでどんなに一生懸命査察しても、国連安保理という非常に政治的な舞台で、このことの利用のされ方は白にも黒にもなるという現実を知りながら、実務サイドですから、とにかくきちんとしたことをやるしかない、と、一生懸命やっている。これに対してアメリカは、例えば「IAEAのエルバラダイの言うことはどれ程のことか、今の査察団の団長の言うことも何だ」という感じで、「アメリカが独自に調査したイラクの諸悪の根源の資料は我われが持っているんだ。一月二十七日、国連査察の中間報告が出る。その日を狙ってブッシュ大統領が所信表明演説する。こんな査察やつたってしょうがない。俺らの持っているデータどおりに攻撃すべきなんだ」という太い流れがあるんですね。

これに対し、ヨーロッパとくにフランスとドイツ、それにロシアは、「やつぱりきちんと査察して、本当に、核、化学兵器、生物兵器、一五〇キロメートル以上のミサイル、この四つのいわゆる大量破壊的な兵器のない時代をつくらう」という理念のもとに心に痛みを持ちながらやっているのですけど、この緊迫した最中に、見もしない査察の現状を一国の外務大臣として重い責任を負う人が、平和への微妙なこの時期に、「イラクは査察にきちんと協力していないと思われる」とい

うような、想像に過ぎない主観に過ぎない、アメリカの言うことのおうむ返しに過ぎないことを
予算委員会という公の場で言った。政治家としての資格、素質を、私は非常に疑問に思います。

イラクへ

私は、とにかく現地で現場を見ようと、十二月十六日、イージス艦がインド洋へと出発しようとするその日、広島の反核団体や、〈フォーラム平和・人権・環境〉の人びととともにイラクへと旅立ちました。

出発に先立って、イラク関連のガイドブックその他を探しましたが全く入手できません。かつてこの地が日本の中東貿易の中心であったことなど夢のようです。現在私たちに届くイラクの情報は、すべてアメリカ経由。イラクはアメリカが「悪の枢軸国」と呼び、今すぐにでも空爆攻撃を開始しようと敵視している国であり、イラク国内の統治はサダム・フセイン独裁体制が、一〇〇%の国民支持を受けている国という以外にないのです。

それで、北朝鮮労働党の金日成・金正日親子による独裁軍事秘密国家にもなぞらえて、「なぜそのような国へ、まして査察という緊迫した状況下に敢えて入国しようとするか」を問う周囲の声も大でした。一方、日本の外務省は、反核運動団体がこの時期イラクを訪問することは、かえってサダム・フセイン側に利用されるのではないかと危惧する見解を持っていました。

日本の外務省も含めて、国会議員である私のこの時期のイラク訪問になぜ慎重にならざる得ないのかを考えた時に、現代社会は「核」という問題をめぐって、あちらこちらで極めて緊迫した状況をかもし出しているという現実を改めて感じました。

かつての湾岸戦争時に、この地域で米軍によって使用された劣化ウラン弾による被爆被害を、イラク側はこの間繰り返しあらゆる場面で主張し、国連の核関連の委員会やWHOも調査を実施しています。他方、イラク自身が国際的に核拡散禁止の条約にそむいて核を保有し続けているのではないかというアメリカ側からの嫌疑が、今回の国連による査察でもあるというのが、現在の状況です。

劣化ウラン弾による被害

私自身は小児科の医師として、また現在日本の国政に身を置くものとして、何よりもまず人類に対しての最大の罪である核を廃絶することにどうやって世界の英知を集められるかに、第一の関心があります。

そしてその為に米軍の劣化ウラン弾の使用の現実がどのように人類に害を与えたかをまず検証する必要があると考えています。米国が次なるイラクへの攻撃を準備するにあたって、このことはぜひとも世界中の人びとが知っておく必要があると思います。その意味で十二月に来日されたイラクのバクダッド大学医学部小児科学教授の指し示す統計的なデータは戦慄に値するものでした。

白血病をはじめとする悪性腫瘍の多発、とりわけバスラをはじめ戦闘地近くの奇形が多発は、驚異的な数値を示していました。

では、現実には、どんな姿だったのでしょうか。まずビデオをご覧ください。

(ビデオ上映)

政治家の一言がどんなにたくさんの人を殺すか。ビデオで見てもらったように、あの街並みも市場の人たちも子どもたちも、病院も学校も、全部、空襲によって一瞬のうちに火の海になるのです。これもビデオに出ましたが、アメリカシエルターという、天井に穴のあいたシエルターは、湾岸戦争の空襲のあとです。小さな穴を残して貫通した一発で一瞬にして数百人がわっと死んだ。劣化ウラン弾が使われたのです。劣化ウラン弾は重金属でもあり、それがもたらす被害に今も苦しんでいる。人間がそこでどんなに苦しんでいるかを知らずして、日本の外相が、アメリカの論理の受け売りをしたのですね。それに対して、「疑問があるのなら、あなたの身がどんなに危険でも、日本国の外務大臣として今の査察の現状を見てくるべきじゃないですか。あなたはあなたの判断で、あなたの情報網で、自分がきちんとした現状を見てから発言すべきじゃないですか。それが日本の外相の日本の政治の選択の未来じゃないですか」というふうに迫れる議員が一人もない。この空理空論の、痛みを知らない空洞国会の、残念ながら私も議員の一人なのだ、ということを、改めて自覚したところです。

正直言つて、国会論議はバカバカしくてやってられない。それくらい、現実を見ない。例えば、不況の問題だって失業の問題だって倒産の問題だってシャッター街の問題だって、国会で論じていることと、現実、生きている私たちの間は全く乖離している。こんなところで産業再生機構なんていうのをつくったって、天下り先になるだけです。つぶれかからんとするお店、今日も客は来ないな、閉めちゃおうかなと思っている商店、あるいは資金繰りがどうにもなりませんと思つているところにはお金は回らないのです。この政治の落差を埋める為に、とにかく現実を知らなくて、と、私はイラクに向かったわけです。

ところが準備段階からトラブルが党の内外に起きました。外務省との関係も多難でした。イラ

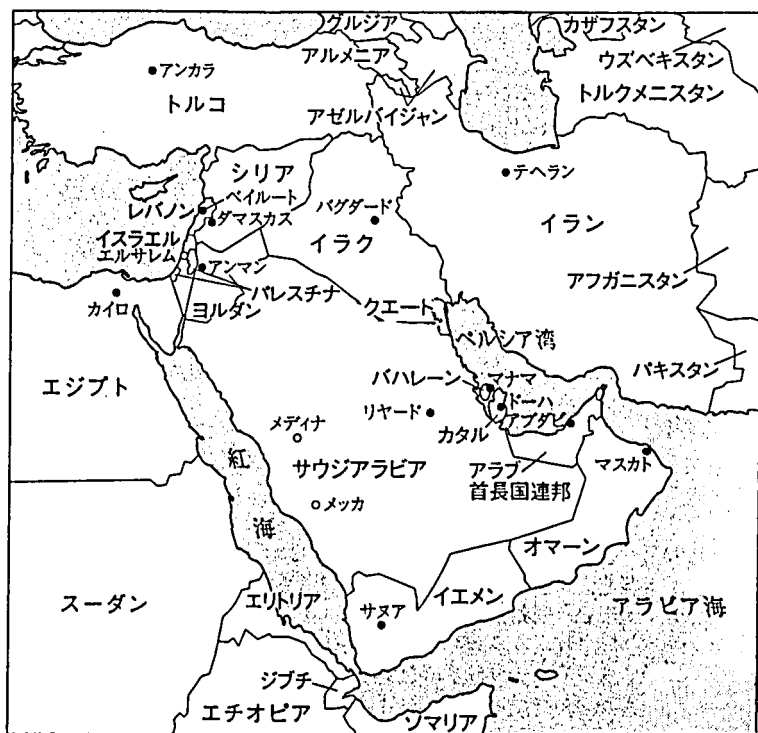
クのビザが下りたのは、出発の前日でした。キャンセルになったらどうしよう、飛行機代全部パーか、とか気をもみました。外務省は絶対に止めさせたいと思っていました。私たちの一団は、社民党の議員が二人と、(フォーラム平和・人権・環境)という労働団体の中の平和運動を担うグループと、広島の反核団体、森瀧さんという女性たちが率いてきた一団です。外務省は、イラクはけしからん国である、そして核は隠している、査察には実は従っていない、と、先入観念で思っているわけです。そこにもしも日本から被爆した当事者やその支援団体が行き、隠されている核問題である劣化ウラン弾のことを騒ぎ立てたら、今の日本の立場が、体面が、もろに崩れるから、「できれば」という言葉を使ったけど、「行かないでほしい」と。

私を説得する為に、上司を呼んできますから、と言うから、「そんなものは呼んできて、行くものは行くんだ」と言って、最後は押し切って行ってきたわけです。

西アジア随一の近代都市だったバクダッド

イラクは、チグリス、ユーフラテス、という二つの川の間の肥沃な土地で、そのぶつかる所にバクダッドがあり、六千年前の昔から農業が盛んなんです。あの砂漠地帯で、パームやしを育て、日本の八百屋さん顔負けにいきのいい野菜をいきのいい店が売っていた。それが湾岸戦争後も十二年間も経済制裁が続いている。かろうじて石油だけを、食糧を買う分、輸出させるというのを一九九五年からやっているわけです。だから、医療機器だつて一九八〇年代のものを今使っている。十二年間、なま殺し状態ですね。

そういう現状を私も行くまではわからなかったのです。行ってみなければわからない。わから



ないことのうえに立つて、勝手な思い込みやイデオロギーによって論議したら必ず過ちが起こる 8
 と思って、一つは査察の状況を知る、もう一つは、劣化ウラン弾ということで、行ってみました。

行く前に勉強しました。ペルシャ湾への出口がクウェート、東隣の大きな国はイラン。で、南の大国がサウジアラビア。北西部がトルコでクルド民族がいる所。十二前にはイラクがクウェートに侵攻したので、湾岸戦争になった。この湾岸戦争のあと、北緯三十三度から北と、南のクウェート寄りには米英が制空権を持っている。イラクへの一般の飛行機は飛べないのです。だから私は日本からオランダのアムステルダムに飛んで、アムステルダムからヨルダンの首都のアンマンに飛んで、そしてアンマンから、バクダッドに飛んだ。行くのに二日、帰りはアラ

ピアのロレンスみたいなことをしたので、三日かかって日本に帰ってきたため、中二日しかイラクにはいられませんでしたけれど。

このビデオ、よくできてると思うんです。理由は、人びとの暮らしがそのまま映ってる。今までの日本の報道って、例えばイラクでサダム・フセインがサーベルをシャート抜いて、とか、ガンを持ち上げて、とか、選り好んで野蛮なところしか映さない。そうでなければ、バクダッドが戦争特需で賑わっていますとか、悪いこととして賑わっているみたいな描き方しかしていない。劣化ウラン弾による子どもたちへの危害というのはやつと報道されるようになったけれども、なんとなく、野蛮な国イラクないしは邪悪な国イラク、あるいはただ可哀そうな子どもたちの国イラクです。

でも、本当にそこにあるものは、例えばこのビデオの最初に出てきたのがそうですけど、けっこうしっかりした長距離道路、そして建物の構築を見てもらえばわかるけど、きれいなんです。新しくはないけど。

バクダッドにかかる四本の橋は湾岸戦争の時、アメリカがぼこぼこにしたので再建されて、やつと今通ったところ。物流も無茶苦茶になっていたという。私たち日本人にはわかると思うけど、戦後の復興と一緒に、そこから一生懸命復興してきた。復興は別に政府とか権力とかが行なうものではないですね。人びとが自分たちの生活の復興の為に日夜努力して。それも経済制裁下ですよ。日本は戦後の復興を逆にアメリカから支援してもらったりしたわけです。もちろん私たちの親もおじいちゃんおばちゃんも努力した。でも、結局、国をつくっているのは権力ではなくて人なんです。人の営みが街をつくり、物を売り買いし、もう一度生きようという意欲をもたらしている。

イラクでは今も「医は仁術」

そういう意欲をとくに感じたのは、病院のお医者さんたちですね。私はあのお医者さんたちを日本にスカウトしてきたい。本当にいまどき、大病院の院長が、見学のお客さん——私たちを連れて回診していて、泣いている子どもがいたら、お客さんを放っておいて行く、そんな院長がどこにいますか。どっちが人間的な医者でしょうか。なぜ泣いているんだろう、どうしたのと言つて、彼は子どものそばへ行つたきり帰つてこない。その子が泣き止むまで親に説明し、玩具を渡したり。で、慌てて私たちのところに帰つてきて、こつちの機械もこんなです、こんなに患者さんは待つています、私は朝から晩まで働いてもそれでも全部の患者を治せません、くやしい、と私に言うわけです。

何がくやしいかって、イラクはもとアラビアの医療の中心。バクダッドの医学部にアラブの諸国から医学生が来て学んで、医学水準は高かった。いろんなことができる、自分たちが治せる、治したい、そう思つてやつてきた。その自信もある。だけど五種類の薬のうち、経済制裁で三種類しか入つてこない。例えば、がんの治療というのは五種類の組み合わせでがんを一回叩いて再発しないようにずつともつていつて、維持しなきゃいけない。五が三じゃダメ。三あけているからいいじゃないのというのじゃダメ。組み合わせが必要なんです、これをアメリカとイギリスは国連決議661に基づいて、なんだかんだ言つて削るわけですよ。医療現場で治す側にいたら、もう悔みきれないほどくやしいですね、患者さんの死は。死には、しょうがない面もある。だけど、人為的に薬をストップされたことによって、やれることがやつてあげられなかったと思

う医者の心の底の、煮えくり返るような苦渋……。

二番目の小児病院というところで、案内してくれた医者は、三十そこそだったと思いますが、最初に見せてくれたのは、「この子はあと一週間です」という女の子でした。お母さんもその子も、打ちひしがれた顔をして、ただ、虚空を見るように寝てたんです。その子のところに広島から来た市民団体の人たちが折った鶴を持っていつてこようって見せたんです。そうして飛ばすまねをしたら、その子が初めて笑ったの。子どもの笑った顔を見て今度はお母さんが泣き出しちゃった。

私も小児科医でわかるんですけど、今、白血病って八割以上は治せるんですよ。治せない病氣じゃないんです。もつと言え、いろんな手を使えば、九〇何%治せます。私たちはそれくらい進歩した医学を持った、この二十年で。逆に彼らは七五%諦めなきゃいけない。死なせている。この子だって助かるはずだ、って。あの時ちゃんと薬を使っていれば再発しなかつたはずだ。だけど、今はあと一週間。死を待つしかないんだ、って言う時の、その若い先生の子どもに寄せる気持ちとか、くやしいという思いとか、あと、お母さんたちの表情とか……。

「ただ一つの救いは本当に笑ってくれたことだった」って言ったお母さんが忘れられないんです。私たちがその部屋から出る時、お母さんはその部屋の境に土下座してお礼をなさったんです。たかが日本から見に行っただけで、鶴配って、そしてまた、日本はイラク攻撃に賛成するとか言ってるでしょ。肩身が狭いなんてものじゃなくて、消え入りたかつたけど、しかし、逆に、そこで医療を担う人も生活している人も、本当に生きることを支えることに一生懸命の姿があるということを、どうやっても日本で伝えるのが役目であると思って、帰りました。

子どもたちは いきいき輝いていた

やっぱり、行かなければわからなかったし、そういうのを伝えてくれるビデオや絵本がどんどん出るという。ところが、こんないいビデオじゃんじゃん放送してほしいのに、日本のメディアは、すごく残虐かすくおどろおどろしいかしか出さない。例えば子どもたちの歪んだ顔というのは出します。でも、そこでどんな人びとがその子どもたちを支えているか、人間の努力、営みには目を向けないんですね。ひたすらに暗いところばかりか野蛮なところか。

今の日本の社会に欠けているものって、実直に人間が営みを重ねてものごとをつくり上げていく時のいろんな苦しさ楽しさ、連帯——悲しみを分け合ったり支え合ったりする、その当たり前の品性が地に落ちたから、日本は最低の国になろうとしていると思うんです。メディアの姿勢もそう。辻元さんが「総理、総理、総理」とやらざるを得ないような刺激的な方法でやつと気づかせる国会。だって、国会の短い質問で目立とうと思ったたらあれしかない。あれは国民を本当の意味で心のありかを失わせている姿だと思います。

だから、私はこのビデオ、講師つき三千円、いろんなところで映してほしいですね。そして、イラクってこんなところか、って。あんなに立派に人たちが生きているところだ、と。私が立派、立派、と言うのは変なんですけど、別にすごくリッチでも何でもありませんよ。子どもたちを見てくれてもわかるけど、そんなにいい服は着ていないけど、でも、みんな思い思い。で、一緒に行ったもう一人の議員さん、山内恵子さんという方ですが、もともと先生で、彼女は「国旗掲揚なんて」って言って泣くんです。イラクの人びとが国旗を掲げているのを見て。私は、戦前の生まれじゃないからわからないけど。なんか、国民性なのか、ビシバシとやられてるんだけど、そこ

に一つのゆとりがあるんです。確かに軍国教育だと思えますよ、国旗あげて、校長先生が「アメリカはけしからん」と言ったり。でも、その時の子どもたちの表情はいたずらっぽいのと、よそみができるのと、私たちが教室に入った時のあの子どもたちの反応の仕方。鶴の折り方を教えたらワーツと寄ってきたり、ビデオは一斉に見たがったり……。先生が横にいたけど、あんなにフレンドリーな先生は日本にはなかなかいませんよね。もつと衝撃的だったのは、遅刻してくる子が朝、三十人くらいいるんです。日本だったら、重い鉄の扉でビシャンと、圧死でしょ。あつちはそのじゃない。一応は閉める。外で三十人待ってて、朝礼が終わったらガラッと開けて、ワーツと入ってきて、まぎれ込む。確かに戦争ということを抑えて男女別学になつて、イスラムの精神をということでああいうことをやっているの、山内さんの涙もわかるけど、でも、見たところ、ある意味の精神の自由とか、いたずらっぽい目とか、キラキラという感覚とか、非常にいきいきな、子どもらは、と思いました。

「いきいき」は大事。なんにしろ。日本では一見自由に見えても、シーンとして、本当のことは言つたら損、自分はもしかしたら自分の大好きな友達から嫌われるかもしれない、と思つて悩む子どもたちの何と多いことか。だから、本音は言わない。そういう日本の子どもたちを見ている私にしてみれば、やっぱり、どっちが文化の豊かさとか人間の豊かさを保持しているかな、と思つと、日本は考えなおしたほうがいいなと思うような日々でした。

見て来たところは主に病院が二箇所。一つは日本で言うがんセンターのような、がん放射線治療病院、イラクじゅうの重い患者さんの九五%が来ています。そこで使っているのは二十年前の機械。イラクの患者さんは、一人に二十分の照射時間、日本では五分ですよ。四人治療できると、一人治療できるのでは、患者さんにとって順番を待つ時間も、救われるチャンスも、全然

違うんですね。四分の一になる。やってもやっても次つぎに患者さんが来る。入院させられない。一人一人が再発するから、その悪循環になっている。

もう一つのサダム教育病院は小児の病院で、一つの部屋六ベッドなのに、今八ベッド置いて治療している。助からない子が多い。あと、バクダッド大学の医学部にも行ってきました。ここはアラブの医学教育の中心。確かにその意味で知的レベルは高いし、歴史的に、チグリスとユーフラテスですから、蓄積している文化は、一朝一夕にしてならずです。

そして子どもたちには女の子たちも含めて五年生から英語を教えている。さっきの子たちも、先生になりたい、ドクターになりたい、エンジニアになりたいと言う。今、日本で五年生に聞いてごらん。将来何になりたいの、って。あんなに抱負を語る子って、ものすごく少ない。どこかの中学に行きたいとか、そういう話じゃないだろうかと思いますが、とにかくあの子たちはそういうことに夢を持って一生懸命勉強もしているんですね。

立法院の議長とも会う

それから、赤新月社、日本で言う赤十字にも行ってきたし、イラクの国民会議という、日本の国会にあたるメンバーとも会いました。行く時に、サダムに会ってはいけない、サダムと握手をしてくるな、と忠告されて、絶対、私はサダムには会いませんと言ってきたので、サダムには会いませんでした。サダムは革命評議会という日本の内閣みたいな行政府の長。国民会議は立法院で、立法院の最高の長である国民会議議長のハンマーディ氏という人に会ってきました。これが何とイギリス風紳士、ジェントルマンという感じで、淡々とイラクに行なわれた経済制裁でどれ

くらいの不必要な死が起こったか、例えば乳児死亡率が上がったとか、撲滅されていた小児麻痺とかいろんな感染症がもう一度起こったとか、そういう話を、感情的じゃなく淡々としてくれました。今の国連の査察が終わったら、不要な経済制裁は解かれるべきであるというのが、彼らの主張でした。

それから、もう一つ、劣化ウラン弾については、一昨年の秋からWHOとジョイントで調査をすることになっていたけど、これもアメリカのCIAの妨害で実施されていない。で、自分たちは、今起こっていることがあまりにも異常なので、例えばがん発生も地域による差はあるけど十倍から二十倍とか、とにかく自分たちが経験したことのないような患者さんの数であるし、やっぱり調べたい、記録に残したい。だけど、自分たちだけでやったら信憑性を疑われるから、国連とジョイントしてやりたいということを、ハンマーディさんは話しておられました。

こちらに各委員会の委員長がずらっと並んで、こっち側に学生も含めて私たちがずらっと並んで、お一人お一人に自己紹介をしてもらったんです。広島から来た被爆者はその思いがあるし、若い学生は、これから自分たちが平和をつくっていかなくやいけないという思いがあるし、それを一人一人メッセージして、会見ができました。中間に立ったコーディネーター兼通訳兼団長が私です。アラビア語の通訳はいたんですが英語の通訳は私だったので、何役もこなしてやってきましたけど、とてもよかったと思います。みんなが思い思いの思いをもってイラクを訪れて。

人と人がつながらない限り平和はない

外交には、普通、政党間の外交ってあるわけですよ。日本の社民党と朝鮮労働党とか。これは

ダメなのです。いいところばかり見てシャンシャン、となる。その次に議員外交というのもあります。例えばバーバラ・リーさんと議員である私が外交する、これも不十分なんです。なぜならば、当たり前前に運動し、活動し、平和を築こうとしている当たり前の人たちがそこにいないからです。最後は当たり前前の人と当たり前前の人仲良くならないと平和じゃないわけです。今、日本と北朝鮮はなぜ平和じゃないかというと、日本人は根深い朝鮮差別を心に秘め、北朝鮮、韓国の人たちは怨念を秘め、融解しないからです。私は思いました。北朝鮮問題で社会党が沢山の批判を得ています。妥当だと思えます。でも、全体を総括する時に、この政党間外交で表だけの外交をしてきたことの、時代背景もあるわけです。これが朝鮮労働党と自民党だったとしても結果は同じです。そこに庶民がいない、市民がいない、人間がいないからです。さっき言ったように、私のいる政治の世界は九割がウソ。時どき人間がちよつと顔を出します。例えば辻元清美の涙とか、加藤紘一さんの「くやしい」、鈴木宗男さんはオイオイ。あとは、みんなまともな顔をしてウソばかりついて、それでも人間かと言いたくなるような人ばかり。

人間が生きていく姿とか、誰と仲良くしたいか、いろんなわだかまりがあるけれど、一步でも越えたいと人が思った時に、何で相手がそう思うんだろう、何が自分たちは間違っていたんだろう、どうすればいいんだろう、って気づく。

その為にも、実はイラクに対して今必要なことは、サダム・フセインを力でねじ伏せることでもなく、空爆することでもない。安全に出来上がったものを空爆では壊せません。それは政府だけがつくったものではないから。そして、「じゃ、あんだ、どうするの。平和ボケの社民党」とよく言われますけど、私は情報公開だと思いますね。情報公開とは何かというと、一つはインターネットです。イラクでは、知識階級のごく限られた人はインターネットで直の情報を得るわけ

です。でも、庶民はまだそこに到達しない。モバイル、携帯電話、カメラ、インターネット類は国が制限している。そうすると庶民の本来持つている政治力が生きない。市民は本来賢いんです。だって、生きてて何が必要で何が不要か知っているから、そういう必要な情報を集めたり、必要な誰かとコンタクトをとったり、世界中に垣根を越えて広がっていく為の手段をあの人びとに与えれば、十分、自力で政治を変革していけるだけの力がある。日本人よりパワフルだと思えます。日本人はテレビの前で観客席にいるだけ……。彼らは閉ざされた情報の中でもやっぱり一生懸命生きていこうとしている。

それと、情報交流、経済交流。日本の商社は全部、イラクから中東から手を引きました。かつての第二次中東戦争、一九七〇何年の頃か、出光が巨大なタンクローリーをつくって石油の買い付けにサウジに行つて拍手喝采だった。もちろんその頃は、アメリカは戦争パンパン、日本はその陰で経済的に利益を追求していたので、こういうことも可能だったんですが、今は日本は経済までもアメリカに追従できない。でも、イラクに行つて、私たちの乗ったバスがわずか一時間半でエンストして三時間動かなかった時、私は考えました。やっぱり、日本車をここに輸出したいな、と。経済の交流というのは資本主義的な自由であるにしろ、人びとの自由な交流、物の自由な交流、思想の自由な交流を必ずもたします。

統制経済もダメ、経済制裁もダメ、軍事独裁もダメ、情報操作もダメ。このうちの軍事独裁は、実は軍事を軍事で叩かなくても、残る三つを十分活性化すれば自ずと衰退していきます。がんを叩くのに、「がんはなくなつたけど人間も死んだ」をやっちゃいけないのと同じ。がんはなだめなくちゃいけない。まあまあ、と、免疫力を高める、活性力を高める。こんなことは医学の常識なんです。これが私のイラク処方です。

情熱に溢れたアメリカの三十万人反戦集会

次に、イラク攻撃をやるぞやると言っているアメリカに飛んでいきました。まず、ボストンに寄りたい用があった。医療改革の為にボストンに住んでいる在日韓国人の方で、日本からアメリカに行つて、日本の医療が余りにも市場経済主義に侵されて、命の根源も忘れているのを見て、アメリカに倣つちやいけない、とアメリカから警告している、有名なお医者さんです。日本の医者たちもこの頃、彼の意見をよくとりあげるのですが、その人と会つてインタビューして、「日本の国会に来てください」とお願いしてゲット。

そして、ワシントンでの三十万人の反戦集会に、日本の平和団体を代表して英語でスピーチしろつて言うから、二日徹夜して、というのはウソだけど、娘に助けてもらいながら、英訳が長かつたので、エキスだけを覚えめました。覚えなきゃいけないから努力しました。

三十万人集会というのは、実数三十万人なんです。ウソじゃない。主催者発表、ハーフミリオン、百万の半分、五十万。警察発表二十万。でも、三十万はいましたね。ホワイトハウスの前のシビックセンターというのだっ広い広場。もう寒くて仕方ない所に、アメリカの北部と東部、中西部からも来ていましたね。ミネソタからバスで二十四時間かけて来たという人たちもいました。西海岸はロスで大集会でした。

人権こそ平和の基本

そのことを書いたチラシが、お目にかけた英語の表裏のチラシです。これは呼びかけですけど、

STOP THE WAR AGAINST IRAQ イラク戦争を止めろというチラシですね。これは前もって配られていたんですけど、ここにいるのは、マルチン・ルター・キング。もう暗殺されましたけど、彼がかつてベトナム戦争の時、いわゆるベトナム戦争に反対する時に、もちろん AGAINST WAR だったんだけど、自分たちの黒人差別の問題と平和運動の問題をリンクさせて、提案した。彼はその後殺されちゃったけど、それは、アメリカ社会の本質というか、根源に迫ったからだと思うんです。アメリカにはやっぱりいろんな人種差別がある。人種と人種、白人と非白人の差別。いろんな矛盾が非常に社会を不安定にしている。人種を越え仲良くやっていこうという彼のメッセージは、政治を行なう側にはすごく怖かったと思うんです。戦争を起こすなということ以上に。でも、彼の撒いた種はちょうど三十年して今、本当に各所に広がって、例えばウーマンリブの運動の人やキューバからも来ていました。かつてアメリカに攻撃されたキューバです。そして、フィリピン、韓国、英国、それから国内のムスリム、イスラム系の宗教団体、黒人のマルチン・ルター・キングの運動を継承する人たちなど……。

MONEY FOR JOB SCHOOL HELP CARE AND HOUSING, NOT FOR WAR 金を仕事と学校と医療と家によこせなど。スローガンを掲げて次つぎに演台に立つんですけど、「私たち母子家庭は家がない、私たちに住む家をよこせ、そして戦争はするな」必ず「戦争」とリンクするんです。労働団体は「おれたちは職がない、仕事に金をよこせ、戦争なんかに使うな」すぐストリートで当たり前なんだけど、なんで日本でそうならないのかなと思いつつながら、でも、これをアメリカ流にやるのはダメだから、日本にはきつと日本のやり方があるぞと決意して帰ってきました。

ブッシュっておバカさんで、本当にあの人は思慮がないと思うけど、こういう最中に、アファ

「マティブアクションと言って、例えば黒人とかマイノリティを優先して学校に入学させることをやっている大学に行って「もうやめる」と言ってみたり……、今そんなことを言ったらいけないということをバンバンやる。こういう反戦団体にもある意味では恐怖を持ちながら、「誰が何と言おうと、やるぞ」と言う。一方、ヨーロッパのブレアさんも、ブレながらも、最後には、「国民が何と言おうとやるぞ」と、言ってみたり……。でも、ドイツのシュレイダーは反戦を掲げて当選したし、フランスはもともと「自分勝手なアメリカ人め、お前らは間違つとる」と言ってるんです。それからロシアも一生懸命綱引きをしているところですね。

市民に情報が公開されている議会

ここで一番私が言いたいのは、今アメリカの議会は全部Cスパンという定まったチャンネルがあつて、市民はいつでも議会中継を全部見られるんです。日本の予算委員会なんか、NHKがこれぞと思うところを独占して放映しているわけでしょ。民放は全く中継できない、規制ですよ。これによって操作しているんです。どんなに真面目な議員がどんな委員会でも何を取り上げても、メディアという媒体が一回カットしてからしか私たちに情報を与えない。

だから日本においても情報公開がキーワード。イラクにおいても情報公開がキーワード。北朝鮮も情報公開でぶっ飛びますよね。そういう時代に立っていて、Cスパンは何とこの集会を全部収録中継したのです。Cスパンには二チャンネルあり、Cスパン2ということで全部放映した日本のメディアにそんなのありますか。日比谷の野音の集会を、あるいはどこかの集会を次つぎに放映すれば、反対している人の声が市民に届くのに、しない。

今の時代を変えるのに必要なことは、本来は、賢い市民を、変なマス・メディアを通さないうで、パーソナル・メディア、市民が選択するメディアにして、そのことによって、政治力を養うことです。決して庶民はバカではないのです。それを権力は知っているから、隠すんです。知っているからこそ隠していると私は思います。で、毎日毎日、北朝鮮の拉致家族被害者の報道ばかり。今日はどこそこに行ったとか……、いいですよ。しかし、そんなもの見たくないという自由だつてあるわけですよ。今日の国会で誰が寝たかとか、そういうことのほうが見たい。扇大臣だつて、態度悪いんですから。居眠りだつてしよつちゅうだし。そういうのを国民が見た時に、有権者つて、それを見て、あんなダメ、違う、つてやつていくような政治にしないといけない。

実は日本でも国会の中継をテレビのケーブルで流そうというのがあるんだけど、NHKの厚い壁と総務省の規制によってストップさせられている。来週水曜日、〈国会テレビを救う会〉というのに出て、この問題を訴えようと思っています。アメリカでは一人約十円に近いお金を基本料金に上乗せしているだけで、みんな基本的な情報が受けられる。そして、各家庭にチャンネルでも入っている。私は政治というのはそういうものだと思います。だつて私たちが生きる為に私たちの選択を聞いているんですよ。代表者がやっていることを私たちは見る権利、知る権利があります。多少の手数料で、十円でも百円払つても見えるようにする。そこまで改革しないと、日本の腐った政治は直らないと思うわけです。

司会 お心のこもる具体的なお話で、いま私たちに何が必要がよくわかりました。ありがとうございます。これから質問に入ります。どしどし質問してください。

Q1 何なんでもイラクを攻撃したいアメリカ。これにどんな運動をすればいいでしょう。

これまでアメリカが何をしたか。アメリカの空爆、とりわけ核で受けた日本の被害なども、アメリカに伝える必要がありますね。

加害国アメリカに対して日本はどんな努力を運動としてやってきたか、私の知らないところであったんだろうけど、量として見た場合、やっぱりまだ少ないですね。しかも、この前、ワシントンのスミソニアン記念館で原爆の常設展が拒否されたように、広島・長崎を隠したいんです、アメリカは。でも、それは私たちも被害性だけ訴えるのではなくて、核がもたらす不幸に絶対私たちは譲らないということを示したいわけでしょう。だって、平和憲法と反核は国是。そのことをもつとあらゆるレベルで運動していかないと、FAR EAST ASIAの日本で、遠い鐘にしかありません。何でこんなことを言うかというと、韓国で米軍が少女たちをひき殺したあの問題では韓国から市民運動団体が来て発言してましたけど、とてもビッドなんです。でも、広島・長崎はアメリカの人にとっては遠いメモリーなんです。今一番怖いのは何といっても核ですよ。だって無差別で、そして本当にたつた一つですべてが吹っ飛ぶ。もつともつと伝えるべきです。私がこんなことを言うと、今までの反核運動を批判しているみたいでいけないんだけど、世界に事実を知らせる努力をもつともつと。これからはインターネットがあるからどんどん利用しよう。万能じゃないけれど、より広めやすい手段を手に入れましたよね。

語学の壁は大きかったと思うんです。イラクでは五年生から英語ですよ。日本では中学から英語。それも文法ばかりで、自分の気持ちを伝える英語にはならない。日本人ってけなげで恥ずかしがりやだから、間違っちゃいけないと思うから喋らない。間違っても伝えられればいい。気持ちを伝えることが大事。そういうふうにもつともつと若い人にはやってほしいですね。

広島・長崎を風化させない為に、例えば広島で秋葉さんが市長に再選されたら、広島市が主催してアメリカの国会議員を呼ぶとか、民間の反核団体を呼ぶとか、市民団体を呼ぶとか、核の原点の広島・長崎に来て見てもらいたい。私は広島・長崎というのは、本当に日本が伝えていくしかない世界的な役目を持っている、と思います。バーバラさんも広島でショックを受けて帰って、自分の仲間に、ぜひとも伝えて、他の議員も来るようにしたいって言っていました。本来はそういう時、アメリカの議員は、私がイラクに行ったように身銭をきって来たほうがいいんですよ。でも、最初はしょうがないですね。市からお金を出してでも来てもらって見せたほうがいい。やっぱり見なきゃわからない。

Q2 それぞれのところで、いろんな運動を大公開しますよね。何々キャンペーンって……。ああいうのは、どうすればできるんでしょう。

アメリカの、ナチスドイツの展示館の中にも、日本がやったことも出てきているし、とにかく向こうの宣伝力はものすごい。でも、事実だからね。結局、戦争というのはそういう形で極めて理不尽に、負けた側の悪事は繰返し公開される。でもアメリカでも、誰か議員が言っていましたよね、イラク攻撃に反対する議員が今度、下院で百人以上出たんだと思いますが、その中で結構古い議員の一人が、「第二次大戦の時、アメリカはパールハーバーで奇襲をされたことを理由に自らの憲法を破った。日本に原爆を落としたということは、アメリカが自ら持っている憲法、無差別殺戮を禁じる法を自ら破った。その時から、歴史は第二次大戦は物事の終わりではなくて、人類対核の新たな恐怖の時代に突入する出発点となった」というようなことを言っていました。私もそうだと思います。それが五十年経って、現実には本当に何が起こるかわからない状況になった。

ただ残念なのは、日本人が、あの戦争をきちんと総括してないことです。逆に戦後の日本の総括が、最近、ジョンダワーというアメリカの人によってなされているわけです。なぜなら、戦後の占領の資料は全部アメリカに持っていかれた。原爆の資料だって全部持っていかれたでしょ。

私たちは自分の国の歴史すら本当には検証できない。それで、ある人たちは全否定する。結局あの時代は悪かったと。軍国教育も悪かった、と。確かに昨日まで軍国教育していた先生が、急に民主教育を語るような……そういう連続性のない総括はだめですよ。全部悪で、急に全部が善になるわけじゃない。今の北朝鮮との問題もここまで日本が簡単にふわっと持っていかれちゃうのは、やっぱりあの第二次大戦で私たちが強制連行してきた異国の人にどんなふうに接していたか、それはすごく根深いし、そのことを自ら反省してみないから、自ら考えないから、あんなことになるんですね。自ら検証する手段を奪うというのが権力のやり方だったかもしれないと思う。ジョンダワーは優れた人ですが、なぜアメリカ人に、こういうことを書かれなきゃいけないのか。自らが自らを検証して、日本は歴史ということを、天皇制も含めてきちんと見ていかないと……。今、東大病院で手術中の方のほうで、よっぱどいいことを言っている。「天皇家の祖先は朝鮮半島からやってまいりました」と。これが外国のメディアには沢山出ても、日本ではこれっぽっちしか出ない。あの美智子さんだって、いいこと言ってるじゃない。「国民の皆が、拉致の事実を忘れていたことが本当に申しわけないことだったと思います」と。誰よりもすぐれたことを、なぜ天皇家に言われなくちゃならないかと思えますね。国民自身もつとめと、そういう意味で本当に自らを見直し、「何をしなくてはならないか」と考えなくてはと思います。

私、この頃いつも思うんですけど、ドクター・リーさんという在日韓国人の方に会い、昨日、支援しているキムさんという在日韓国人で下半身マヒの人に会いました。やっぱり存在自身が鋭

いんですよね。この問題が何かということを決えず私たちに突きつける。私たちは逆にレイシズムの壁で、本質を突きつけられているのに、見ないふり。逃げています。

この北朝鮮問題が起こって、私が一番に読み、話を聞きに行ったのは、姜尚中さんという東大の教授です。彼は十八歳まで日本名を名乗ってきた人です。ある時、自分は姜尚中であると名前を変え、指紋の押捺を拒否する。その後指紋を押捺し、その時の日本人の示した反応とかいろいろなことを書いています。いつもいつも異質な存在であるからこそ、敏感に物事を判断している。障害のある人たちもそうですよ。障害者で在日外国人だと、二重に、ピカピカキンキンですね。

本当に何が問題で何をどうすればよいか、敵対的に解決するんじゃないかと、あなたたちにも変わってほしい、私たちもこうしたい、ということを決えず突きつけてくれている存在に私たちも敏感でありたい。例えば日本にいるイスラムの人たちとでもいいですし、在日の人でもいいですし、今、生活レベルで交流できるんだから、心を開いて向き合い、先方の気持ちに応えましょうよ。

辻元清美が本当にいいことを言いました。決算委員会の場でしたけど、「アフガン難民を十万人受け入れなさい」と。日本の財力に見合っただけで受け入れなさいという意味ですよ、当然ですよ。だって、日本に来れば平穏があるんじゃないかと思って逃れて来たアフガン難民が、自殺するよ。うな社会では困るんですよ。二十何人しか難民を受け入れないんだから。日本に来て独房みたいなところに入られて、自殺していくような社会。労災保険もないようなところで働いて労働災害にあつて働けなくなつて自殺したアフガン青年がいるじゃない。そういうひとつひとつをとつても、もつともつと異文化コミュニケーションしたら、日本は、世界で一番穏やかに成熟できる可能性を秘めているんですよ。それなのに、全部をシャットアウトしているので世界の孤児になり、退化していき、アジアにおける嫌われ者になつていくような気がします。答えにならなかったか

もしれないけど。

Q3 アメリカはイラクが核兵器をつくることに反対してますよね。アメリカはいっぱい持っているわけですよ。全部の国にやめろというなら話はわかりますよね。そのへんを、ちよつと……。

もともと核拡散防止条約というのは、五か国しか持つてはいけないと言っているけど、イスラエルも持つているし、インドもパキスタンも持つている。アメリカと仲良しだったら持つていいということですよ。やつぱり、それはおかしい。日本の国是というか、憲法に述べられた、核や武力によらない紛争の解決を、日本の政治家はどうしてもっと高らかに言わないのか。日本の歴代総理大臣が、そういうことを吹聴したつていい。もつともつと。チャンスはいくらでもあつたでしょうにね。それをのがした日本がやつぱり責任があると思います。だつて経済大国だつた時、も言わなかつたし、ひたすら金稼ぎに専念したし、今だつて世界で二位の経済大国なんだけど、「アメリカがやつた後始末を私たちはやりますよ、ただのガソリンスタンドをベルシャ湾ではやりますよ、皆さん使つてください」と。しかも、「イラクをほこぼこに壊してもいいですよ、ODAで企業にも儲けさせて修復しますから」と言っている。そもそもODA基準を戦後処理に置き換えてきた日本のODAの考え方もいけないんですよ。貧困とか飢餓とか絶対的な人権侵害に対して、日本が経済的な活力、余力、世界の平和の為に憲法に則つてやらなきゃいけない。それがODAのはずです。だから他の国の戦後復興に貢献するなどというのはODA基本原則の改変ですね。いつも、中国にごめんなさい、韓国にごめんなさい、北朝鮮にごめんなさい、ODAでやりましょう、と。ODAはお詫び代じゃないんですよ。

そうやつてみると、国会に入つて二年半ですけど、なんでこんな当たり前のことをやらない国

議員ばかりがこんなに選ばれて当選していくんだろうと。いやー（嘆息）

そこで、どうすれば平和運動が実際の生活や思いとリンクしながらいい政治家を生むか……。私は、やっぱり、政党で人を選ぶというより、市民が政治家を育てることだと思えます。政治家も市民も両方でもたれあつていたら、いいことなんか起こりつこない。うちに何回来てくれた、挨拶が足りない、なんだかんだ、と。こっちはイラクとアメリカで忙しいんだから。戦争になったら、私が行けなかったこと、泣いて悔やむよ、と思いつながら、でも、やっぱり行けば、ああ今日はこんな時間にシャッター閉めてるから、やっぱり経済不況もひどいんだなとわかるから、胸が痛むのです。私は実は地回りが嫌いじゃないんですよ。むしろ、こんなにちは、と訪ねるのは大好きです。相手の暮らしとかわかるから。もともと私は、『家政婦は見た』みたいなものですから、訪問看護が大好きです。全然違うんですよ、病院に来て患者さん診るのと。だいたい、おしやれしてくるでしょ、病院に来る時はみんな。家に行ったらよくわかりますよ。でも、身は一つだから、今はできないのです。庶民もできるだけ情報を得て、変な人を当選させないで、賢く生きていきましょう、と言いたいです。

Q4 アメリカでは、ワシントンでもたくさん人が出て、五十万と報道されていますけど、日本で同じ一月十八日にやったのは七千人ですか。日本の人口とアメリカの人口はどれくらい違うか。実はアメリカは日本の二倍ですよ。それなのに、一万人と五十万人。この差は何なのか。これは平和活動がある意味ですと長い間、特殊な人しかやってこないといううな、ある意味での偏見が一般の人たちにあるんじゃないか。これは、変な政治家を選ぶとかと同じようなことで、一般の市民が、政治に対しても、戦争をやらないということに対しても、「それは特別な人が考えることで、私たちとあまり関係ないよ」と、なぜ

か思い込まされているか、思い込んでいないか、と思います。アメリカと日本の違い、それは28
どうやって崩していったらいいのだろう。やっぱり一般の人たちがつとすんなり入れるような形、これ
を作っていかねばいけないのではないかと感じました。

一・一八の会場で、舞台の上で見えていましたら、半分はのぼり旗がなくてプラカードでした、それにつ
いて、若い人たちは感想文で、「シュプレヒコールをやっている人たちがいた。あれはいやだった」と。
「のぼり旗、あれも異様だ」と。アメリカも、のぼり旗のようなものがあるんですね、だけどあれはメッ
セージが書いてある。日本は自分の所属。その違いを崩していかないと。シュプレヒコールやのぼり旗で
やっているところには入りたくないと言う人たちが多い。平和運動をもっと広げる為に、社民党さんから
そういうことをやっていただいたらと思うんです。のぼり旗がいけないというんじゃない、メッセー
ジを書いたものを考えていただいたらどうでしょうか。

Q5 イーリス艦の出動について、小泉さんと何とかさんが一緒に話し合って決めたというようなことが
新聞に出ていたのですが、それについてなぜ国会で討議しないんだという怒りの声をあげた国会議員がい
たということは聞こえてこないのですね。その実情を伺いたい。

前者について。何で日本で七千人でアメリカで三十万人なんだろう、ということですが、実は
私はあの集会の中から考えていました。これは前に、バーバラ・リーさんの地元、バークレーで
デモをした時も、一人一人がきちんと意思表示をするんですね。あそこは移民労働者、メキシコ
とかいろんな所からの移民労働者と一緒に仲間にして、MONEY FOR JOB とやって
ました。仕事に金を。カッコイイ。そうしたら、バーバラさんがこの前、八〇%の得票率で再選
された。彼女はブッシュのイラク攻撃にも反対だし、アフガン攻撃にも反対して、再選されるか
どうかは非常に国民的な関心事だったんですが、八割以上の票を得たんです。彼女は言った。

「私にはきちんと労働団体が支援してくれる安心感がある」と。日本の、私のいる政党なんかは、とある労働団体からは来るな、と呼ばれない。そうやって反目しあっている限りダメなんですよ。その労働団体は頭にちよこつとつけたように平和と言うけれど、本気でやる気はない。本気でやるというのはどういうことかという、平和というのは、この国にいる人びとの差別からきちんと考えることです。例えば男性と女性の差だつてそう。女性にパートは押しつけ、正社員は自分たち。この構造を本気で変えようと思った時、自ずと平和の問題は違ってくるんです。でも、未組織労働者やパートを切り捨てて、自分たちは正職にぬくぬくしてる。これが労働団体です。この構造をとっている限り本当の平和運動は育たない。だって、人間は働いて生きている。働くことを誇りにしたい。その時にお互い働きあっている仲間がいちがみあっていて、運動なんかできるわけがない。他者の痛みなんか、わかるわけがない。平和の意味なんか伝わるわけがない。これが一つ大きなことだと思います。

バーバラさんがくしくも言った。「私には労働団体がついている」と。本当にそのパークレーのデモと集会は感動的でしたよ。もちろん何十万じゃない、七千人くらいだったと思います。でも、思い思いのプラカード、太鼓なんかも持って。それもファッションじゃない。プラカードに思いが込められている。一人一人、そうやって持つて歩いて、マイノリティの人でまだこの国に来て一か月しか経たない人でもマイクを持つて話す。女性で、パートでも、「自分に仕事をよこせ」と、みんなの前で演説するんです。そういうことが当たり前前の風景にならないとダメだな、と思います。労働団体が社民党を排除するからダメなんじゃなくて、排除の思想はダメですよ。それから、もう一つは、実は私たちの世代の責任です。向こうで、アンサーという集会をした人たちの中心は、ブライラム・ベッカーという弟とリチャード・ベッカーというお兄さんです。

リチャード・ベッカーは私と同じくらいの歳で、ベトナム反戦エイジですよ。その人たちが本
当に息の長い、そして、独善に陥ることのない、広がりのあるネットワークをつくってきた三十
年が三十万人だと、私は思いました。例えば浮田さんがアメリカに行き、コーネル大学で学生た
ちとその周りにいるベトナム反戦エイジの私たちくらいの人たちが一緒になって白いリボン運動
をしているのに共感して、〈白いリボン〉を日本に持ち帰った。日本でいますか。早稲田大学卒
業、東大：で本当に学生と一緒になつてゼネレーションを越えて平和運動を続けていこうとい
う人が……。アメリカの会場には七十代くらいの女性もいる。若い子、ハーバード大学のキャ
ピキャビの子もいる。このエイジの厚さ。これは、学びたいですね。

実は議員をやる前には、平和運動は誰かがやってくれると思つてた。でも、候補者になつちや
つた。当選までしちやつたから、しょうがない、最後の命は私が守るぞと。イラクにもアメリカ
にもアフガンにも行つて、もつとビビッドにこの社会を変えようと、そういう努力をしています。
やつぱり、憲法を最後の寄りどころにしてくれるのが社民党であると、結局、社民党にくるん
ですよ。ホームレスの問題にしろ、障害者の問題にしろ。だからそれだけ弱い人たちの期待があ
ることは重々わかつています。そしてそのことを受けとめて社民党も変わっていかなければいけ
ないということもわかつているつもりです。ただ、変化というのは一朝一夕にはできない。例え
ば北朝鮮問題でも、なぜそういったことが起きたのか。過去についても、単に謝るのではなくて、
なぜというところで、政党外交の問題とかもあると思いますし、南北統一という考え方でも問題
はまだあると思つていますけど、そういう己の、自分たちが考えて、足りないところを何とか埋
め、画一的と言われる若い人との乖離をなくしていきたいと思つているのです。とにかく弱者と
いわれる方がたの為にがんばりたいと思います。名古屋の手錠の件だって、社民党が初めて明ら

かにして、私も寒い名古屋の監獄にも行ってきたわけです。

イラクにも、実は自民党の議員も私たちより前に行つて、同じような思いを持っているんですよ。でも、彼は思いを出せない。武力攻撃事態法の委員会の委員長。推進している側ですから、行つてやつぱり何か心にこだわりは持っているんでしょう。私は、やつぱり運動は連帯したいから広げていきたいから、党派を越えて、自民党にだつて行つてほしいんですよ。でも、組織の論理があまりにも凝り固まつているので、結局は運動を広げられないんじゃないかな、と帰ってくる飛行機の中で思いました。

異質なものとどうやつてぶつかり合ひながらものごとをつくっていくか、私は統一戦線論なんですけど、日本には二大政党論がありますね。いろんな主張をして合意点を見つけて、より民主的に自分たちが一歩進むプロセスを経ている限り、いつも、平家か源氏かになつて、マイノリティの声は消されていく。アメリカは、マイノリティの声を民主党が吸収しているんですよ。日本の二大勢力の党がマイノリティの声を吸収すれば私はそれで手を打つてもいいと思うし、そういうつくり方もあるかもしれない。でも、残念なことにそうならない現状。その中で自分たちが何をやらなきゃいけないか、若い人がどんな時代を望むか。

私は自分自身が学生運動世代ですから、学生時代に学んだこととしてすごく大きかったし抜けないですよ。今の学生たちはすごく政治的にアパシーですね。一見アパシーを装わなくちゃ生きていけないようにされている、一番好きな子に、自分の本音を言っちゃいけないと思わされている子どもたちから治していかないと、急にその先にとつてつたように政治があるわけじゃないと思う。これが広がらない大きな原因だと思う。何が怖いって、自分が友達から嫌われることが怖いと言う子が一番多いんですよ。親から嫌われることも怖い。で、ある日切れて、家庭内暴力

になるわけですよ。子どもたちは小さい頃から、自分の意見を表明できるような、違いがあるのが当たり前、だからコミュニケーションしよう、という社会にしたいですね。私は日本の今の革新運動の衰退の根は深いと思います。一朝一夕では治らない。でも、もしかしたら二十年後、三十年後には……（拍手）。でもやっぱりここで今、頑張らないといけない（拍手）。

司会 パワフルな阿部さんから、たくさんエネルギーを頂きました。このエネルギーで戦争阻止へ、私たちの力の限りたたかきましょう。ありがとうございます。

二〇〇三年一月二五日 藤沢市市民活動推進センター会議室にて

主催 〈平和の白いリボン行動実行委員会・藤沢〉 共催 〈あこら湘南〉（まとめ 古賀節子）

「若者たちに平和のメッセージを如何に伝えていくか」

講師 羽仁カンタさん（クリエーター）

3月29日（土） 14時～16時 藤沢カトリック教会ホールで

主催はCHANCE!（平和を求める個人のネットワークⅡ9・11の直後に、「テロや戦争を、平和を創る「チャンス」にしようと、主にインターネットを通じて集まったネットワーク）。

羽仁さんは、その呼びかけ人です。共催は〈平和の白いリボン行動実行委員会〉〈平和ミュージカル・ふじさわ〉〈あこら湘南〉です。おいでをお待ちしています。

アメリカは、なぜイラクを狙ったのか

アジア経済研究所 地域研究第二部主任研究員
酒井啓子さんに聞く

聞きて 斎藤千代

斎藤 お久しぶりです。十二年前の湾岸戦争の時は、正確で貴重な情報をたくさん与えて下さったことを、今でも感謝しています。

あの時、「フセインは危険」という情報が、米国だけでなく欧州諸国からも繰り返し発信され、イラク攻撃の布陣が三年も前から着々と敷かれていたこと、フセインは、クウェートを「満州国」にしようとしているわけではなく、「香港」にしたいと思っていることなど、基本的な情報はじめ、現地に行つてからのこまごまとした注意まで教えて頂いたお蔭で、大きなショックの中でも、何とか取材ができました。

実は、あのあとちょうど一年後に、もう一度イラクに行ったのです。イラクの実状を、帰国後、全国を回って話して歩きましたら、二百万円以上もカンパが集まりましたので、それを医薬品に

替えて届けることが目的でしたが、停戦直後の取材の時はあまりのショックに自分を失ったので、本（「見えない戦争」）に発表したこと間違いがあってはいけなと、本に書いたすべての地点をもう一度検証しました。

九一年に本をだしたおかげで、希望するところには全部案内してもらえ、九一年には入れなかった内戦地域、北のクルド地域から南のバスラまで、約一か月歩きました。この見聞は、事情があつて本にはしなかったのですが、イラクは私にとって、ますますふるさとのような国になりました。それだけに、米国の攻撃準備が進められている今、居ても立つてもいられない気持ちです。イラクに何年もお住みになって、バアス党の組織はじめ、いろいろな現実をきめ細かく検証なさり、今もアジ研で、主任研究員とし

て世界に目くばりをなさっておられる酒井さんに、日本の新聞やテレビに出ていない真実をお聞きしたくにお訪ねしました。

酒井 もちろん戦争が大きな問題をかかえていることは大前提になりますので、それはあえて申しません。ただ、たいへんネガティブな要因としては、アメリカは今回、湾岸戦争の時以上にやる気ですね。アメリカの政策決定に近い人たちの話を聞いていても、「よくも悪くも、今のブッシュのやり方を見ていると、アメリカの与論の八割が反対だとしても、やるだろう」という判断です。

しかも、言われておりますように、これは理念型の決定が強い。リアリスティックな発想が弱くなつてますから、戦争にお金がかかるとか、人が死ぬからやめようという発想は今のところない。「人が死んでもお金がかかってもやる」という発想のほうが強くなっています。そういう意味ではどうやって止められるか、止められる要因がない状態ですね。イラク政府はそこらへんを一番よくわかつていて、止められるというふうには全く考えてない状況があります。基本的に「フセイン政権を倒す」ということが大前提にあり、国連の大量破壊兵器査察もその線上にあります。

今の査察団の団長自身は本音では、これで十分と思つてゐるのに、アメリカやイギリスが査察を強めているというのが現状です。決して大量破壊兵器を廃棄するために査察団を送り込んでゐるわけではなくて、進攻の口実を探すためですから、手ぶらで帰つて来させることは、アメリカとしてはさせないでしょうね。

その執念の原点は何ですか？

9・11です。9・11のショックでこうなつてゐるわけです。

でもイラクは9・11とは関係がないのでしょうか。

ええ。でも結局は同じことなのです。アメリカから見ればビン・ラーディンもフセインも同じ。中東の反米勢力は、皆同じに見えてゐる。

私たちから見ると、彼らに弾圧を加えれば加えるほど、テロの危険性はかえつて増すような気がします……。

「だから懐柔しよう」というのがこれまでの方針でした

が、今のアメリカは、そうしないのが彼らのスタンスのようには思えます。テロリストにやられるのなら、防壁を高くすればいい。しかもテロリストを根絶するためには、完全にテロと関係のないイラクに、脅しをかける。「テロリストとあれだけ関係がなくても、あそこまでやるんだぞ」というところを見せておけば、テロリストをかくまう国、資金を提供する国、あるいはテロリストが生まれた国すらも、プレッシャーがかかる。例えば、サウジアラビアなどは大きなプレッシャーになるわけです。「サウジアラビアの石油はいつさい買う必要はない。原油のためにあんな国とつきあうくらいなら、サウジアラビアの政権を転覆させよう」という意見すらあります。

アメリカは石油のためにイラクを狙っているという意見がありますが、私は全く違うと思います。原因は石油ではなく9・11です。イラクは、石油の油田をアメリカに売却しても良いというアイディアをほのめかしていますが、アメリカにはこうした考えを受け入れる余地は全くない。戦費は一千億ドルから二千億ドルかかるのですが、油田を接収したとしても、イラクの石油の生産量はいま最大見積も

っても年間百四十億ドル程度ですから、一千億から二千億ドルの戦費の回収には七、八年かかる計算です。そろばん勘定で考えれば全く見合う戦争ではないわけです。

しかし、石油の埋蔵量は世界第二位。その石油を抑えておくことは、長期的には非常に有利です。それに、いまアメリカの経済状態は最低ですね。一千億ドルから三千億ドルといえば、十二兆から二十四兆円。そんな巨費を費やしてブッシュ政権を維持できるのですか？

ブッシュの評価は、国内政策に対しては低いのですが、対外政策は高いのです。これでイラクを叩かないと、外交でも国内政策でもブッシュはマイナスになる。国内政策はまずくても、外に対しては断固とした態度をとるとというのがプラスになっているのです。9・11以降のアメリカの精神的ムードを立て直すのには、どうしても断固として戦うことが必要なのです。

それはダグラス・ラミスさんも指摘しておられますね。それにしても、そんなにアグレッシブになっているのですか？！

アグレッシブというよりも、そういう精神の回路になっているのです。対外不信——すべてのものが自分を傷つけるという不信を抱いている。9・11当時よりは、国内の平和集会もできるくらいまでにはなっていますが、国内に対して、一言でも批判するものがあれば、すべて敵だとみなす精神状態にあるのです。

では、たとえば私が反米集会を企画したとすると、ヒザがでなくなる…。

その可能性はあります。ドイツがいい例です。9・11以後、ドイツは、かなりはつきりしたアメリカ批判をしていましたが、そのあとのドイツいじめは大変なものがありません。まず、メディア戦略ですね。イラクの化学兵器、イラクの大量破壊兵器の発進元はドイツであるというキャンペーンを展開しています。

湾岸戦争の時のフセイン批判キャンペーンと同じですね。

もっと悪いかもしれません。あの時は、国連という国際機関を通して正当性を得ようという意向が強かった。国連

が動かなければアメリカは動けないという認識がはつきりありましたが、今回はパウエルとその周辺が「一応国際社会の枠組にそってやらなければ」と主張したのでここまで来ましたが、プッシュは国連のお墨つきがなくてもやる、という方針ですから、またそこに戻るかもしれません。

そういうことを強行すれば国際的孤児になるのではありませんか。

アメリカは一国だけでもそれがやれる国。国連を脱退しても生きてゆける国ですから。冷戦後アメリカは常に一極集中と言われてきましたが、ここになって初めて、「アメリカは、世界の中で唯一自給できて誰にも遠慮せず自ら決定して、それを実行する力がある国だ」という実力を実感して、実行しているのだと思います。要するに、我慢する必要も理由もないのです。国際社会につきあつて何のメリットがあるのかということを考えると、9・11以降の発想は、「国際機関の下で安全保障は得られない、単独でも自らを守るしかないのだ」という実感が強いのだと思います。

国連の査察団も信用してないのですか。

全然信用してませんね。むしろ邪魔に思っていると云って良い。

九九年の十二月に採択された、国連決議二二八四は、「イラクが査察に全面協力するなら経済制裁を停止する」としています。とすれば、今回の査察に全面的に協力すれば、制裁が解除されるわけですね。

難しいところですね。一二八四はイラクが査察団を忌避して、査察団を入れることすら非常に難しくなった時点で採択された決議だという経緯があります。ロシアやフランスが中心になって、ひたすらイラクが受け入れやすい内容をつくったのです。今この時点になって、それを生きたものとするのは非現実的だと、どここの国も考えていると思います。

これまで、一四四一をつくらなくてもいいではないかと云っていた根拠は一二八四があるからでした。一四四一を去年十一月につくった時点で「一二八四を無効にした」という思いがアメリカにはあった。もちろんこれは、これか

ら評決でいろいろもめてくる、と思います。

アメリカ政府は安保理で、一月十六日に、ネグロポンテ国連大使が二二八四決議を無効にする提案をしましたが、他のすべての理事国が反対しましたね。

ロシアやフランスは、「イラクを説得するために、一二八四はまだ有効だ」と言っていますが、現実的な判断から言つと、「同じ法律であれば新しい法律が有効である」という認識に手のひらを返してくる可能性があります。恐らくアメリカは一四四一のほうがいろいろと厳しいので有効だ」と言ってくると思います。

アメリカの前で、イラクは、それこそ蠅螂のような存在。「イラクが脅威」ということ自体、こっけいなように、私たち庶民には思えますが……。

イラクが対外的に脅威があるとは、誰も考えていません。クウェートやヨルダンのような周辺国でも、そうは考えてない。CIAですら「イラクに攻撃能力はない」という報告を出していますから、イラクが対外的に脅威であるとい

うことは全く考慮していない。唯一アメリカがそれを理由に使ったのは、これなら唯一「国連決議違反」という動かしがたい理由が立てられるからです。イラクが大量破壊兵器をほかと比べて持つていようが持つてまいが、多からうが少なからうが、とりあえず大量破壊兵器の放棄をイラクは湾岸戦争の停戦決議で義務づけられているのです。パキスタンにしてもインドにしてもイスラエルにしても核を持つてゐるのは誰もが知つていますが、それに対して査察団を送らなければならないという決議は定められてはいない。問題にはされていきますけれども。そこまでエスカレートしたケースは、パキスタンが核実験をやつたあと少し経済制裁をかけられただけで、それもアフガンの爆撃のあたりで解除されました。正式に国際法的に義務づけられたのはイラクだけなのです。

その意味でアメリカの極端な議論としては、「湾岸戦争の停戦決議に対して虚偽の申告をしているとか、実行してない以上、停戦決議は無効である」という主張が成立する。停戦決議をイラク側は守らなかつたということで、アメリカの理論としては、「湾岸戦争は終わつてない」ということ

になる。しかし、そこで戦争に持つていくのには、さすがに無理があるという判断で、新しい決議一四四一を出し、それに対する違反だということで戦争に持つていこうとしている。要するに根本には「叩く」という前提がありますから、理由としては、最悪の場合は「湾岸戦争停戦違反」ということで十年ぶりに湾岸戦争をもう一回やるという議論がありました。これはさすがに国内外を説得できませんからあきらめました。いまだに「ビンラーディンとサダム・フセインとのつながり」というのは、いろんなところで議論されてますね。

その議論も、今のところ証拠不十分ということで理由には立てていませんが、証拠をつくらうと思えばいくらでもつくることができるわけです。ある日突然そういう証拠が見つかりましたということで、戦いに持つていく可能性もあるわけです。

ますます絶望的な気持ちになりました。日本の庶民の目から見ますと、アメリカの言い分は、大阪夏の陣を思い出させますね。外堀の通称である総堀を埋めよということで納得させて、結局内

堀まで含めたすべての堀を埋め尽くして大阪城をまるはだかにした、あれと同じという感じ。

私は九一年と九二年に、湾岸戦争の被爆の跡を調べましたが、とくに九二年は九一年には見られなかった場所もくまなく見る機会を得て、あの戦争は、アメリカの軍需資本にとって絶対に必要な戦争だったという思いを深くしました。

九二年のその見聞は、どこにも発表していないのですが、たとえば無傷に見えるビルに近寄ってみると、三階の三五〇号室といった精度で、狙った箇所が確実に破壊されている。後に劣化ウランの使用が証明されたアルメーダの避難壕などは、地下にあった一トンの貯水槽の水がそのまま熱湯になって地下を満たし、人間の手も足もバラバラに溶かしたと、その日に現場にかけつけた人から聞きました。溶かされた人間の毛髪や皮膚が血痕と共に壁に貼りついていました。あらゆる新兵器の実験が行われたのですね。

一方、ジャーナリストのいない砂漠地帯では無差別に爆弾が落とされ、溜めに溜めていた爆弾が一挙に費消された。平和産業にソフトランディングするはずだったアメリカの軍需産業は、あの戦争で息を吹き返した。あれから十二年間に溜った殺りく兵器をここで使えば、また軍需産業が存続できる。アメリカの一番のね

らいは石油ではなく、軍需産業ではないかと私は推察しています。イラクは当初、査察そのものが、査察される側にとっては甚大な損失になる、と言っていました。それはもつともなことだと、私は思います。

ティグリスの橋で、破壊されていたのは、すべてガス管や水道管が通っていた橋でした。ビルにしても、産業上とか、市民生活上必要なビルだけがねらい打ちされていた。現代社会で「情報」は最も貴重な財産です。「査察」の名であらゆる情報が敵対関係にある側の手に入ってしまうわけですから、死活問題だとイラク側が言うのもよくわかります。こういう非人道的なことを大国が公然と実行するのを黙視していいのでしょうか。

止める力がどこにもないということですね。これまでアメリカがそういう行動をとってこなかったのは、十年前まではソ連の核の抑止力が効いていたということですね。交渉で解決するということはありません。しかし、今のロシアは、アメリカを止めるつもりは全くありません。すでに「戦後」の利権の話に入っています。むしろヨーロッパのほうでアメリカの単独行動に対する危機感という意味では抵抗は強いですね。

湾岸戦争が始まる直前、イラクのアジズ外相がソ連に何度も往復して、私たちはソ連が抑止力になるかと息をのんでテレビの画面に見入ってましたね。でも戦後すぐイラクに向かうとき、ソ連の飛行機に乗ったのですが、渡されたソ連の新聞のトップ記事はぶざまに手を挙げて降伏するイラク軍の写真。記事の文章も冷笑だけで、ソ連はポーズをとっていただけだった、と、ガンと頭を殴られたような気持ちになったのを思い出します。

今の、ブーチンのロシアは完全な覇権国家。人権意識がないことは、チェチェンを見ても明らかですね。わずかに希望が持てる」とすると、仏・独を中心とするヨーロッパの良識でしょうか。

ロシアはフランスと平和的に解決をと動いていますが、イラクに対する影響があるということをもポーズとして示しているだけの話で、基本的には米国と手を結び戦後の利権で動いている。米国にどこまでロシアの権利を認めてもらえるのかというところに話を移しているのです。

唯一希望があるとすれば、どこですか？

今の査察団は、アメリカとは、かなりぶつかっています。

ブリックスさんは繰り返し、「国連はここまでではできない

けれど、これから先はできない」ということを言い続けているのですが、言ってゴタゴタすると、一週間くらいで折れています。アメリカからのプレッシャーが強いのだと思いますけど。

国外でイラク人の科学者にインタビューをすることは亡命奨励みたいなものだからやりたくないという主張だったのですけれども、それも一月に入ってからとりあえず国内でのインタビューはやらされていますから。アメリカのプレッシャーの中でそんなに自立性のある行動ができるとは思えませんが、唯一抵抗するとすれば、次の報告書で、「真つ白は出せないけれども数か月査察を継続する必要があるのだ」と主張することです。いくらなんでも査察団が毎日入って査察をしているなかで首都空爆ということは無いと思いますので、米国から「出る出る」といわれても頑張り続けることはできると思います。ただ米国としてはあれだけの軍備を増強して何もしないで戻るとなると逆に敗北的な結果になるので、そういう意味ではあそこまで行つた以上は、何らかの行動をするでしょう。

しかし、何らかの行動をすれば、それこそ米国はテロの標的に
なるではありませんか。

ですから今、イスラム系はじめ、少しでも疑わしい人には
全くビザを出しません。外国人は来なくてもいいという
考え方なのです。完全な孤立主義です。テロの可能性があ
ると考えている国の人は全く入っていません。日本人は今
のところそういう行動をするとは思われていませんが、難
民として入国し、難民申請が通った人でも、アメリカが疑
わしいと考える国の人は追いつ返しています。

アメリカ人の間でも、フラストレーションは強いですね。
ただその心理状況に対して、何とかしなくちゃというくら
いの認識はあると思いますが、まだ途方に暮れているとい
う程度で、けしからんと糾弾されてもどうしようもない、
といった印象を受けます。私はアメリカの専門ではないの
ですが、アメリカで中東を研究している人たちの基本的な
反応というのは、さみしいと思つています。それを乗りこ
えるために何かをするという状況には、今のところないよ
うに見えます。

去年の中間選挙で民主党が圧勝と予想されながら、現実には共
和党が圧勝しましたね。米国全体のこの流れは変わらない……。
好戦的というわけではないのですが、すべてに懐疑的な
状況ですね。

全世界の市民が、今こそ戦争回避に立ち上がらなくては、と思
うのですが……。

根本的には、アメリカの中で変わらないかぎり難しいで
すね。国民の八割が反対しても、やるとブッシュが言つて
いる、と聞いたのは去年の夏頃ですが、その時よりは多少
クールダウンしているところはあると思いますが、アメリ
カの世論が反対を強く言っていないとしようがないし、
国民が何かの形で動かなければ、どうしようありません
ね。

国連のイラクに関する人道問題局などをやめた人たちは、
あちこちで請願活動などをしているようです。ホームペー
ジなどを見ていると、人道問題調整局のコーディネータを
していたデニス・ハリディーという人、あまりにも環境が
ひどいと言つて国連をやめた人ですが、彼などはあちこち

で講演をしており、イギリスの市民運動などは、彼を招へいしていますね。ケンブリッジ大学を拠点にしている団体がイラク制裁に対する批判のサイトをつくっており、いろんな人のいろんな議論をのせています。しかし湾岸戦争の時に比べても反対運動は弱いようにみえます。しかし最近はずいぶん出てきたかな、という印象をうけますので、これがもう少し本格的になつてくれば、多少抑制要因にはなると思います。

海外のイラク反政府グループの中には、「アメリカが介入でもしなければフセイン政権が倒れない」という意識を持つ部分も、確実にあります。国内の反政府グループにも、もちろんそういう意見はたくさんあり、政権が転覆するということで国民が失うものはそれほど大きくないと考えられているようです。しかし、転覆の仕方がどうなるかが問題で、相当大きい被害が出るだろうと考えたほうが、むしろいいだろうと思います。

自分たちの手で転覆させられればいいわけですが、そもそもフセイン政権が転覆するかという問題もあるわけで、相当難しいと私は思います。転覆の前に、むしろ国内的な

混乱のほうがかなり出てしまう。へたをすると、社会的混乱は行きつくところまで行つて政権は残るというケースの確率も、かなり大きいと思います。

米国の圧力がこれ以上大きくなると、米国に対するテロの蓋然性も大きくなるのではありませんか。

それは確実でしょう。しかし、たとえばサウジアラビアで米国人に対するテロがもしあったとすると、サウジアラビアに対して強烈な弾圧を加えると思います。アメリカは「米国人をおびやかす者は、ありとあらゆる手段でこらしめるのが米国だ」という形で、融和というよりは、むしろ力で守られた国になっています。しかも、アメリカ人は世界の協力がなくても生きていけますけれども、世界経済はアメリカの協力なしには成り立たない状態ですから。

フセインは多数の庶民には偶像視されていますが、インテリ層には多くの批判があることを、九一、九二年に現地に行つて、私も感じました。同時にイラクの知識人層のレベルの高さ、男女同権の徹底にも驚きました。ああいう層が次代を背負うようになれば

ば……と思うのですが、困難は大きいのでしうね。フセインに抑圧されているシーア派の蜂起とかは、あるのでしょうか。その場合、国民は受け容れますか。

シーア派はマジオリティーですが、統括するものがない。もつとも、イスラム政党が出てきた場合には、イラクの国民感情としてはついていけないでしょうが、ただシーア派ということで、国民が反発することは、ないと思います。きわめて民主的な選挙をすればシーア派が半数以上をとるのは、きわめて明白です。ですから、宗派的なものは、あまり関係がない。むしろイデオロギーにどのような勢力が主流になるかと懸念しているところです。民族的にはクルド民族はまとまっていますが、中央政権をとうろうと思っているわけではなく、北部の自治区だけを考えていますので、中央をめぐつての動きには、ならないと思います。

問題は、フセイン政府の下で諜報機関が相当暗躍していますから、誰が諜報機関なのか、市民生活の中に全く見えてこない。そうした点での市民の間での疑心暗鬼が全部噴出するかもしれません。自分の父親があるいは子どもが密告者かもしれないという社会ですから。湾岸戦争直後にも

隣同士で「お前こそが密告者だろう」という暴動が発生しています。タガがはずれた場合、そういうことがおこりうる可能性はあります。

というと、ソ連の末期のような状態になったということでしょうか。残念ですね。

イラクを訪れた人が誰も感じるのですが、一般的にはイラクの庶民は、みんな心温かて人がよい、信仰心の厚い人びとのような印象ですね。酒井さんご自身、八〇年代にバアス党の研究をなさって、「上位下達の機関だと思っていたら、下位上達の役割も果たしていた」とおっしゃったことを覚えていますが、そういうイラクの人びとやバアス党の良さは、変質したのでしょうか。

だいが崩れてますね。湾岸戦争でかなり崩れたところへ、戦後の経済封鎖による閉鎖経済の中で崩れた。

部族統治が強くなっているのと、党のヒエラルキーがかなり大きく崩れたところがありますね。九五年にフセイン・ファミリーの一部が亡命した頃は党組織が完全に形骸化して、結局はフセインとの親族であるとか、血縁・地縁閥が全面に出て、かなり露骨な部族間の抗争もありました。

あの時期にバアス党の「下からの意見を吸い上げる」といった良い面はほとんど崩れてしまいました。

しかしその後、建て直そうとはしているのですね。どこまで建て直したか、私はよくわからないところがあります。が、ちょうどその時期、フセインがイスラム化政策をものすごくすすめましたので、女性はどうどんベールをかぶるようになりましたし、今は党員になるための試験にコーランの文句とかを入れるようになったのです。それだけものですごく右傾化したというか、宗教化したのですね。

それは驚きました。九一年・九二年には、女性がいそう解放されていて、西アジア・中央アジアを通じて抜群だと感心したのです。給料も昇給も男女全く同じ。ひとりひとり、すごく優秀で、男の人に頼んでもなかなかちがあかないことでも女性に頼むと、あつというまに見事に処理してくれましたが……。

そうですね。これまでフセイン政権には社会主義政党によって、築かれていたものがあつたのですが、イスラム化——宗教化によって、そういうものが全部崩れてしまった。インフォーマルな精神性に頼る方向に、少なくとも九六年ま

では大きく傾いていました。経済制裁が部分的に解かれた以降は、一応配給制など、制度面である程度しっかりしないといけない措置がとられたので、そういう面ではボロボロだった制度面がだいぶ回復してきたということはあるのですが、どこまで回復したのかは、よくわかりません。女性の宗教化政策を見た限りでは、だいぶ違ってきていると思いますね。

それは残念ですね。湾岸戦争以前の近代化政策の中では、社会主義の良い面もあるように感じましたし、ポスト・フセインを担う人材も、本来は豊富だったのではないかと思うのですが……。湾岸戦争後、そういう人材がだいぶ外に出ちやつたのですが、彼らが一番不満に思つるのは、戦後の闇経済でしょう。

それまでは、なんだかんだ言いながらもバアス党のヒエラルキーの中で、何かやればそれなりの報いがあつたのが、戦後闇商人が横行して成金のような人たちが大手をふつてやるようになった。経済構造の変化とともに、政治的には部族的なネットワークでものが進むし、宗教化はすすむというところで、むしろ党のこれまでの支配体制がよいもの

だったと考える人ほど居つらくなつたところがあるが少し見えますね。

九二年に行つたときには、戦争で壊滅的に破壊された、水道・電気・製造工場等を建て直そうと、朝の八時には、全国一斉に槌の音が響き、涙の出るような再建ムードでした。病院は二十四時間新患を受けつけるし、医師は医薬品の決定的な欠乏を人力で何とかカバーしようと、二十四時間頑張っており、「医は仁術」を目のあたりにして、たいそう感激したのです。一方で、外国製のビデオを首から下げて歩いている成金にもぼつぼつ出会いましたが、まだほんの少数派で、戦後の日本の無政府状態に比べると、社会主義国の良い面をずいぶん感じました。あのイラクがそんなふうになつたとは……。それも、戦争とその後遺症の恐ろしさですね。

小児病院では新生児の保育器一台に二人ずつ詰めこまれていたり、母乳が出なくて、子どもたちが次々に死んだり、成人も薬がないので、かぜのような簡単な病気でも亡くなつたりを目撃して、経済制裁も、軍事制裁に劣らぬくらい残酷だと痛感したのですが、あれが十年以上も続いているわけですから、日本の戦後より

ひどい。人心が荒廃するのも当然で、経済制裁を続ける国連にフセインが憤り続けた気持ちも、わかるような気がします。それに対して、また空爆し、軍隊で制圧しても何が生まれるか。米国主導の傀儡政権が生まれても、今のアフガンと同じことですね。最善のシナリオ、最も望ましい人びとによる政権交替で、最悪の事態を回避する可能性は、あるのでしょうか。フセインの亡命説も、ささやかれています。

最善のシナリオは絶無とは思いませんが、非常に難しいのは事実ですね。一つには、フセインに代わって指導者になれる人材は、湾岸戦争後、ほとんど国外に流出しています。

湾岸戦争以来のおなじみアジーズさんとかテレビ朝日の田原さんが対談した、フセイン政権ナンバー2の方など、なかなかの人材のように見えましたし、九二年に直接お会いしたアジーズさんの右腕という外務省の部長級の女性なども、たいそう聡明な方で感心したのです。

いま残っているのは古い世代ですね。革新的な改革は期待できません。

イラクが軍事的に敗北すれば、フセイン政権は倒れるとアメリカは読んでいるようですが、フセインは軍人ではない文民です。軍閥ではないので、イラク軍の崩壊は、フセインの打倒に直結するわけではない。情報機関のネットワークは持ち続け、ビン・ラーディンのように、姿は見えなくても心理的な支配を続けることはあります。戦争で命を落とさないかぎり、地下に潜る公算は大きいでしょう。

湾岸戦争でフセイン政権を打倒しなかったことは、アメリカとしては痛恨事だったと考える人は多いようです。戦争を生きのびたことよって、フセインの独裁体制は強化された面もありますが、湾岸戦争は確実に、フセイン政権に対する国民の不信不満を爆発させる契機になりました。恩恵と庇護を与えてくれるはずであった大統領のシンボルの体制や威光や統率力が、いったん地に落ちたことは確かです。

アメリカにとっては、フセイン政権が自壊してくれば、戦死者をださなくてすみ、ベストです。そこで歴代政権は、イラクの反フセイン勢力を支援してきました。しかしそこでいつも問われたのは、アメリカはどこまで本気でフセイ

ンを倒したいのか、ということでした。政権崩壊後に生ずる混乱や地域的な不安定化を想定すれば、弱体化したフセインに政権を維持させておくほうが望ましいのではないかとすれば、反体制派に対する支援も限定的で選択的になつてしまいます。その点で、イラク人の中には、結局フセインとアメリカは常にも同盟関係にあるのだ、という見方をする人も、少なくありません。

世界の各地で時々開かれる反フセイン同盟の会議も、あまり強力なものではありませんし、寄合所常ですから、彼らが政権をとったら、もつと混乱する、というのわかるような気がします。一方、フセイン亡命説も、いろいろ流布されているようすが……。

サウジアラビアをはじめ、亡命説はいろいろありますが、オブションは非常に狭いと思います。

最近、従兄のアリ・ハッサンがシリアを訪問、亡命先の準備説がささやかれましたが、フセインファミリーの誰かをシリアとかリビアに亡命させてフセイン一族の海外拠点にするということは、考えられないことはありません。

しかし、多分、フセインとしては、もしも戦争で命を落とさなかった場合は、ビンラーディン式に地下に潜つて活動を続けるほうを選ぶのではないかと思われます。

アフガンもあれだけ激しい空爆を行い、地上軍でも勝利しながら、結局、ビンラーディンは生きのびています。時間がかかっても、穏便な私たちで、イラクに本当にいい政権が生まれることを祈ります。

*

一九八二年、東大教養学部卒業と同時にアジア経済研究所に入所、八六―八九年、在イラク日本大使館専門調査員として、イラクを内側から研究。八九―九五年はアジア経済研究所総合研究部、九五―九七年はカイロ・アメリカ

酒井啓子著『イラクとアメリカ』

一〇二ページの〈あじろ読書室〉で

ご紹介しています。

すばらしい本です。ぜひ一読を！

(新書版 二二三ページ 七〇〇円＋税)

岩波書店

斎藤千代著『見えない戦争』

十二年前、湾岸戦争直後のイラクの記録です。

十二年前の本ですが、今回の問題を考える参考になります。(在庫僅少)

(四六版 三三二ページ 一五〇〇円＋税)

BOC出版部

ン大学で在カイロ海外調査員をつとめ、海外の学会などでもお忙しい酒井さん。お話の間じゅうも、パソコンには世界各地の情報が刻々入る。グローバルな視点で、資料を学者の目と、市民としての愛情で正確に読み、分析している酒井さんは、世界のイラク研究の第一人者だが、マスメディアは、男性の論者をとかく登場させたがる。西アジア、とりわけイラクを深く愛し続けて来られた酒井さんの鋭い分析が、マスメディアでも、もっともつと発表されることを願いながら、千葉・幕張に移転、アメリカの研究機関かと思うようなすばらしい施設に変わった。アジ研を辞した。

(二〇〇三年一月二〇日)

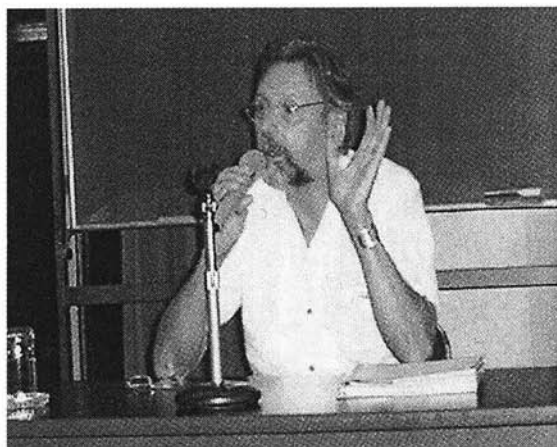
グローバルな視点から 「平和憲法」を

ダグラス・ラミス

改憲の代わりに、有事法制？

日本国憲法の話というのは、いま、それについて話そうと思えば、有事法制の話になると思います。こういう言い方で誤解して欲しくないけれど、小泉政権は頭いいな、賢いな、あるいはずる賢いな、と思いました。

ご存じのように日本の平和憲法が出来てしばらくしてから自民党が出来ましたが、自民党は最初から、九条を変えたい、無くしたい、という討論をしてきました。解釈改憲はずっとやっていくわけで、日本国憲法はたいへん痛んでいます。傷だらけで苦しい状態なんですけど、まだ、文章はそのままです。改憲はできていません。



らまた平和憲法が戻ってくる……。

本当にブラックユーモアに聞こえますけど、そのとおりです。

有事法制は実質的な憲法改正

日本国憲法の中に、「この憲法を、一時停止してもよろしい」とか、「有事法制とか有事状態の場合（というのはもちろん、戒厳令の別の言い方ですが）、そういうことをやっていい」とい

それは自民党にとって大問題です。改憲をやりたいけれど、憲法改正の条件は憲法に書いてあるように、国会の三分の二の賛成、さらに国民の住民投票で過半数の賛成が必要です。でも、そういうことができるような世論はずっとできない。自民党は困っています。

有事法制は、それを解決する、「賢い」解決策です。改憲できないなら凍結する、憲法の一時停止ができるような状況ならいいじゃないか、ということですよ。ブラックユーモアになりますが、このやり方によって、平和主義者も軍国主義者も喜ぶ、満足できるはずですよ。

平和な時は平和憲法、戦争の時に限って有事法制で戦争できるようにする。戦時に限って平和憲法を凍結して一時停止して、その代わりに有事法制による制度にする。有事法制による制度は戦争できる。その戦争が終わった

うことは、憲法の条項にはどこにも書いてありません。もちろん、国会でどんな法案でも可決してもよろしいということでもないし、憲法にどういふ法案は可能か、どういふ法律は不可能かということを細かく書いてあります。この憲法は凍結してもよろしいとは書いていない。逆に、政府に勤めるすべての人たちはこの憲法を守る義務があるということは、はっきり厳しく書いてあるのです（第九十九条）。

したがって、もし、憲法を凍結する権限を総理大臣に与えるべきだと、真剣に思うなら、法的な方法としては、憲法改正案があります。憲法を改正して、もう一つ条項を入れて、有事法制も可能な形にする案です。誤解して欲しくないのですが、それは私が提案しているのでも勧めているのでもありません。その案が通つたら、とても悪い体制になることがわかつています。でも、一応、法的には合法な道です。有事体制、有事状況、憲法を凍結するような状況を布告する権限をどうしても総理大臣に与えるなら、その方法しかないわけです。

つまり、有事法制の中身は、憲法改正の中身です。憲法改正に必要な、国会での三分の二の賛成はとれないだろうし、国民投票は面倒くさいし、やりたくないし、できない。その憲法改正の中身を、過半数で通るような普通の議案で通そうとしているわけです。憲法改正を過半数だけで、しようとしているわけです。

有事法制が通れば憲法の原理が消える

その有事法制には二種類の問題があります。

まず、中身そのものに問題があります。実質的に憲法を凍結して戦争ができる国にする、それから基本的人権条項も凍結できるわけですね。こういう集会はできなくなるだろうし、ピラ

まきもいけなくなるだろうし、新聞読んでも情報は分からないだろうし、財産権の放棄もできるし、いろんな人権を凍結できるわけです。

それだけではなくて、その通し方も憲法違反であり、違憲です。このひどい改正をやるうと思えば憲法改正の手續きをしないとできない。だから、単純過半数で通そうとしているわけです。日本国憲法には三つの原理が言われています。主権在民と基本的人権、それから平和。学校でみんな学んでいます。

でも、有事法制が通れば、平和も消えます。有事のときは戦争ができる。平和な時は戦争してはいけません。戦争の時だけ戦争していい。法律を守る時は守ります。守らない時だけ守りません、と……（笑）。

憲法の三つの原理は消えます。平和、それは消えます。基本的人権、それも消えます。そして主権在民も消えます。有事法制の通し方を見ると、憲法の精神そのものの、「憲法による政府」という原則そのものを無視している。いま現在、憲法はそのままなんですよね。日本政府の権限・権力、すべて憲法によるものなんです。有事状態になったら、今度は「憲法による政治」ではなくて、「有事法制による政治」になる。政府には、権力の制限はないということになります。どれだけ勝手なことができるかということとは想像できると思います。いま、それだけの、憲法の危機になっていると思います。

有事法制の本当の意味

国民は、多分、有事法制の意味がはっきりとわかれば、必ず立ち上がって、絶対に許さないと思いますけれど、有事法制に対して多くの人が持っているイメージは、「近くの国に侵略され

ないよう、念のために準備しておいたほうがいいんじゃないか」という気持ち、考え方です。総理大臣がいう「備えあれば憂いなし」もそうだし……。

もちろん、その背景は、そうではない。

有事法制が通りそうになった状況は、アメリカ合衆国のテロリストに対する報復戦争が始まってからです。隣の国が侵略して来そうだから戦うというのではなくて、アメリカ合衆国はテロリストを絶滅させるという名目で、次つぎにいろんな国をこれから侵略する計画をしていて、自衛隊もついていくことになっているんです。ガイドラインと、ガイドライン関連法案によって、そのアメリカに日本の自衛隊も一緒に行くようになっていくわけで、アメリカの戦争に協力するために日本は戦争状態になりそうなんです。よその国が日本を侵略するのじゃなくて、米軍がどこかに出かけて、そのために自衛隊が動く。それによって、日本は戦争状態になる。その可能性が一番高いわけです。有事法制はその準備なんです。

テロリストに対するアメリカの報復戦争によって、日本政府が振り回されているわけですが、その戦争はどういう戦争か、どういう状況になっているかということを、お話ししたいと思います。

テロリズムを犯罪として扱つのを あえてやめたアメリカ

去年、九月十一日、ワシントンD.Cとニューヨークがテロの攻撃を受けたとき、アメリカ大統領は、すぐ二つの発言をしました。一つは、「これによって、世界は変わりました」もう一つは、「これは戦争です。したがってアメリカは戦争で返します。報復戦争をします」。

この二つの発言は間違っていると思います。

世界が変わったのが9・11というのは、違う。テロリズムの事件は今まで何回もありました。規模は違うけれど、大きなテロリズムの攻撃は今まであったわけです。だから、9・11に世界が変わったわけではない。アメリカ大統領の「これは戦争です。戦争として扱います。私たちは戦争します」という発言によって、世界は変わったんだと思います。

今までのテロリズム攻撃は、犯罪として扱われたわけです。アメリカのオクラホマシティーにテロリズムの攻撃があつて、それはアメリカ人がやったんだけど、それは逮捕されて裁かれて、有罪判決が出たわけです。ほかの例もあります。

テロリズムを犯罪として扱った場合、これはたいへん面倒くさいわけです。場合によつてやつた人は見つからない、計画した人が見つからない。もちろん、自殺テロだったら、本人はもう死んでいますから、裁くことはできない。けれども計画した人もいるわけです。それに対して探せないかもしれないし、探しても、その住んでる国が渡さないかもしれないし、裁いても、証拠が足りなくて無罪判決が出るかもしれないし、面倒くさくてお金がかかるし、イライラするわけです。

でも、いいところがあります。そのやり方でやると、国際法、刑法、法の精神が崩れないんです。人間の人權の非常に尊い法の構造が、破壊されない。面倒くさいけど、その利点がある。

アメリカ発信が主流 「テロリズムに対する戦争」

一方、テロリズムに対して戦争をした場合、非常に能率がいいように見えます。お金がかかるし、労力は裁判よりかかるけど、すぐ効果が出るように見える。証拠なしで容疑者を殺すことができます。戦争だったら、証拠はいらない。容疑者をバツバツと殺すことができる。アメリカは、

アフガニスタンではそうしました。米軍が、あるいは、北部同盟が、アルカイダ容疑者、タリバン容疑者を殺した。裁判にしたら、有罪判決が出ないかぎりいいじゃない。戦争だったらその容疑者がいたらバツバツと殺すことができる。実際、それをやったわけです。だから、能率がいいように見える。でも、本当に能率がいいのかどうか、十年か二十年経たないとわからないと思います。

このやり方の欠点の一つは、国際法、法の精神が破壊されることです。これは、世界規模の損害です。アメリカがアフガニスタンで戦争していた時、毎日、新聞に戦争のニュースが出ていましたが、その多くはアメリカ経由のニュースです。AP通信とか。そして、ほとんど毎日、アメリカ経由のニュースには、同じ説明の言葉がそのニュースの中に書いてあった。何で、アメリカはこの戦争をしているのか、という説明を毎日流していた。タリバン政権は、ウサマ・ビンラディンという人、これはテロリスト容疑者ですが、これをアメリカに渡すのを断ったからだ。タリバン政権は渡さなかったから戦争をしている、と。それを見るたびに、「ああ、戦争状態の新聞だな」と思いました。

戦争状態になると、新聞を読む時、非常に気にして読まなければいけない。危ない。新聞を読む技術はいろいろありますけど、その一つは、今日の新聞を読んだとき、昨日の新聞に書いてあったことを忘れないこと。先月の新聞に書いてあったことを忘れないことです。新聞記者は、忘れたらもうという自信がある。「絶対、忘れてる、覚えてるはずがない」と、自由に書くのですね。

戦争をする意志はなかったアルカイダ

「タリバン政権はウサマ・ビンラディンをアメリカに渡すのを断った」。アメリカの攻撃が始まる前に、毎日のように、パキスタンにいるタリバンの代表の言葉が書いてありました。「証拠を見せない限り、私たちはウサマ・ビンラディンを渡さないと断った」と。当然でしょう。「証拠をまず見せてください」というのは、国際関係のやり取りではまったく当たり前の答えです。しかも、いろんなことを考えていると言った。例えば、「中立のイスラム教の国で裁くなら、渡す準備があります。渡します」、あるいは「アフガニスタンの中で裁判をやるということも考えます」。攻撃の二日前に、これと同じ答えを言っていた。つまり、交渉可能なことを言っていた。それに対して、ブッシュ大統領が繰り返し言ったのは、「タリバン政権とは交渉しません」。

当時の新聞を見ると、明らかにタリバン政権は9・11の攻撃には加担してなかった。そういうことが起こるということも知らなかったようです。「アメリカと戦争する準備はなかったし、つもりもなかった。アメリカから攻撃が来るとわかった時、準備しはじめた」ということが新聞に書いてありました。ある新聞の一面に、タリバンの兵士が、壊れた戦車を一生懸命にスパナで直している写真が出ていました。動かないからと。全然、戦争のつもりも準備もなかったわけです。「攻撃されたら防衛戦争をします」とは言ったけれども。だから、どう考えても、アフガニスタンに対する攻撃は、侵略戦争です。国際法の中で、侵略戦争という定義の枠の中に、きれいに入るわけです。タリバンは戦争するつもりはなかった。そしてアメリカの要求に対して、交渉可能という答えをしている。アメリカは交渉しないで侵略した。

対テロリズム戦から、対アフガニスタン戦争へ

ブッシュ大統領は、「テロリズムに対して戦争します。テロに対する戦争をこれからやります。

三十年も四十年もかかるかもしれない」と、繰り返して言っています。しかし「テロリズムに対する戦争」というのは、できない。そういう戦略は、存在しない。そういう戦争で勝てそうな戦略も条件もないわけです。

普通、国と国との間の戦争、あるいは内乱でも、二つのはっきりした勢力があつて戦争するわけですよ。国と国の戦争の場合、勝とうと思えば、敵の国に軍隊を入れて、その領土から敵の軍隊を追いつ出して領土をとつて、追いつ出された軍隊を支持している国民を絶望させて、最終的に敵の政府を降服させる。倒すか条約を結ぶか、ということになりますよね。

アメリカがテロリストと呼んでいる人たちには領土がないし、国がないし、支持している国民もないし、政府もない。だから、軍事戦略は使えない。勝てない。もし、軍事戦略によつてテロリズムに勝てるなら、イスラエルは何十年前に勝つてたはずですよ。それをずっとやり続けているけれど、全然だめ。できない。だから、テロリストに対する戦争というのは、無茶苦茶な戦争なんです。倫理的問題は、もちろんなんです。反戦平和主義と関係なく、普通の職業軍人の合理性から考えても、やるべきではない戦争。マキアヴェリはあきれる。戦略理論を考えていた思想家もあきれるわけです。勝てない。どうやつて進めるかも、ほとんどその方法はないと思います。

最初、アメリカ大統領は、「テロリズムに対して戦争します」と言つた。たぶん、そのあと、ペンタゴンの人たちと相談した。じゃどうすればいい。どこで何をする。……方法がないわけですね。テロリストはどこに居るか、軍隊でおさえることができない。だから、だんだん、「テロリズムに対する戦争」の代わりに、「アフガニスタンに対する戦争」にすり替えられていったんです。アフガニスタンに対する戦争なら、それは国で、政府があるから戦略もあるはずですよ。だから交渉しないで、相手がどんな答えをしても聞かないで、侵略するわけです。

そして、アフガニスタンのタリバン政権を倒した。で、アメリカ寄りのかいらい政権を入れた。アメリカと協力する政権ができた。

アフガニスタンの状況が良くなったか悪くなったかということは、新聞読んでも雑誌を読んでも判断しにくいんですね。人によって、状況は良くなったと言い、人によっては状況が非常に悪くなったと言う。非常に判断しにくいんですけれど、平和にはなっていない。

ビンラディンが消えてフセインへ

今度の戦争をする中心に一番最初になったのがウサマ・ビンラディンなんだけど、消えてしまった。どこにいるかわからない。アメリカ政府はあまりウサマ・ビンラディンのことを言わなくなった。そこで今度はフセインです。ビンラディンはそのままで、今度はイラクのフセイン。

テロリズムに対する戦争は相変わらずできないから、次の戦争をできる国を探しているんですよ。一番評判の悪い国を探して、今度はイラク。侵略するかどうか、アメリカの外にも、中にも、反対があるし、中東からはもちろん、ヨーロッパからも強い反対が出ています。あきらめるかもしれませんが、反対があつてもやるかもしれない。わかりません。

ちなみに小泉政権は反対と言っていますか？ 反対と言っていないアジア唯一の政府でしょう。不思議です。

9・11以来、新聞の書き方、政治家の喋り方がだいぶ変わった。メディアから出てくる戦争のプロパガンダというか、いくつか新しいテーマが出て来ています。一つ重要なのは、テロリストという言葉の使い方だと思っています。もちろんテロリストという言葉はだいぶ前からありますが、この一年間、議論の中心になっているテロリストとは何者か？ 頭が真っ白になって答えられない

い、不思議な言葉です。

捕虜でもない、犯罪容疑者でもない、アフガンの抑留者

この一年間ではつきりしてきたのは、例えばキューバのグアンタナモ米軍基地にいるアフガンの抑留者の処遇です。

数百人のテロリスト容疑者が檻のようなところにいるようですが、アメリカ政府は、この人たちは捕虜の資格はないと言う。

この人たちは兵隊ではない。兵隊が掴まったら捕虜になる権利があつて、国際法、戦争法によつて権利が守られているわけです。一九四九年のジュネーブ協定によつて非常に細かく保障されている。それで、あえて捕虜にしなかつたのです。

もちろん、戦争法を破つて、戦争以外の暴力を使った場合、戦争犯罪として裁いてもいいけれど、ただ戦争したということだけで裁いてはいけません。収容所に入れて戦争が終わったら、無事に国に返すのが国際法の定めですが、この人たちにはそういう捕虜の資格はないと、アメリカ政府は言っています。

じゃ何なのか。犯罪容疑者でもない。犯罪容疑者だったら、アメリカ政府が犯罪容疑者として裁くわけですが、アメリカ憲法と刑法の中で犯罪容疑者はいろいろ権利が保障されている。それで、犯罪容疑者にもしない。

なぜかという、米大統領は、「テロリスト容疑者なら二〇〇一年の十一月十三日、軍事裁判で裁く」という大統領令を出した。テロ容疑者だから普通の裁判の権利を与えるわけにはいかない、と言っているのです。

ザ・テロリストのイメージは evil

そのテロリストのために、全く新しい法例、これまで存在しない法的な枠組みを作った。

その枠組みは何なのかを話す前に、まずテロリストのイメージ、アメリカの戦争プロパガンダの中で、ザ・テロリストのイメージは何なのかということを話したいと思います。

ザ・テロリストはどういうふうに描かれているかというと、犯罪容疑者とは違う。犯罪者のイメージは、普通の人として生まれたけれども、どこかで道に迷って犯罪を起こしてしまった人だけ、まだ、普通の人間なので、反省する可能性を持っている。だから、すべて死刑じゃなくて、数年間懲役して、釈放するわけです。釈放することとは、この人は普通の社会に戻って普通の生活をする可能性を持っているという意味なんです。

ところが、大統領がよく口にする言葉ですが、「悪の枢軸」だけではなくて、「テロリストは悪」。この悪に evil（邪悪）という言葉を使っています。evil という言葉は法律用語ではないんです。政治用語でもない。基本的には宗教用語です。evil な人は悪魔を代表している人、芯から悪。基本的に悪。普通の人じゃない。宗教的に考えれば、「悪魔が人間に苦勞させるために、この世に送った悪魔を代表している」。だから、後で反省することはない。

そういう人間はこの世界にいないと思います。が、「悪」というイメージでつくられた話です。evil の前に d をつければ、devil（悪魔）になります。だから、テロリストは普通の人じゃない、ということになる。

devil は道に迷っているのじゃなくて、悪いことをするのが本職。政治漫画にどう描かれているかというと、だいたいドブネズミ。ドブネズミは、かわいい白ネズミとか田舎の茶色いネズミとかじゃなくて、ベストを持ってくる恐ろしいネズミです。どの動物園にもいない。だれもベツトにしたことのないネズミ。それに例えられているんです。ぼくのイメージですが、ドブネズミというのは、見れば殺したい。ゴキブリと同じように、見ると、条件反射的にバーンとやりたいわけです。テロリストに対して、政治家、政府寄りの新聞記者は、全滅とか根絶とか、そういう言葉を平気で使っている。普通は人間に対して、ナチスとはかくとして、全滅とか根絶という言葉はあまり使わない。ドブネズミ絶滅、見れば殺すという条件反応とつながっているわけです。

人種差別と通じる、テロリストに対する偏見

もちろん、テロリストと言われている人たちは、一つの民族、一つの人種、一つの国にまともっていないわけです。さまざまな言語を使っているし、さまざまな国にいるし、さまざまな文化をもっている。したがって、テロリストに対する偏見というのは、人種差別とは別なんです。厳密に言うと、人種差別とは違う。そういう意味で形は違うけど、人種差別の感情的な中身が、ザ・テロリストに対する感情の中に一括されている。その感情が別の形で出ている。

伝統的な人種差別は、露骨に言うところ、こういうことです。この人種は客観的に劣っている、だから、教育させようと思っても、助けようと思っても、法とか文化文明を与えようと思っても、なかなか上がってこない。したがって、平等になることを期待しないで、別の法的な枠組みを、その人たちのために作っておく。例えば奴隷制、例えばアパルトヘイト、例えばゲットー、例えば、アメリカの奴隷制度のなくなった後の、南部の隔離制度。すべて法的な別枠を用意している。

テロリストも、法的別枠ができていくということでは同じです。

重要なのは、この論理は堂堂巡りだということです。つまり、この人がテロリスト容疑者であるということを、アメリカ政府は決めるわけです。テロリスト容疑者であるなら、普通の裁判で裁くことはできなくなる。本人あるいは本人の弁護士が普通の裁判で訴えようと思ってもできない。その権利もない。人身保護で守る権利はない。ところが、その人がテロという行動に関わったかどうかということは、審判する裁判がまだ始まっていない、その前に、すでにその枠に入っている。その枠に入ったら、どういう権利がなくなっているかというところ、アメリカ刑法では、陪審員による裁判ではなくて、職業軍人複数が審判になって、その人たちが全部決めるのです。弁護人と会う権利もない。上告する権利もない。裁判一回で、誰がそれを確認するかというと、大統領だけです。大統領がいいと言えば、判決が出たすぐあと死刑になる可能性もある。

国際法、人権宣言、刑法に違反する行為

イギリスから伝わってきた慣習法の中心的なことなんです、逮捕された時に何で逮捕されたかということも教えてもらいうのが通例です。〇〇容疑者、つまりあなたは、〇年〇月〇日何をした、ということ、そして、それは何の法律を破ったかということ、容疑者に教えないといけない。それを教えることができなかったら、数週間のうちに、普通は釈放しなければいけない。検事側、警察側が何の犯罪か言えない場合、釈放しなければいけない。逮捕された人には、その権利があります。

それから、不利な証言をする証人が証言している時、その人の顔を見て、証言を聞いて、反論する権利があります。これもとても重要です。しかしテロリストにはその権利もない。なぜか

というと、証人のなかにスパイがいる。アメリカのスパイ。スパイの顔を一回、テロリストに見せれば、二度とスパイとして使えない。だから、見せないのです。

自分がそういうふうに逮捕されてしまったら、どういう状況になるかということを想像してください。何の犯罪なのか、誰が証言しているのか、どういう証拠があるのか、わからない。しかも証拠も見せてもらえない。なぜかという、それは国家機密ですから。国家機密をテロリスト容疑者に見せるわけにはいかない。弁護士とも話せない。では、どういうふうに弁護できるか。みなさん、カフカの『密判』という小説をご存知でしょう。ヨーゼフ・Kという男が逮捕されたけれど、なぜ逮捕されたのかということば教えてもらえない。彼は、裁判が開かれるという前提で自分の弁明を書こうとする。零歳から何をしたかということを書き、弁明する。しかし、何の犯罪をしたかということは一切教えてくれないという恐ろしい状況を描いたのがカフカの小説です。

米政府は、グアンタナモ米軍基地にいる人たちに対して、半年以上、何の裁判も開いていない。米政府がそれでいいと言っている。裁かないし、釈放しない。もちろん、これは、アメリカの国際法違反でもあるし、国連人権宣言違反でもあるし、アメリカ憲法違反でもあるし、アメリカ刑法違反でもある。しかもそれは全部、大統領令から出ている。それなのに、大統領令の法的根拠もない。わたしはインターネットからとったけど、根拠は何かというと、「大統領は戦争の際の軍事最高司令官だから、そのことをする権利がある」と書いています。

これが、有事法制です。戒厳令。戒厳令を布告するのは、普通は国内ですが、ブッシュ大統領が言っているのは、「世界中のテロリズムに対する戦争」に対する「国際的な戒厳令」です。

彼は二〇〇二年一月二十九日の演説で、「この戦争に協力する政府もあれば、協力しない政府もある。動かない政府があれば、その代わりにアメリカ政府は動きまわります」と言った。これは、どうい

う意味かという、アメリカ政府はあなたの国にテロリストがいるから逮捕して出せ、と言ひ、その政府が逮捕しなかつたら、渡さなかつたら、アメリカは軍隊あるいはCIAを送つて、その人たちを逮捕する。そして、グアンタナモ軍基地に連れてきて、檻に入れる、という意味なんです。それは想像じゃない。アフガニスタンは、その最初の例です。ブッシュ大統領は、はっきり言つた。「アフガニスタンとの戦争は二十一世紀の最初の戦争。これからの戦争は、この形です。これと同じことを他の国にします」と。これは一つの模範ですね。

世界政府の権限をとらうとしているアメリカ

今までの国際法の常識として、主権国家の警察は、別の主権国家に行つて人を逮捕する権利はなかつたんです。そういう警察権は国境で終わる。海上は別の国際法があるし、別の国に入つたらその国の法律がある。いつからアメリカ軍、あるいはCIAは他の国に入つて人を逮捕して連れてくるという権利があるのか。最初は、たぶんパナマ侵略です。ノリエガ元大統領を逮捕して連れてきてアメリカで裁いた。パナマに生きながら、アメリカの刑法を破つたからと、アメリカの牢屋に入れる。それが一番最初。それ以来、どこでもそういうことができる、と言つています。それから、今までは、先制攻撃をするのはいけないということになつていたけれど、アメリカ大統領が言っているのは、「テロリズムに対する戦争の場合は、それはもう古い。アメリカには先制攻撃をする権利がある」ということ。それは侵略ですよ。ニュルンベルク裁判、東京裁判で、それが一番重要な戦争犯罪とされたわけです。「平和に対する罪」。戦争になつていないところに戦争を起こすことは、戦争犯罪なんです。その犯罪で有罪になった人たちが首つりで死刑を受けた。ドイツでも東京でも。それを今度はやつていいということになった。

政治学の常識から考えれば、どこでも偵察したり、軍を送ることができて、そこにいる人たちを逮捕できる権限を持っている機関を、「政府」と呼びます。アメリカの行動を見ると、アメリカ合衆国は国連が「世界政府」になるまで待たないで、自分が「世界政府」になるうとしていく。これは、比喩ではなく、具体的な行動で、世界政府の権限を自分がとうとうとしているんです。実際、アメリカはあちこちで人を逮捕している。逮捕できる。国連はできません。国際刑事裁判所にはそういう権利はない。ほかの国にもそういう権利はない。アメリカだけがあると云っている。今まで、このようなイデオロギーを持つ人を、帝国主義と言って批判したけれど、今度は、アメリカの政府寄りの新聞記者が、故意的に言い始めた。この一年間、アメリカは帝国を持つてしまっている。それを軍事力で守らなければいけないと、故意的に言い始めたんです。

そのアメリカの計画になぜ、日本政府は憲法を捨てて関わるのか、ということは、ちよつとわかりにくいと思います。

■質疑応答

司会　日本政府はなぜ憲法を捨てたのかわかりにくい、というところでラムスさんのお話は一応終わりました。皆さんからの質問で、その続きをさらにお話ししていただきたいと思います。

Q1　去年から今まで、一番疑問に思っているのは、日本でもアメリカでも報復迫撃に反対している人たちはいるはずですが、どこからもその様子が聞こえてこないことです。我われに何ができるか教えていただきたい。情報が聞こえてこない。それは一生懸命隠していますね。二、三か月前、東京で有事法制反対全国集会があつて、六万人集まつた。六万人集まつたのは七〇年代以来じゃないか。そういう、

はつきりした反対というのは。つまり、これは日本の世論が変わり始めたという、はつきりした非常に大きな事件なんですよね。しかし朝日新聞にも載らなかった。朝日新聞の記者が知らなかったはずはない。これはたいへんなことだということを理解していかないはずはない。やっぱり、世論の変化に関わりたくなかったか、あるいは有法制はすでに朝日新聞なんかで規定の事実としてできちゃっているのかよくわからないけれど、あれば、はつきりした、例ですね。

私は参加できなかったけれど、ここにいる方でも参加なさっていると思います。それぐらいのことが新聞に出ないということは、やっぱり戦争状態の新聞ですよね。どういうからくりでそういうニュースが消えてしまうのかわかりませんが、情報は消えますね。

それから、何ができるかということですが、私は最近、いろいろな所で、このような講演会に参加していますけど、すべて同じ答えをすることになっています。それは、一つは、企画者にたいへん失礼だけれど、「この会に参加したということは活動だと思わないでください」ということ。「今日活動した」という満足感は怖いと思います。来てくださってありがたいという気持ちにはありますが、集会に参加する、話を聞くということを、活動したというふうには思わないほうがいいと思います。そして、もう一つ、本当にやりたいという気持ちがあれば、みんなそれぞれ、できることはいくらかもあるわけですね。白いリボンをつけることもあるし、誰かに電話する、手紙を書く、街頭で何かをする、新しい組織をつくるとか、きりがありません。とにかく、何かをやるべきではないかという気持ちがあれば、今までやったことのないことを一つやる。今までやってきたことは続ける。やったことのないことも加える。それを自分で考える。それが私の答えです。

Q 2 今、アメリカは軍事的な解決に乗り出していますが、第二次世界大戦の時に、中国は日本人戦犯に対し

て、教育による裁判を行いました。教育による解決というのは、どのくらい影響があると思われますか。

詳しいことは知りませんが、たしか中国では、戦争が終わったら、中国から見れば、戦争を勝利したということになっているけれど、中国には、勝利した国として、捕虜がいたわけです。そして、捕虜たちを再教育しようとした。しかしそれは、外国人である限り、厳密には国際法違反だと思っています。成功した場合もあるかもしれないけれども、そのやり方に関していろいろ意見があります。今の状況の中で、誰が誰に対してどう教育するかということがちよつとわからない。

私は、三十年間、教育というのが私の仕事でしたから、もちろん教育の成果を信じています。

しかしこういうテロとテロに対する報復戦争の原因は、教育が足りないということじゃないと思います。やっぱり客観的な貧富の差とか、差別とか搾取とか、そういう日常に、テロリズムに走ってしまう文化的な理由があると思います。世界の正義になっていないような、不平等、貧富の差が、どんどんひどくなるとか、その中で人が狂い、テロに走るのではないかと思います。だから、教育が足りないから教育しましょう、ということじゃないと思うし、正義に基づいた平等な世界状況をつくらない限り、こういうことはなくならないと思うんです。

Q3 アメリカのブッシュさんの横暴なことはよくわかりました。しかし、この国際的なアメリカの世界戦略、横暴に対して、「ノー」という声がとても弱い。アフガニスタンへの侵略に対しても、同盟国というか、イギリスやロシアなども共通してアメリカに同意したり、援助したり、というふうに感じます。そして、今度はイラクとということになったときにも、日本は論外としまして、なぜイギリスなどがアメリカに追従するのか。国際的な「ノー」と言える制度についてのご見解を承りたい。

ノーと言える勢力はあると思います。おっしゃっているように、市民側ですよ。ベトナム戦争のとき、大きな反戦平和運動があったけれど、今から考えると、ベトナム戦争の時の反戦平和

運動には、一つのむずかしい問題点があった。私も含めて、反戦平和と言いながら、本当は、正直に言うと、ベトナム解放戦線に勝ってほしかったわけです。アメリカが負けて解放戦線が勝てば解決する、ということだった。だから、純粋な反戦平和とは言いにくい。たくさんの人がそういうふう感じたと思うんです。

今度の場合、もちろん、勝ってほしい勢力は世界のあちこちにありますが、私から言うと、九月十一日の攻撃をしたアルカイダ、……アルカイダかどうかわかりませんが、勝ってほしいくないんです。勝ったら、どうなるかわからない。本人たちはアメリカに普通の軍事戦略で勝つという計画は持っていないと思うのです。だから、テロリズムに対する戦争、あるいはそれに対するテロ、その二つとも、勝ってほしい勢力は、どちらの側にも存在しない。そして、普通の戦争と違って、誰かが勝てば平和になるということもない。どっちも勝てるような戦略を持っていない。また、戦争をとめる能力はアメリカ政府にはない。そして、相手の勢力、勢力といていいかどうかかわからないけれど、それもなし。普通の戦争のように、こっちのほうだんだん強くなつて勝利して平和になるということがないわけです。だから、客観的に、第三勢力、中立勢力、どっちも支持していない。左翼とかマルクス主義とか関係なく、ただ、普通の人の普通の常識としての「平和のほうがいいんじゃない？」という気持ちで参加できると思います。そういう普通の市民から、一番、ノーということが期待できると思います。日本では、今、目の前にあるのは、有事法制に対してノー、それから、イラクの侵略戦争に参加しない、という二つの問題があると思います。

Q 4 「正義」というのは具体的にどういうことでしょうか。

正義とは、例えば、私の娘の家は所沢なんです、近くに一〇〇円ショップがあります。今、

私がかけているこのメガネをこの間、一〇〇円で買った。いろいろなものが一〇〇円で買える。そのほとんどが中国製です。このメガネの一〇〇円のうち、店の家賃、給料、郵送料、そういうのがかかって、中国の工場で作っている人には五円くらいでしょう。そういうことが世界にはたくさんあります。だから、それを買っていいのかそれわからないんだけど、私は買った。このメガネを一個五円とか三円とかで作っている人の状況と、東京で一〇〇円で買える人の状況があまりにも違う。ずっとそういう工場に勤め続けていると、何か攻撃的な宗教がきたら信じてしまいかもしれないし……。

そういうところで、安定した精神状態を作るのはむずかしいと思うんです。そういうところに行つて、あなたの教育は足りないとは言えない。教育の問題じゃない。客観的な状況にも問題がある。だから、そういう貧富の差を減らさないかぎり、まだまだ暴力的な世界が続くと思います。

Q 5 今、お話を伺いまして、アメリカの9・11以降の状況、それに追従して起こってくる、ここ一、二年の間のいろいろな攻撃の一番の原因というのは、はっきり挙げることはできないと思いますが、ブッシュ政権に変わってから、それができるようになったということですね。

これまでテロというとはいくつかあったけど、それに対して、国をあげてというか、9・11以降、変わってしまいましたね。アメリカの国内的な質的な変化というか、経済的な何かがあるのか、ということ、具体的にお願いしますか。

レーガン大統領になつてから、その後レーガン・ブッシュ政権は、こういう考え方を持っている。つまり、アメリカ合衆国はベトナム戦争に負けたということが原因でおかしくなつた。ポストベトナム・シンドローム。それに対して彼らが考えた治療法というのは、戦争に勝たないかぎり直らないということでした。戦争して勝つ、勝利すると国内の社会は元気になる。愛国心がまた上

がるし、いろんな社会問題は治る、そういう考え方です。だから、ずっと戦争ができるところを探してきた。一番最初、レーガン大統領になって、グレナダ侵略がありましたね。それは勝ったんですが、戦争というより「いじめ」です。二日間で終わった。次はパナマ侵略です。

その次は湾岸戦争。湾岸戦争の後、「ボストベトナム・シンドロームは治りました」と、大勢の物書きが書いた。そして9・11後のアフガン攻撃で、今のブッシュが、選挙に勝たないで大統領になった。得票数を細かく数えてみると負けていた。それをいろいろごまかして大統領になったわけです。今までそういうことをしている人が惨めに四年間送って、非常に評判が悪い大統領として終わった例があるので、今度こそ、という解説が多かった。

あの攻撃があつたあとで、アメリカ政府の人たちがテレビに出ると、非常に真面目に悲しい顔をしようにしているんだけど、実は嬉しくてしょうがない。眼が輝いている。「待つてました」という感じです。その数か月間の新聞解説、雑誌解説を読むと、「アメリカは良くなった、第二次世界大戦以来、こんなにアメリカはない。社会は本当に居心地がいい」とか。しかしそれは国内でのこと。

報復攻撃は、アメリカの社会を治療するための戦争でもある。その動機はとても大きい。だから、戦争しないで、犯罪扱いで犯人を裁く道があつただけで、それは頭に入れない。そういう治療のための戦争でもある。しかし、十年経つても二十年経つても勝てないということだったら、元氣が出ないと思います。

Q6 ラミスさんのお話の中で、私もそうだと思いますのは、戦争をとめる力というのはそれぞれの市民にあるとおっしゃったこと。本当にそうだと思いますし、私自身もいろいろ活動しなければいけないと思つたんですが、さきほど、国際法のお話が出ましたね。国際法というのは力はないんじゃないかなということを感じた

ことがあります。しかし、やっぱり、国際法を守らせるために、自分たちの地域の中で国際法をいろいろ活用したり、それを守るような運動が必要なのではないか。そして世界の市民が一緒になる意味でも、国際法を守らせるといふことをやっていかなきゃいけないと感じていました。そういうことで、例えばアメリカの今回の、国際刑事裁判に入らないような事例も、もっと問題にしなければいけないし、有事法制なんかも、国際法に違反しているのではないかという観点からもやっていく必要があると思います。何かヒントがあればぜひ教えていただきたい。

国際法を使つて、何か運動ができないか。それはできると思います。例えば、イラクを侵略すれば、米大統領を逮捕するように国際民衆刑事法廷に訴える。その運動をしたら面白いと思います。そういう模擬裁判は日本でやったことがありますよね。イスラエル政府がレバノンを侵略した時、東京で国際民衆裁判があつたんですよ。もちろん、拘束力はなかつたんだけど。ある程度の効果はあつたと思います。それはもちろん、かなりの努力が必要だけど。とにかく、今の状態を見ていて、国際法の問題は非常に大きいと私は思います。

国連は、最近、国際刑事裁判所を作ろうとしています。今まで国連にはそのようなきちんとか条約に基づいてできた裁判所はなくて、今、作っているわけです。クリントン大統領は任期の終わる数日前に、それに署名しました。その署名というのは、国会で承認しないと駄目なんですけれども、ブッシュ大統領になつて、その署名を取り消して、協力しないと云ってるんです。それは従来の国際法から考えれば、ブッシュ大統領がこれから戦争犯罪をやろうとしていることがはっきりしていることを示しています。だから、国際法の動向には注意が必要です。みんなで国際法を勉強しましょう。

Q 7 四年前にクリントン大統領が、個人的スキャンダルを攻撃された後、全然関係ない都市を爆撃している。

それから、十一年前、ブッシュの父親の大統領のとき湾岸戦争になった。その四十五年前、ルーズベルト大統領が原爆を開発して、広島と長崎に原爆を落とした。アメリカは建国以来、初めから侵略的な、人間を虐殺したりする、そういう国だったのか。それとも平和と自由の国だったのか、途中から悪くなったのか、よくわからない。ぼくは戦争中、鬼畜米英と言って、「アメリカとイギリスは鬼やけだものよりひどい」と習った。小学生の時のその記憶が消えないんですが、今もアメリカの大統領は一貫して悪いのか。いつ頃からはつきり悪くなったのか教えてください。

アメリカが変わったかどうか、その議論を始めたらキリがない。変わってないという立場が成り立つ。アメリカインディアンがもしここにいれば、「いや、変わってない」と。自分の立場から見るとそうなる。変わった部分と変わってない部分がある。でも、変わったところもあると思います。それは、本質的に変わったかどうかともかくとして、具体的に変わったところがあります。一つは、今まで、アメリカの政府はごまかしごまかしながらも、憲法を大体守ってきた。守らざるを得なかったからですが。この軍事裁判制度で、私の知っているかぎり、初めて憲法を完全に無視しています。堂々と無視している。これまでの軍事裁判での憲法無視の判例が一つあります。第二次世界大戦中、ドイツの潜水艦が来て、ドイツ軍をアメリカに上陸させた。その人たちが、逮捕されて軍事裁判で死刑になった。それ以外、先例はありません。

もう一つの大きな変化は、ベトナム戦争のとき以来、左翼とマルクス主義者は、「アメリカは帝国主義者だ」と言いつづけたが、政府寄りのもの書きが「アメリカは民主主義であって、帝国主義ではありません」と、ずっと言っていたのに、今度は、「アメリカは帝国主義です」と言い始めたことです。堂々と「世界帝国を作ってもよろしい」と、公に言い始めた。そして、「侵略してもよろしい」と。今まで侵略した時は「これは侵略じゃない」と言っていたのに、「今度はイラクを侵略します」と。それは大きな変化といえますが、日本文学から一つの言葉を借りると、

「正体を見せた」のかもしれない。本当はこうだった。そういう変化があると、思います。

Q 8 衆議院議員の阿部知子と申します。先ほど、ラミスさんが途中でお話を区切られた、日本政府がなぜアメリカに追隨しているかとしているのかということは、私自身も疑問をもっています。その点についてのラミスさんのお考えを伺いたい。

それと、私は今日フィリピンから帰ってきたんですけど、フィリピンで、今、アジア規模で様々な国で起こっている人権侵害、とくに相手をテロリストと決め付けることによって自国の政府も、場合によってはアメリカも、そのことに後方から援助することが起きている。例えばCIAだとかが、フィリピンのテロリストをあぶりだして、逮捕するというようなことも、各地の紛争で現実になってきていると思います。そうすると、今起こっていることはすべて、アメリカの非常に人権を侵害する行動だけではなくて、ある意味で、世界的に見て、あらゆる問題を抱えたところを、人権のために戦う人たちを「テロリスト」として攻撃していくような構造が世界的な流れになっているのではないかという思いを、今日まで実感してきました。その点についてもご意見をお願いします。

日本政府はなぜ、五〇年間以上もの長い間、アメリカ政府の言うとおりにしつづけているか、ということとは、私にとってミステリーです。本当にわからない。自民党の政治家は、民族主義者ですよ。靖国神社に行きたいし、「日の丸」とか「君が代」をやりたい。大東亜戦争は正しかったと言いたい人もいるし、日本が正しかったと言いたい。それだったら、せつかくの立派な右翼だったら、その先にもう一步、なぜ行かないのか。つまり、まず、独立すればいいんじゃないかと思います。右翼として非常に矛盾しています。民族主義、右翼を名乗る人たちはみなアメリカの言うとおりにします。……みじめですよ。

なぜアメリカの基地をなくさないか、と、識者に聞いたら、アメリカの経済力に負けるとか、経済的にダメージを受ける、と。

フィリピンがもうちょっと元気な時、経済力は全然ない国でありながら、米軍基地を追い出したんです。そのエネルギーは、経済力ではなくて、フィリピンの民族主義です。火山の噴火があったので、アメリカはそれを利用して撤退したと言われていますが、それは違います。あくまでもフィリピンの民族主義の力です。「米軍基地がフィリピンにあるのは侮辱だ」と感じて、貧乏でもいいから追い出すということを国会で決めた。米軍基地は要らないと言った人たちの中には、たぶん、保守的な議員もいた。日本では保守的な人が米軍の駐留を望んでいる。理由はなぜか。自民党の真相を説明できるなら説明してほしい。

私は、文化人類学者が、自民党あるいは外務省文化を研究すると、おもしろい研究ができると思います。(笑いと拍手) (まとめ 古賀節子)

(八月三十一日、藤沢市民会館で。主催へ白いリボン行動実行委員会) 共催へあこら湘南)

■ダグラス・ラミスさん 一九三六年、サンフランシスコ生まれ。カリフォルニア大学在学中に海兵隊に入り、復帰前の沖縄に駐留後、日本で生活を始め、津田塾大学講師のち教授(政治学二十年)を経て退職。その後、沖縄に在住し、沖縄を拠点に執筆活動が続けています。主な著書に『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』(平凡社)、絵本『考え、売ります』(平凡社)、『世界がもし一〇〇人の村だったら』(マガジンハウス) 池田香代子再話/ダグラス・ラミス対訳、『憲法と戦争』(晶文社) など多数。

■バーバラ・リーさん日本講演録

運動は一人から始まる

報復戦争決議に反対したただ一人の米連邦下院議員

バーバラ・リー

みなさん、こんばんは。日本のような偉大な国に来ることができ、みなさんと時間を過ごすことができて光榮です。そして、この来日を可能にして下さった私を呼ぶ会のみなさまに、心から感謝を申し上げます。また、私の選挙区六〇万人と共にご挨拶申し上げます。

私の選挙区はカリフォルニア州のサンフランシスコから湾の対岸にあるオークランド、バークレー、リッチモンドなどです。そこに住んでいる人びとは世界中からやってきたさまざまな民族であり、貧富の差もありますが、きちんとものごとを考える意識の高い人が多い、心と魂を持つ地域です。平和運動の出発点であり、平和運動の真髄を伝え続けています。

八月は追憶の月、9月は記憶の月

私は八月に来日できたことを光榮に思っています。八月は追憶の月だからです。そしてやがてくる九月。九月は心と思い出の中に一生焼き付くであろう記憶の月です。しかしこの記憶こそ



平和のために働かなければと思う私たちの原動力となっていくことでしよう。今、私たちは子どもや孫たちのために、世界のさまざまな対立に対し、永久にそれを解決する方法を見つける責任があります。その解決方法は、戦争や武器を通してではなく、外交的な関わり合い、経済的な交渉、平和的な交渉によって可能になると信じています。

私は選挙で選ばれた人間として、政策を作る仕事、つまり平和を進めるための政策を作っていく責任があります。この政策は外交をさらに進めるためのものであり、軍事費を高めたり、軍拡競争をさらに助長するようなものではありません。実際の目には見えにくい政策ですが、とても重要なものがあります。それは人の命を大切にすることを政策作っていくことです。

私たちは過去のできごとをもう一度振り返って、歴史から学ぶ必要があります。マハトマ・ガンジー、マーティン・ルーサー・キング牧師の言葉や行動から学ぶ必要があります。キング牧師の最も有名なスピーチの一つに、アメリカと世界に向けた「私にはよりよい未来をつくる夢がある。その夢は、すべての人種が平等で正義を与えられるという夢である」があります。キング牧師は、さらに重要な言葉を加えています。「そのためにはすべての人が、平和の質とは何かを理解することができることである」と。

暗殺される一年前に、ニューヨークのリバーサイド教会で行なわれた演説では、「すべての国々には個々の社会において人びとに最良のものを残すよう、人類全体を最も大切なものと思う心を養わなければならない」と語りました。「自分の部族を超え、人種を超え、階級を超え、国家を超えて、世界全体が兄弟愛で結ばれるよう、すべての人間を積極的に無条件に愛さなければならない」とキング牧師は言い残したのです。

テロを理由に世界を戦争の危機にさらすな

去年の九月十一日のテロ攻撃には、アメリカをはじめ、世界中の人びとが、驚き、怒り、悲しみました。当時は深いショックと失意の念に打ちひしがれていましたが、徐々にその衝撃から立ち直ろうとしているところです。今ではペンタゴンの壁は修復され、ワールドトレードセンターの瓦礫は取り除かれています。

自分たちがこんなにも脆弱な者だったかという新しい認識に立つて、警備や防衛網をより強くにし、制度や設備をさらに安全なものにしようとし、国全体の警戒心がより強くなりました。確かに多くのアメリカ人、そして世界の多くの人びとにとって、9・11は、これからも癒えることのない傷となるでしょう。ニューヨークは世界経済の中心でした。亡くなったのはアメリカ人だけではありません。ワールドトレードセンターというのは、国際的な活動の中心地でもありましたから、そこで働いていた日本人をはじめ世界中の国の方が亡くなられました。この攻撃によって亡くなられた人びとや遺族の悲しみは、まだ消えていません。それを想って私たちも、深い悲しみの念にまだまだ浸っているのです。

私自身もこの攻撃に反発と怒りを感じましたし、今もそれを抱えています。私は、このテロ

を行なった人間たちを裁きの場に着かせるためのステップを取らなければならないと思っています。しかし、戦争に訴えることには絶対に反対です。世界を戦争の危機にさらすべきではないと考えています。世界全体の意識を高め、何が起こったのかを知り、人びとは平和を大切に思い、世界をより安全にすることが、この大きな傷をいやす唯一の道になるでしょう。

連邦議会の決議にただ一人の反対票

では9・11以降の動向と、それに対して私たちはどのような気持ちを持っているかについて、みなさんにお話ししたいと思います。

攻撃の日から三日後の九月十四日、私は「大統領に対して、（誰が対象になるかもわからない）報復攻撃決議に対する反対を述べた」、たった一人の国会議員になっていました。この決議というのは、「議会は九月十一日に起こったテロを実行、または援助したと大統領が認める国・組織・個人、及びそのような組織や個人をかくまった個人・国・組織に対して、必要及び適切な武力を行使する権限を大統領に与える」というものでした。今までの戦争やテロに対して、大統領が行使できる権限とは全く違い、今回の決議では、武力行使の対象が特定の国や地域に限定されず、世界全体であり、期限は無期限となっています。アメリカ合衆国憲法によりますと、議会だけが戦争を布告する権限を持っています。武力行使の権限は議会にあり、大統領にはありません。このような広汎な権限を大統領に与えたということは、金額を書いていない小切手を渡したのと同じになります。私はこのように広汎な権限を大統領に与える憲法違反の決議を支持することは私にはできませんでした。

正直に言いまして、私一人が反対票を投ずることになるとは思っていませんでした。そうい

う可能性がなくはないと思っていましたが、私がこのような意見を持っていることを何人かの議員は共有してくれていましたし、またこの決議に対して慎重な気持ちを口に出して言っていた議員もいましたから。

今までの歴史を考えてみますと、過去においても、一人で自分の良心に従って投票した例があります。民主主義の命は何かといえますと、それは反対する権利があるということを認識することです。「私たちがここで反対するべきだと判断したら、反対するのが私たちの義務である」と 생각합니다。ですから、私は当時も今も「ノー」という票を投じたことについては、正しいことだったと思っています（拍手）。民主主義というものは、質問と議論、自由な意見の交換を要求するものです。これこそが本当のアメリカのやり方なのです。疑問が投げかけられないような民主主義は民主主義ではありません。私は、「民主主義を守る憲法」を守るためには、たとえ一人でもたたかわなければと思いました。

「よくも一人で反対した」と言われますが、私は、運動の原点は「一人」だと思っています。この私、この一人、が動いてこそ、すべてが始まります。一人で動き始めるのには勇気が要りますが、その一人の勇気がないかぎり何事も始まりません。

平和とは「正義がある状態」

私はテロリストは法によって裁くべきだと思います。どんな国、個人、グループであっても、この考えを理解しないのはあやまちだと思います。不要な軍事的行動を起こして、罪のない人びとの命を危険にさらすような行動は間違いです。軍事行動は決してすべきではないと思います。私たちがどのような対話をするかによって、世界全体がこれからどのような方向にいくのか、ど



のような状況になるのか、ひいては子どもたちにどのような世界を私たちが残していくのかを決めることになる。私たちの姿勢が世界の未来を決定すると思います。

私たちは、テロリストから自らを守り、警備を強化することを多くの国ぐにと協力してやら

ねばなりません。また外交と発展にこそさらに投資し、その力でさらに前進すべきだと思います。

もし我われの安全保障をここで回復し、多面的な運動を展開することができれば、「平和」と「正義」の行われる条件が世界全体で整うことになります。現在の世界は核兵器がどの方向にも向いているような状況にあるわけですから、すべての可能性を世界中さまざまな角度から追及して、自らの手で我われ自身の安全保障を強化するときではないでしょうか。

核兵器がどこに向かって発射されてもおかしくない今日、私たちは、すべての危機の可能性を追求すべきです。アメリカは今、単独主義を進めて一方的に盲目的に軍事行動を起こし、私たちの友好国、同盟国を無視していますが、これは極めて大きな間違いです。テロに対決するのには、私たちは「協調」と「持続可能な社会」を可能にする仕組みを、世界中で、自らの手で作るべきだと思います。

ます。

キング牧師は「平和とは、緊張がないという状態ではなく、正義が存在する状態だ」と言いました。国家予算を見ますと、その国でどのような正義が行なわれているかが明らかにわかります。アメリカの多国籍企業や軍需産業のリーダーたちは（思慮のある優先順位のための企業指導者グループ）といったシンクタンクを作っており、たいへん歪曲した予算の分析や優先順位の決定を行なっています。アメリカ合衆国は、軍事予算では世界で一位ですが、学校教育費は世界十位です。核兵器の貯蔵量は世界一位でありながら、新生児死亡の予防率では世界十三位です。大統領が議会に二〇〇三年度の予算案を提出しましたが、軍事支出が四〇〇〇億ドル（四九〇兆円）。それに対して国際関係予算は二三〇億ドル（二兆三千億円）に過ぎませんでした。海外支援金はGDPの〇・一パーセント程度で、八〇年度の半分にすぎません。

私はこのような連邦予算は変えなければならないと思っています。つまり、我われが何を優先順位と考えているか、何をビジョンに持っているかを示すのが予算だからです。私は予算を他国の開発にもっと向けなければならないと思っています。開発援助によって、貧しさや病氣から解放されるとき、キング牧師のいう正義が生まれてくるからです。

〈平和省〉で テロと戦おう

私は政府機関のなかに「平和省」という省を作することを提案してきました。この省は戦争以外の代替案を提案するものです。この省は平和を中心課題として、平和と正義を、民主主義的に促進します。また同時にこの平和省は平和を実現するための戦略を作り、世界の紛争を、話し合いなど軍事力によらない方法で解決します。

例えば9・11の対応策や安全保障の戦略を議論するとき、平和省長官が国防長官や国家安全保障補佐官の隣に座っていて、より世界を安全にするための戦略を練っていると考えてみて下さい。戦争というのは大きな代償を伴うものですが、平和省長官は、そのことに気づかせ、平和をより現実的なものとするでしょう。

テロの根本原因は、貧困や病氣、経済的な格差です。それらを是正し、高度な価値観を構築するとき、初めて平和を実現できるのです。アメリカからの一方的な軍事行動は、テロの解決にはなりません（拍手）。国際的に連帯することが大切です。それによって我われが今直面している大きな問題にも対応することができるようになります。

例えば、いまHIV・エイズが猛威をふるっています。これは世界すべての国ぐに起こっている問題です。アフリカでまず大問題になり、続いてアジアに時間差で訪れ、中国、ロシア、インドなどが続いています。地球温暖化、環境汚染も世界レベルでさらに悪化し、私たちの健康が脅かされています。また大量殺戮兵器も拡散しています。一国主義の行動ではこのような危機を回避できません。

国際的な協力が大切であり、その意味で、国際機関・国連は重要です。私は以前、アメリカ合衆国が「エイズ、結核、マラリアの撲滅のために戦う地球市民基金」への拠出金を増やすべきであると思ひ、このような基金を作るための支援をしました。超党派で法案を出し、それが通過しました。最終的に当時のクリントン大統領がそれに署名をして法律となりました。

アメリカ合衆国は世界規模の地球温暖化に対応するために、京都議定書を守すべきだと思います。私は基本目標を示すための決議を提出し、アメリカ合衆国はこれからも京都議定書を守すべきであるという修正案を作った一人でもあります。このようなことは結果的にアメリカ合衆国の国益にも沿うようになりますし、世界全体の利益にもなることで、残念ながら、アメリ

力合衆国は、それをまだ実行していません。

またアメリカ合衆国は同盟国と協力をして、大量殺戮兵器の危険度を下げるべきだと思えます。そのためには反大陸弾道弾ミサイル締結条約（ABM）の原則をこれからも維持していくことです。最終的には大量殺戮兵器の撤廃をするという決意を行動で示すべきです（拍手）。

このような考えかたをしている者は、私一人ではありません。私は、多くの同僚たちと共に訴訟を行いました。それは、「ブッシュ大統領は反大陸弾道弾ミサイル条約を辞める決定権は持っていない」という訴訟です。大統領の権限というのは無制限ではありません。私はアメリカ合衆国憲法は平和の強い擁護者だと思っていますし、同時に権力の分立の基本的な原則を守るべきだと思っています。一人です。

アメリカのなかでミサイル防衛網こそ国の必要な防衛網だと言っている人たちがいます。私たちはこのような政治家の考えかたは間違っており、勘違いしていると思っています。彼らが間違っていると思う理由は、このような防衛体制を作ると、何十億ドル（何兆円）もお金を注ぎこまなければならないうえに、それは各国の新たな軍拡を誘い、軍拡競争を高めることにしかならないと思うからです。アメリカが取るべきリーダーシップというのは核兵器の非拡散であり、軍拡を進めることではありません。私たちはまた、アメリカとして、包括的な核実験禁止条約（CTBT）を批准すべきでした。生物兵器・化学兵器などを含む大量破壊兵器に反対する国際条約にも再度加盟すべきです。これこそが、私たちの安全保障の最終的解決になるのです。前に言いましたが、一国中心主義ではなく多国主義になることが問題解決になると信じています。みなさんもそう考えておられるはずです。私たちはこれから国際的に共に手を繋ぎ、協力していくことが必要です。その協力が立つて、私たちの大きな能力と資源とともに民主主義と遵法の精神と人権をさらに進め、平和の大義を確立するために協力していきましょう。

そのために、まず人びとの意識を高める必要があります。平和と正義の国際的な運動をつくり、地球の将来のための国際対話を進めましょう。私たちは自分たちが本心に信じる信念に立ち、自分たちの中にあるコンパスに従って、困難な道を突き進んでいきましょう。それによつてこそ、「テロの恐れによる自由の侵害」を防ぐことができるはずです。

「希望」こそが、「平和」への道

これから平和を進めるためには、みんな一緒になつて貧困や病気や失望の念という問題に対応することが大切だと思います。そのためには、「希望」を作っていくことです。希望こそが怒りや憎しみに対する最もよい防衛になります。これは草の根運動の力によつてできると思いますが、つまり、NGOの人たちや市民団体と一緒になつて活動することによつて、政策に影響力を与え、具体的な解決策を作っていくができます。これは、ふつうの人びとの力があればできることです。平和を私たちのゴールとすることで、今まで言ってきたことができます。平和は私たちが到達できるゴールと考えることが大事です。そう思わない限り、決して平和に到達することはできません。

私は今日、ここに来られたことを感謝しています。私が感じている友情と連帯の気持ちを持つて、これから将来の国際的な協力というものを、みなさんと共に考えていきたいと思っています。

最後になりましたが、賛美歌のなかの言葉で、私のスピーチを終わりたいと思います。これは、折りのなかでも極めて基本的なもので、多くの人が歌っています。

グラント・アス・ピース！（平和を与え給え）（拍手）

*

スピーチのあと、落合恵子さんとの対話に移り、アフロアメリカン生まれのバーバラ・リーさんが、出生の時から黒人ゆえに入院を断られ、大難産、「たたかいながら生まれてきた」こと。その母からは「正しいことをなせ」と育てられ、「正義の基準は、人間としてまっとうな家に住める権利、医療を受けられる権利、よい教育を受ける権利が保障されること。人間が人間として扱われること。それが正義のなかみだと思う」と言い続けることなど、具体的な話の中にバーバラさんのより人間的な姿が浮かび上がりました。この部分は著作権の関係でご紹介できないのが残念ですが、概要は『あごろ』七八号（四〇〇四八）「ほんとうの正義を語るバーバラ・リーさん」（増田れい子）に紹介されています。バーバラ・リーさんのいつそうの活躍を祈り、「平和と正義」の実現に、私たちも力をつくしたいと思います。（まとめ 小柴久子）

「八月二日 赤坂プリンスホテルクリスタルパレスでの講演会から。主催バーバラ・リーさんを呼ぶ会。資料提供＝反戦・平和アクション（<http://peaceact.jca.apc.org/>）」

【資料】

バーバラ・リー下院議員による報復反対の議会演説

議長、私は今日、ニューヨーク、バージニア、ペンシルベニアで殺され傷つけられた家族と愛する人びとへの悲しみでいっぱいになりながら、耐えがたい気持ちで演説に立っています。

アメリカ国民と全世界の何百万もの人々をとらえた悲しみを理解しないのは最も愚かな者が最も無神経な者だけでしょう。

アメリカ合衆国に対するこの筆舌に尽くしがたい攻撃のために、私は向かうべき方向を求めて自らの道徳指針と良心と神に頼らざるをえませんでした。

9月11日は世界を変えました。最も深い恐怖が今や私たちの心に付きまとつてます。しかしながら、私は軍事行動はアメリカ合衆国に対する国際的なテロリズムのこれ以上の行動を防がないと確信しています。

私は、大統領はこの決議がなくても戦争を行なうことができることを私たち全員が分かっているにもかかわらずこの武力行使決議が通過するのだということを知っています。「これに反対する投票」がどんなに困難なものであろうとも、私たちの何人かが自制を行使するように説得しなければなりません。

「しばらく距離を置いてみて今日の私たちの行動がもつ意味を通して考えよう。その結果をもつと十分に理解しよう」と言う何人かが、私たちの中にいなければなりません。私たちは従来型の戦争を扱っているわけではありません。ですから私たちは従来型のやり方の対応はできないのです。

私はこの悪循環が制御不能になるのを見たくありません。今回の危機には国家の安全や外交政策や社会安全や情報収集や経済や殺人といった諸問題が入っているのです。私たちの対応はそれと同様に多面的でなければなりません。私たちはあわてて判定を下してはなりません。もしも私たちがあわてて反撃を開始すれば、女性や子どもやその他の非戦闘員が十字砲火を浴びるといふ大きな危険な目に遭う恐れがあるのです。

私たちは、残忍な殺人者によるこの狂暴な行為に対する正当な怒りがあるからと、あらゆるアラブ系のアメリカ人やイスラム教徒や東南アジア出身者や他のどの人びとに対しても人種や宗教や民族を理由として偏見をおおることはできません。

私たちは過去の戦略も焦点を合わせた標的もなしに、無制限の戦争を開始しないように注意を払わなければなりません。私たちは過去の過ちを繰り返すことはできません。一九六四年に連邦議会はリンドン・ジョンソン大統領に、攻撃を撃退しさらなる侵略行為を防ぐために「あらゆる必要な手段をとる」権力を与えました。その決定をした時に、連邦議会は憲法上の責任を放棄し、長年にわたるベトナムでの宣戦布告なき戦争へとアメリカ合衆国を送り出したのです。

当時、トンキン湾決議にただ二人反対票を投じたうちの一人であるワイン・モース上院議員は言明しました。「歴史は我われがアメリカ合衆国憲法をくつがえし台無しにするという重大な過ちを犯したのだということを記録するであろうと私は信じる。……将来の世代の人びとはこのような歴史的な過ちを現に犯そうとしている連邦議会を落胆と大いなる失望をもって見るようになるだろうと私は信じる。」

モース上院議員は正しかったのです。私は今日、同じ過ちを私たちが犯しているのではないかと恐れています。そして私はその結果を恐れています。私はこの投票をするのに思い悩んできました。しかし私は今日、ナショナル・カテドラルでのとてもつらい、しかし美しい追悼会の中で、この投票に正面から取り組むことにしたのです。牧師の一人がとても感銘深く「私たちは行動する際には、自らが深く悔いる害悪にならないようにしましょう。」と語ったのです。

高砂建設賃金差別訴訟、勝利の和解

男女の賃金差別是正を訴えて労働組合をつくったことなどを口実に、配転・解雇され、九年以上も闘い続けてきた高砂建設の元社員、宮成友恵さん（四五歳）と、高砂建設との和解が一月七日、さいたま地裁川越支部で成立した。

内容は、1懲戒解雇（九六年四月十五日）を撤回し、同日付けで円満退社する。2改めて雇用契約を結び、五月十三日から就労する。3高砂建設は、原告の年休や介護休暇・退職金の基礎となる勤続年数について、入社時（八六年五月）まで継続していたものとして扱う、など、宮成さん側の、ほぼ全面勝利となった。

解雇当時の宮成さん（当時三六歳）の賃金は十七万九千円で、同じ営業所の男子社員と十万円の格差があった。再雇用後の労働条件は、同じ営業職で、基本給は二八万五千円。勤務地も、家族の介護や育児など、宮成さんの家庭事情に配慮し、住居から一番近い支店とするなど、会社側も

精いっぱい配慮を。和解金は、要求額（三十万二千円）とほぼ同じ。

差別撤回訴訟で、解雇を撤回したうえ、再び雇用することになった例はきわめて珍しく、慰謝料を抑えて実績をとった意図は見事に成功した。「この成功は、みんなの財産です」という宮成さんの志は、次の時代への大きな一歩となるだろう。

江ノ島のかながわ女性センターが消える

不況のおり、各地の女性センターが整理の対象にあげられているが、女性センターの草分けともいえる江の島のかな川女性センターの移転が決まった。塩害で建物の老朽化が激しい、立地条件が悪く、利用者が年々減少等が、その理由。初代金森トシエ館長のもと、意義深いセミナーを何度も聞き、全国区での利用も多かった名門「江の島」だが、当初の五部門は六年前に縮小され、現在は企画さえ外部に

委託、宿泊の条件も厳しくなり、利用者が激減していた。

とはいえ「江の島」の目玉の一つは、九万五千冊にのぼる女性問題の図書。山川菊栄文庫や国労婦人部関係をはじめ、女性史関係の資料も多く、『あゝ』も、創刊号以来の全巻が揃っており、ここで『あゝ』を知った人も多かっただけに、残念というほかない。大学等への寄付も検討されているようだが、大学の図書館に入ると、一般の利用は大幅に制限される。とくに山川菊栄文庫などは、ご出身の藤沢市あたりで、ぜひ保管し、有効利用をと、保存運動も始まった。

千葉県でDV基金設立の動き

堂本知事の千葉県では、「DV施策先進県へ」をモットーに、DV対策を着々と打ち出し、昨年四月、千葉県女性サポートセンターをオープンさせ、二四時間電話相談・緊急避難の受入などを行なっていることは『あゝ』279号「DV特集」でも詳報したとおりだが、自治体に劣らず、めざましい活動が続けている民間団体は、どこも資金不足が最大の問題。そこで昨秋から、渥美雅子さんら一五三名の個人と看護協会・人権擁護委員会など二十数団体が呼び

かけ、DV基金設立運動が始まった。千葉県も、この基金を補助してゆく。全国のDV救済活動の活性化とともに、資金面では困難が増大しているだけに、この試みは全国から注目されている。

もんじゅ設置許可取消し 原発に画期的判決

一月二七日、名古屋高裁金沢支部は、核燃料サイクル開発機構の高速増殖炉「もんじゅ」の設置取消しを判決、一連の原発裁判の流れを大きく変えるものとして論議をよんでいる。

判決は「炉心崩壊事故は現実起こりうる事象として、その安全評価がなされなくてはならない」と、「予防原則」を高くうち出し、「国の安全審査には多くの重大な欠陥がある。原子力設置法案に違反するうえ、審査内容にはまことに無責任で、審査の放棄といっても過言ではない」と断じた。

判決は、さらにナトリウム漏れ事故後に核燃料機構が提出、昨年十二月までに「安全審査」をクリアした設置変更（一部の改造）についても「安全審査の欠陥を是正するものではない」とした。福井県の理解が得られれば三月に

工事を開始、○五年にも運転再開をと企画した政府の思惑は完全に打ち砕かれた。

もんじゅは、当初二千億円と見込んだ建設費が六千億円を超え、改造・修繕を加えると一兆円を超えている。九五年のナトリウム事故による運転停止以後も、政府は、年間百億円、合計九百億円を超える維持費を投じて運転再開に備えてきたが、これで再開はほとんど不可能になった。

もんじゅが撤収されることになると、二兆円の建設費をかけた再処理工場も無用の長物となり、原子力政策そのものが抜本的に問われることになる。これまでの原発訴訟の判決が原子力行政への異議申し立てにはならなかったことを考えると、今回の判決は全く画期的な判決と言えよう。

もんじゅ以外の原子炉でも重大な事故が発生、各地の事故隠しも発覚している。処分方法がないまま溜まり続ける放射性物質に、世界の各国は原発の撤退を始めている。この判決は政策の大転換を迫るものとなるだろう。

山形大寮生、人権侵害で大学を告訴

二〇〇〇年三月、大学の臨時職員が学寮内で学生の所有する資料やピラを集め、それを追求した学生を大学側が告

発、寮生四名が二一日間の拘留ののち不起訴になったものの、その後、改築した寮への入居を認めないなどの強権を発動。学生側は人権と生活権侵害で大学に損害賠償を求めて告訴、一月二一日、山形地裁で初の公判が開かれた。

裁判の敗訴者負担に抗議デモ

民事裁判で勝った側の弁護士費用を負けた側が負担する「弁護士報酬の敗訴者負担制度」の導入が、政府の司法制度改革推進本部・司法アクセス検討会で大づめを迎えている。道理のない裁判を無理に仕掛けられた時でも自分の弁護士費用を相手に負担させることができない現行制度には批判もあるが、企業や行政など強者の過ちによる被害を受けた弱者にとっては、敗訴者負担ともなれば、裁判を起こすことがいま以上に困難になる。一月二九日、これに反対する日弁連の弁護士や公害訴訟の原告らが、東京で反対のデモを展開した。

東芝府中、ゼロ残業を約二十四年継続

七九年一月一日に行動開始、同年四月から事業所前でビ

ラまきを続けてきた東芝府中働く者ネットの「ゼロ残業闘争」はまもなく満二十四年を迎える。「サービス残業」が当然化している不況の今、この地道で正統的な活動の意味は大きい。

ロシア、チエチエン南部地域を激しく爆撃

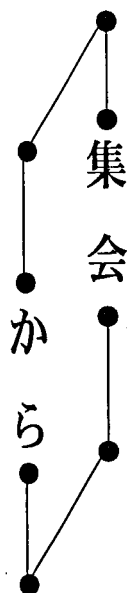
モスクワの劇場テロ事件以来、ロシア政府のチエチエン弾圧はますます激しくなっているが、世界にはその情報はほとんど伝わらない。チエチエン側に立つ『チエチエンプレス』によると、チエチエン南部山岳地帯、イトウムカリ、シャトイ両地区の森林部にロシア軍機が激しい爆撃を加えており、爆撃は大部分が夜間爆撃で、大深度用の強力爆弾が使用されているという。アルグンは、ロシア軍の封鎖下に、大規模な掃討作戦が続いており百人以上の住民が人質に取られ、目撃者の通報によれば、すでに十人以上が殺された。拘束され連行された人びとの運命は不明。

欧州議会 チエチエン問題決議草案を審議

チエチエンの窮状に対し国際ラジカル党(T.R.D.)議員団が中心になってまとめた、チエチエン問題決議草案は、「チエチエンの状況はたんにチエチエン国民の悲劇であるばかりではなく、ロシアの民主主義、全コーカサス地方の安定そして全人類の安全保障への深刻な脅威であり、チエチエンでロシア軍が行なった基本的人權の侵害の範囲の広さと酷薄さは、近代史上他に例を採することはできない。

チエチエン難民の置かれている悲劇的状況は、E.U.が、チエチエンに対する大規模な人道支援作戦を策定せねばならない段階に來ていると指摘。欧州議会がE.U.に対し、早急にプーチン・マスハドフ両大統領による交渉の開始を勧告するよう提案している。

同草案では、二十万人にのぼるチエチエン難民の避難場所を全E.U.参加十五国家が分担して提供するよう呼びかけるとともに、欧州議会が参加各国にヨーロッパ各地で避難場所を求めるチエチエン人のロシアへの引き渡し手続きの停止を求め、チエチエン政府要員とチエチエン国民の利益を代表する活動家のヨーロッパ国内での移動の自由を確保するため、ビザ発給に関してE.U.諸国が共同行動をとることを勧告した。



世界にあふれた反戦の声

1. 18 イラク攻撃反対世界統一行動

十二年前、米国のイラク攻撃が始まった日、一月十八日を期して、全世界で、反戦集会がわき起こった。

日本では、東京・札幌・名古屋・大阪・京都・広島・沖縄など十数か所に、近來にない大規模なデモを展開した。

東京は（ワールドピースナウ1・18実行委員会）が主催し、日比谷―新橋―銀座―日比谷をデモし、午後五時からの集会に終結した。

集会は、実行委の曹美齡さんが、「自分が動いたら何か変わるかもしれないという思いで呼びかけた」とあいさつ。アメリカの集会を主催しているANNS

N（戦争停止と人種差別終結を今こそ）からのメッセージ「アメリカの戦争を止められるのは国境を越えた声だ」を紹介して始まった。

イラク訪問団の佐藤真紀さんは、「人間として生きている自分たちを人間として扱ってほしい」というイラク民衆の声を紹介。「生きている人を空爆することの意味を、五分でも十分でも考えてほしい」とアピール。

未来バンク事業組合理事長の田中優さんは、「この戦争の目的は、金・石油・軍需。平和は運動を続けないと保たれない」

キリスト者平和ネットの宇野徹さんは、「英国教会も全米カトリック司教会議もローマ法王もこの戦争に反対している」

エッセイストの朴慶南さんは、「殺さない・殺されない、踏みにじらない・踏みにじられない」という命のモノサシに立つ言葉と知恵で戦争を防ごう」と呼びかけ、最後に、「すべての武器を楽器に変えて」と訴えて参加した嘉納昌吉さんの歌で締めた。

土曜の午後とあって、外国人、学生、一般市民な

ど、デモや集会慣れしない人の参加も多く、七千人を超える熱気。六〇年安保が始まった頃を思い出した。シュプレヒコールなど、手慣れた一団に、初めて参加した人の中には、たじろぐ人びともいたが、安保の時のように回を重ねることに盛り上がるだろう。繰返し展開することこそ重要だという思いを強くした。

世界一斉に声を、というこの企画は、あつというまに全世界にメールで広がった。暦の関係でアメリカはじめ世界の多くの国ぐにでは翌十九日（日）の開催となったが、どこでも数万から数十万の規模に。ブッシュ氏を支持するブレア首相の英国でも、民心は、超大国米国のおくなき野望に厭戦の思いをつのらせていることが明らかになった。

しかし、米国の強硬な姿勢は、エスカレートする一方。各国の政府・国家と、人民との間の温度差は、さらに広がっていく。米国の意志を逆転させるのは、現状ではほとんど絶望的に思われる。世界の民衆がどれだけの情熱で反戦運動を持続できるかが、二一世紀の未来を決める。

(K)

〈アフガン〉に〈ヘイラク〉をダブらせて アフガン国際戦犯民衆法廷Ⅲ

「9・11テロの元凶はオサマ・ビン・ラーディン」と、テロ直後にいち早く発表、アフガン空爆を強行した米国。テロの元凶は本当に抑えられたのか。アフガンの民衆に春は訪れたのか。

——真実を求めて告発を続けるアフガン国際戦犯民衆法廷。三回目は一月二二日、東京・澁谷の専門学校伊藤塾で開かれた。

大教室で開かれた法廷に表われたのは、ブッシュ氏のお面をつけた被告。「テロは戦争や」と関西弁でまくしたてると、爆笑の渦。

しかし内容は、「法廷」らしく厳粛。弁護士の内田雅敏さんは、「自衛隊のアフガン空爆協力」について、「アフガニスタン空爆は国際法から見ても違法。憲法九条を持つ日本が加担することは、どのような理由を述べても正当化できない」と論破。和光大・憲法学講師の清水雅孝さんは、「欧米石油資本に対抗し

て石油を国有化したイラク・イランは『悪の枢軸』にされた。湾岸戦争もアフガン戦争も、石油利権のためだ」と、利権に立つ米国の軍事戦略に盲従する日本政府を批判。

両氏の論破のたびにブッシュ氏が関西弁で反論。笑いのうちに真実が見えてくる趣向は、最近の集会の中では抜群。おもしろいはず、この法廷の共同代表は前田朗氏。おひざ元の学生さんはじめ、実行委員はほとんど若者。今後、毎月一回、全国各地を巡回するというが、こういう若者たちの知恵と熱意を集めた催しが、今後いろいろなかたちで各地で展開されることを期待したい。

(前)

惜しまれて解散・独婦連

婚約者などを戦争で失ったために結婚する機会を逃した女性たちが「こういう女性たちの存在を知らせて永く戦争を記憶しよう」と、一九六七年発足した独身婦人連盟(通称どくふれん・代表大久保さわ子さん)が、昨年九月三〇日、創立三十周年を記念

して「閉幕の集い」を持った。

夫となる人、父、兄弟、知人を戦争で奪われ、事あるごとに反戦の旗を掲げてきた独婦連は、女性たちの共同の墓をつくるなど、意義深い活動を続けてきただけに、「会員のほとんどが七十代以上になつた」とはいえ、その解散は惜しまれる。

幕を閉じるにあたつての訴え——「戦争は準備すればやつてくる』ものです。有事法制など戦争を肯定する法は決してつくりたくないでほしい。戦いに狩り出された人の遺骨は、いまだ百十六万体制も、かつての戦地で野ざらしになっているのです」は、切々と、参加者の胸に迫った。

なお、解散後の同会の、元世話役の方のところには、親も兄姉も旅立ち、自分の高齢による失職など現実の困窮の問題も、数かず寄せられている由で、「散会を果たして正解だったのだろうか。今こそ独婦連は必要なのは」という嘆きも聞こえてくるという。独婦連は散会しても、その提起した大きな問題は、多くの女性団体が、しっかりと受けつがなければなるまい。

(み)

李 英伊

(東亜日報東京支社 記者)

十一月初旬急用でソウルに行つて来て、成田空港から東京市内に入る途中であつた。いつものように空港でリムジンバスに乗った。日曜日の夜だからか、道はかなり混んでいた。ひと眠りしたら目的地・新宿に着くだろうと思つて一番前の席に座つて目を閉じた。二十分くらい経ったか、運転手が舌打ちをしながら、腹を立て始めた。渋滞がもつと厳しくなつたようだった。彼は「道が混んでいるので違う路線を利用する」と言つたあと、乱暴に左折して、高速道路から抜け出た。しかし高速道路の外も事情は同じ。バスはまた高速道路に入り、運転手の苦情は続いた。新宿までの二時間、私は彼が事故でも起こすのではないかと、不安感でまったく眠れなかつた。腹が立つた。

十年前、私が初めて日本を訪問した時感心した親切さは少しも見られなかつた。最近ではタクシーに乗つても不快感を感じたことは少なくない。日本のタクシーは世界一親切だと信じたのが禍根になつたかも知れない。この夏、土砂降りの雨の日、築地から日比谷までタクシーで行つた。「近くで申し訳ございません」と頭を下げた。運転手は機嫌悪そうな顔で答えもしなかつた。そして目的地から相当離れた所に車を止めた。私は「雨が激しいのもう少し近くまでお願いします」と頼んだが、「Uターンまでは遠すぎる」と断つた。結局私はびつしより濡れた格好で取材に行かざるを得なかつた。

こんなことは九五年、慶応大学に一年留学していた時にはなかつた経験である。運転手たちだけが變つたわけではない。電車に乗ってみよう。以前は席が空いても急いで座る人は多くなかつた気がする。ソウルでは満員電車の中でみんな体を投げるように席を確保して座るのが当たり前だったのに何とおとなしい人びとだな、と感嘆した。が、この頃は電車の風景が變つてゐる。席が空くと先に座ろうと急ぐ。人に肩がぶつかつても、人の足を踏んでも、謝ることも少なくなつた。過去には謝られる人のほうが悪いのにと思うほど謝りすぎる人もいたが、今は謝らないか、謝つても口だけの言葉に聞こえる。それほど人情が素漠としたのか。

十年前までは韓国人にとって日本はどうしても追い越せない『先進国』であつた。それはただ経済

発展だけの意味だけではない。それより日本人の親切さ、節制、職人氣質、団結心など、国民性への羨ましさがあった。

そんな日本は私に、ある面では『神の国』のイメージを与えた。神の国ではみんな神の意に従って自分の欲を抑える。今の日本を造つて来たのは神を優先し、個人の本能や欲望を限りなく節制してきた国民性ではないかと思う。ここでいう神は天皇、国家、社会システムであり、他人でもある。

韓国人は、こんな神の国の国民性が羨ましく、学ぼうとして来た。韓国の国民性は日本と対照的な面が多い。日本の植民地支配をはじめ、いつも外勢へ抵抗してきた韓国人は『服従』に慣れていない。それでみんな個性が強く、権威を認めない。他人への配慮より自分の利益を大事にし、時には無礼にも見える。あまりにも本能に忠実な『人間の国』なのである。

だが、最近の日本は『神の国』から『人間の国』に変わっているのではないか。人びとが目前の利益のために走り始め、心性が荒くなり、あり得ない事件が起きている。狂牛病に関連した国産牛肉偽装事件、東京電力の原発欠陥隠蔽事件など相つぐ企業不祥事もそうだ。みんな、以前は神の教理のように尊重していた国家、社会のルールより、自分の利益を大事にしているのだ。

それでは『人間の国』は救済不能な国なのか。決してそうではないと思う。人間の国、韓国は、九八年のアジア通貨危機を乗り越え、堅調な成長を記録している。一部の海外メディアは韓日間の経済逆転を予告する報道もしている。私は韓国経済の成長は個人の利益に忠実な国民性のお陰であると思う。構成員一人ひとりが欲望に従って激しく働く、それが発展のエネルギーになった。

いま、多くの日本人は、日本が『人間の国』に転落するのを怖がっているようだ。しかし私は今こそ日本の活力を取り戻せる機会だといいたい。神の決めた幸せに自分を合わせて満足するよりは、何が本当に幸せなのか自ら探して苦勞をする変化が日本に必要ではないか。その意味から見ると、この頃起きている変化は、まだ望ましい姿ではないが、個人個人が本能に目覚め始めた証かもしれない。

基地はいらない 命のひびき

興石 正

昨年の十月二十六日に完成したドキュメンタリー映画

『基地はいらない・命の響き』は、副題が「名護・辺野地の記録と記憶」という。若い人に向けた映画なのだが、タイトルといい、副題といい、若者をひきつけるかどうか心もとない。しかし、一般的な「若者」なんていうものはいないわけで、心配はない。シナリオ書きとディレクターとして私はこの映画にかかわった。

予備校教師としてほぼ毎日若者と接している。彼らに映画の進行具合をよく話した。意外にキラキラした眼に出会って、その度に私は、シナリオの細部を書きなおした。その意味でこの映画は、沖縄の若者との合作であると言ってもよい。その姿勢を第一部、第二部ともに貫いた。これは貴い経験だった。

手帳を見ると、この映画の企画がもちあがったのは、二〇〇〇年の二月頃からであった。

普天間米軍ヘリ基地の名護への移設に抗して盛り上

がった名護市民運動。その運動の熱狂の渦のあと、運動の停滞もまた厚く深いものとなった。その頃から映画の構想は少しずつ形づくられていった。私自身もその市民運動にかかわった。いろんな意味で辛い運動であった。国家の専権事項である「国防問題」にかかわる選択を五万人の名護市に問いかけてきた。

市長提出のこの市民投票の結果、五八・八三％の名護市民は、「移設ノー」を自らの意思として示した。三日後、市長は東京の地で「基地移設受け入れ」を突然発表し辞任した。

その後、国は、「基地受け入れ」という路線が名護市の最終決定とばかりに物事をすすめてきている。今もその過程にある。

今年の七月十四日、第九回代替地協議会という内閣府の協議機関で、政府として基地移設を最終決定した。サンゴ礁の海を埋め立てて、海上に米軍新基地建設をするという最終決定である。この文を読んでくれている若者のなかで、この最終決定を知っている人は、おそらくごくわずかだろうと思う。沖縄に生きる人間にとって、辛く淋しい事実である。しかし、ここで落胆などしてはいられない。その気持ちがこの映画づくりの

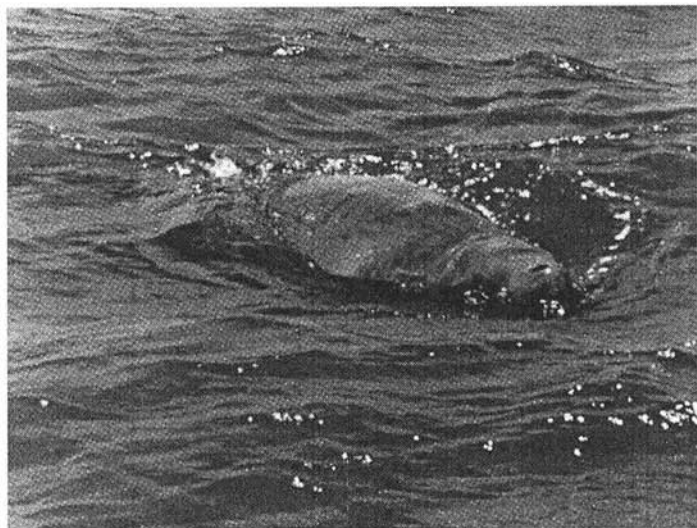
沖縄から

最大のバネであった。悔しさと、伝えねばという熱情の炎の渦でつくった。

年間四〇〇万人の観光客が訪れている島・沖縄。しかし、「沖縄」の情報はほとんど伝わっていない。だったら自分たちで伝える努力をすればいい。内側にこもっていないでなんとか伝える努力をする。そこから何が拓けてくる。悔しさに慣れることなどできない。できないならば、伝える行動をおこしてみる。それが大切だ。

映画という手法を用いたのは、そこに〈ことば〉と〈画面〉と〈歌〉の共演があるからだ。その共演のなかで、ほんの一片でもいいから伝わるものがあればいい。ゼロよりいい。その願いはとにかく込めてみた。そして努力してみた。シロウトだけの制作。困難はともこの文には記せない。しかし、苦しさだけではなかった。喜びと命のふるえがあった。作っている若者自身がこの映画づくりで成長したことは確かである。どうぞこの映画の魂と命の響きあいをしてみてほしい。落胆は絶対させません。

上映活動をしてくれる人を沖縄から募集しています！



●連絡先 TEL 0980-53-6012 (山城)
上映マニュアルもできています。助けてください。
こしいし・まさし(名護高等学校予備校 校長)

語りかけたいあなたへ 50

大里知子

将棋とオセロ

将棋の第十五期竜王戦が昨年末から始まって、この一月八日に羽生善治竜王が、挑戦者の阿部隆七段に四勝三敗で防衛した。

資める立場よりタイトルを守る側のほうが大変だと思うから、羽生さんにもどんなに、ほつとしていることだろうか。

テレビのBSをかけていると、対局模様が見られることがある。

将棋や囲碁の見方はぜんぜんわからない私も、対戦している両者の身体全体の様子や、顔の表情を見ているだけで、勝負の厳しさが伝わってきて、なんとなく緊張してテレビの画面に引きよせられてしまったのだ。

将棋や囲碁は、先の先の先のほうまで考えて見すえて、駒をおいていくのだから、どんなに頭がいいのだろうか。それだけでも、私は尊敬してしまう。

もう二十年以上も前のことになるけれど、中学生や高校生の甥たちが新潟から遊びに來ると、よくオセロゲームの相手をしてもらっていた。

オセロゲームも、ただ目先のことを考えて駒を置いていっても、すぐ相手の駒にひっくり返されてしまう。私などはよく先のことを考えてやったと思っても、結局相手の思うツボにはまって惨敗ばかりしていた。

たまにまぐれで私が勝ったりすると、鬼の首をとったかのように嬉しかったものだ。

私がオセロゲームをやるといっても、自分で自分の駒を置きたいところにひとつおくだけがやつとで、相手の駒をひっくりかえすには、手がブレてあらぬ方向に動いて、きれいに並んでいる駒をメチャクチャにしてしまうから、対戦者にやつてもらわなければいけない。今さらながら、よく一緒につきあってくれたと、甥たちに感謝したいと思っている。

手と言えば、羽生さんの将棋盤に駒を置く手の、しなやかで美しいこと。

もしかして羽生さんは、手の動きにも気配りをしているなら、すごいと思ってしまうた。

(Eメールアドレス fuusen@abeam.ocn.ne.jp)

〈おわび〉二八〇号「語りかけたあなたへ」49『ため息』の、最後から三行目に大きな誤植がありました。申しわけありませんでした。どんな原稿でも、誤植は一字も許されないことですが、大里知子さんは重い障害で、学校に通ったことのない方です。今はパソコンで原稿を打っておられますが、一字打つのに、普通の何十倍ものエネルギーと時間が必要です。そして、言葉の一つ一つを、とても大切にしておられます。そのような原稿に誤植があったことは、格別申しわけなく、筆者と読者の双方に心からお詫びを申し上げます。

訂正紙を挟み込みましたので、お手数ですが前号をご訂正くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

生き方としての百姓仕事

加藤 丈夫

朝露を含んだ茄子の葉の茂みをかきわけると形のいい黒光りした実がぶらさがっている。手にして缺で木を痛めないようにていねいに切り取って手籠に投げ入れる。朝食に使う野菜の収穫である。すでに切り取ったきゅうり、ピーマンなども入っていて今朝使うには十分である。

私はこうして勤務に出かける前の三十分ばかりを畑仕事に費やしている。

もともとはサラリーマンであるが先祖伝来の畑が残っているので、勤めの合間に自家で使う食卓の野菜くらいは自分で賄う百姓でもある。

そんな生き方をしながら最近気づいたことがある。

家の周りは専業農家でハウス栽培が盛んである。私の片手間でやる野菜作りと違ってさすがにプロだけあって品質の揃った野菜を一年じゅう大量生産している。

ところが意外なことにそれらの農家はハウスにきゅうりだとかトマトだとかの一種類だけを作っているのだ。

中をのぞくときゅうりやトマトが季節を問わず見事に成長している。

しかし自分の食卓に使う食材のほとんどはスーパーで購入してくるのだという。それどころか、おかずなどは総菜屋で買ったもので間に合わせるという。

わが家の畑はというと、季節はすれの珍しいものはないけれど、春夏秋冬それぞれの季節の旬の野菜がさがせば何か見つかる。それを自分の手で取って自分で調理する。このきわめてあたりまえのことがあたりまえでなくなっている。専業農家でさえ、ということに気づいたのだった。そのことから農業と百姓という言葉は同じ意味に使われているが、どこかすれた部分があるのではないかと疑ってみた。

前に述べたように、わが家は父の代までは先祖代々この地に土着の水呑み百姓だった。黒い大黒柱を持った母屋や荒れた田畑が残っていて、そのことを物語っている。かくいう私も、こども時代は百姓を継ぐつもりで育って知らず知らずのうちに百姓の魂を叩き込まれていたらしい。

百姓の、それは自然の中で自然に逆らわずに自給自足で生活していく態度というように要約できる。

とすれば、これは農業という職業だけに通用する知恵というより、人間があるいは人類が生きていくうえでの永遠の法則のようなものではないだろうか。

農業に携わるものにかぎらず商業でも工業でも、いや職業に関係なく政治家でも庶民でも守っていかなければならない鉄則なのだ。

話はここから飛躍する。世界を震撼させた米国の同時多発テロのこと。

世界の盟主をもって任ずる米国は同盟国を誘ってテロリストに報復攻撃を開始した。

その報復攻撃をめくって賛否両論をにぎわした。米国の軍事力をもってすればテロの犯人を

搜し出し処罰することは可能だろう。

しかし私が問題にしたいのはそのことではない。さきに触れた自然を少しも畏れず、人間の力で自然界を意のままにできると自惚れ、自分たちの文明を絶対正しいとして他民族にまで押しつけている米国を中心とする西洋近代文明である。

この傲慢さに気づかないかぎり、近代文明国家においては事件はまた繰り返されるだろう。人類史的な規模で振り返ってみれば、農耕文化の数千年の間でも、いくつもの文明が興っては滅びていった。

それに比べれば西洋中心の近代文明は、たかだか数百年。9・11の事件は、その西洋近代文明が疲弊してきた現象と見られなくもない。

しかし考えなくてはならないのは、自分たちの文明だけが唯一絶対であって、絶えず直線的に上昇し続けるという考えは果たして正しいだろうか。

先にも触れたように農耕文化の時代にも幾つもの文明が興って滅びていった。

現代においても地球上にはさまざまな地域にさまざまな文明を築いて生活している人びとがいる。イスラムにはイスラム文明が、アジアにはアジア固有の文明が、というように。

そう考えたときに抛り所となるのは、人類が数千年かかって築いてきた生き方、百姓の魂にかえていくことではないだろうか。

生き代わり死に代わりして打つ田かな

村上鬼城

かとう たけお（埼玉県寄居町在住）

ら室 ご書 あ読

『イラクとアメリカ』

酒井啓子
岩波書店

「世界貿易センタービル（WTC）の爆破事件は、かつてなく野心的なテロリストの攻撃であった」。アメリカで出版されたある本は、こういう文章で始まる。二〇〇一年九月の事件のことではない。一

九九三年に起こった同ビル地下駐車場での爆破事件のことである。その後この書の著者は、以下のように続ける。

「もしこの試みが計画どおり成功していたら未曾有の死者と破壊をもたらしていただろう……なぜならノースタワーがサウスタワーに倒れ掛かるように計画され、しかもノースタワーには青酸ガスが仕掛けられていたからである……さらにはその実行犯の一人はその後、十二機のアメリカ民間航空機の爆破を計画していた」。

あたかも九月十一日の同時多発テロ事件を予告したかのようなこの本、『報復の研究』は、アメリカのイラク研究者であるローリー・ミルロイ女史が、二〇〇〇年に発表したものである。彼女は一九九三年のWTCビル爆破事件の実行犯の行動を緻密に追いながら、ひとつの結論に読者を導こうとする。「事件の背後に、イラクがいる」。

推理小説のようなスリリングな書き出しで始まるこの『イラクとアメリカ』は、「岩波新書」には不慣れなヤワラカ頭の人びとでも、思わずひと息に読んでしまおうだろう。

アメリカは、湾岸戦争で徹底的な攻撃を行ない、イラクの軍の力を破壊しつくしたにもかかわらず、なぜイラクを襲おうとするのか。

——アメリカが常に「イラク脅威論」を持ち出すのは、湾岸戦争の際にイラクのフセイン政権をつぶし損ねた、という意識、そしてつぶし損ねたそのフセインが報復しにやってくるのでは、という意識をアメリカの政治家たちが強く抱いているからに他ならない。彼らにとつては、サダム・フセインが生き延びているかぎり、湾岸戦争は終わってはいない——

筆者のこのコメントを読んでも、大方の日本人は、すぐには納得できないだろう。そこで筆者は、第二次大戦以来、ア

メリカは中東をアメリカ外交の最重要地域のひとつとしながら、自らはその地に赴かなかつたのは、「アメリカは、中東地域のみならず途上国全般を親米・親ソの二つに分類し、そこで発生する紛争を、その二極対立のなかで解決し処理しようとしてきたのである」と理解して、「イラン革命によって成立したイランのイスラーム政權の『反米』性に激しく反応して、

その封じ込めのために「親ソ」として敵視していたイラクを「親米」の枠組に取り込もうとしたが、結局その枠にイラクを収めることができなかったゆえに、湾岸戦争が発生したのだと言える」と論破する。イラクが、アメリカがイラクに対して適用してきた「親米・反ソ」の二項対立のルールを逆手にとつて利用したことに、問題の本質がある、と。

そして、「アフガニスタンのソ連軍に対する対抗勢力として利用したビン・ラーディンは、イラクとの対抗勢力としてア

メリカが利用したフセイン政權と相似する。「起用」された彼らは、単なる「抵抗勢力以上の存在となり、国際紛争における偉大な主体として浮き上がってきたのである。彼等は、超大国アメリカに、ただ一人、ひるみもせず立ち向かうボジティブな存在としても同じ志向を持つ」と、明快に解説する。

この切れ味の良い推論を、筆者は、さらに大きなスケールで展開する。中東の「革命政權」から始まったひとりの政治家、サダム・フセインが、どのようにしてアメリカを発見し、アメリカによって発見され、そしてアメリカと向き合うことで世界を統べようとしたのか……。筆者の筆は一九二一年、イラクの建国にさかのぼる。

サダム・フセインの登場・出会い・統治術・湾岸戦争・経済制裁の下で生きる・反体制派とアメリカ・武器査察をめぐる攻防——七章にわたる展開は「アメリ

カにつくか、フセインにつくか」で締めくくられる。

どのページをめくっても、ほとんどの読者は、自身が、日米の、そして世界のマスメディアによつて、どんなに多くの偏見を抱いていたかに気がつくだろう。英訳・仏訳すれば、恐らく世界のベストセラーになるに違いない。

(千)

(二〇〇二年八月二〇日刊、二二六ページ、定価七〇〇円)

どうして戦争をはじめたの？
「ノー」と言えなかった狂乱の時代

青木みか編

風媒社

定価一九〇〇円

二〇〇一年九月四日、名古屋女子大名誉教授、七七歳の編者は朝日新聞声欄に

投稿し、若い世代の人たちに「戦争への過程を語り継がねば」と訴えた。軍国主義一辺倒の抑圧と暗黒の時代の体験を編者の知人ら一〇人と共著として伝えたのが本書である。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と、朝夕じゅもんのように唱えていた編者の夫は、船舶兵として出征、二十七歳で戦死する。妻はその時二〇歳。

「人を殺しに行くのではなく、食糧を取りに行くのだ」と言っていた夫の真意がわかったのは、大学を定年退職してからだったという。

侵略戦争と知つていても、無力な個人は逃避もできなかった。「戦争はノー」と言うだけで非国民として特高警察に連行され、言い続けられ厳しい残酷な制裁によつて死を強いられた。まさに狂乱の時代であった。

ファシズム思想の中で天皇は全知全能の現人神として、国民はマインドコント

ロールされて戦争への罪悪感麻痺していった。

自分の意思ではどうにもならない上官の命令に、目をつぶつて敵を殺した部下は東京裁判でC級戦犯として死刑となった。若い特攻隊員の命をかけての突撃は結果として降伏の時期を遅らせ、広島・長崎の原爆投下やソ連参戦に大きく影響した。

哀しい、虚しい。悔やまれてならない。

敗戦に至るまで、戦争に「ノー」と言えなかった恐ろしい時代には二度としたくない、と、十人がそれぞれに思いのたけを綴ったこの本は、ずつしりと重い。

戦争の記憶を強く持つ者は現在七〇歳以上。日本の人口の一二％である。圧倒的に多い「戦争を知らない世代」に、有事法制（二〇〇二年の臨時国会では継続審議となり、二〇〇三年の通常国会に持ち越された）が顕在化する今、「この道は

前に来た道」であつてはならないと願つて編まれたのがこの本だ。

二〇〇一年の夏、小泉首相は靖国神社参拝で「英霊に対して敬意と感謝の誠をささげたい」と言つた。編者は小泉首相に怒る。「誤つた国策で犠牲を強いられた人たちに陳謝し、それに応えるためにも永遠の平和を誓つてほしい」と。

日本国憲法は第九条「戦争放棄」を明記した世界に類のない平和憲法である。一九四五年敗戦以来、日本は一度も戦争を起こしていない（人を殺していない）世界唯一の国なのである。イラクをめぐる今の危機に、日本の首相はなぜ、「世界のすべての国よ、武器を捨てよ」と言わないのだろうか。かつて日本国民は心の中でどんな思いがあつても口を封じられたが、多くの人びと死によつて得た今の憲法は言論の自由を保障している。

（あこらウイン 柳澤つや子）

なつたということになり、三月議会での県知事のゴースインが危ぶまれてあります。なにしろ、昨年八月に交付金の切り離しを国が認めて、要綱改正をして大きな留保の理由がなくなつたということになっていて、もし

言葉」に、「地方選」があります。地方は、中央に対する言葉であり、「自治体選」が適当ではないでしょうか。あえて、中央集権への警鐘として、地方を強調しておられますか？ 本来の自治をめざすためにも、「自治体選」を望みます。

かしたら、九月県議会でゴースイン

（鹿児島市 小川美沙子）

がでるのではないかと覚悟して

（宮城県 吉田貞子）

たところに、東電のトラブル隠しが発覚しました。

「編集部から」これからは「地方の時代」。胸張って「地方選」と言つて

皮肉なことに、東電トラブルに助けられた形になり、現在はまだなんとか、留保状態ですが、四月の統一選挙で原発関係の陳情は改選の各自治体では結論のでないままに廃案になるという事態も出て来ます。

（おわび）この号の発行が遅れているうちに、選挙となり、富永茂穂氏は自民党の田端氏に大差で破れました。市民は、小川さんが心配していたように「名にも知らず」「市民派」と誤認したようです。統一地方選で挽回しなくては！（編集部）

〈平和のパズル〉をつなげましょう

「地方選」ではなく

「自治体選」と言おう

サンフランシスコ講和会議で平和

じめな選挙をしている富永茂穂選挙事務所ではナンバーディスプレイでよその町からの電話はわかると思われて

『あこら』282号は「地方選に女性を」だとか案内を頂きましたが、私も、「使用しては、しまったと思う

条約が調印された一九五一年の秋、小学生の私は運動会で初めて日の丸の旗を持つて踊り、お正月には「独立日本の春」と書き初めをしました

が、日米安保条約調印のことは知りませんでした。六〇年の新安保条約調印も深く考えようとはせず、流されて過ごしてしまいました。

二〇〇一年の春、江ノ島のかながわ女性センターで斎藤千代さんが「私はふつうの女です」と語って下さったメッセージは（一人からの平和運動）。日常的な運動の大切さという言葉は草の根の平和運動が息づいていると体で感じていた子どもの頃の神戸のなつかしさと響きあい、一步を踏み出す勇気を与えられました。

知るほどに考えるほどに怖くなる現実、そして9・11の衝撃。

私が手にしていた小さな平和のジグソーパズルの一片が（平和のリボン行動藤沢）の皆様と共にパズルをつなげていくことになるとは夢にも思いませんでした、本気に私の一

片と合う友との出会いを求めて行動するなかで力を合わせるときに平和の地図が拡がっていく喜びを感じています。

実践の中でこそ新しい希望が生まれることを信じて一緒に歩みませんか。（藤沢市 大浅田敦子）

「インターネットに日本語による
チェチェン武力勢力サイト登場」

一月十七日に、ロシアのインターファックス通信が、意外な情報を配信した。日本に、チェチェン武装勢力と国際テロリスト組織がWebサイトを開設したというものだ。その情報源はロシア軍の北コーカサス対テロ作戦本部である。

このテロ組織のサイトは、チェチェンのゲリラ本部からの情報をもとに彼らの活動を伝えているだけであ

く、「日本人テロリスト」数人をリクルートし、チェチェンの戦線に送り込んだという。サイトの名前はChechenwatch。

本来なら取るに足らないレベルの内容だが、国内では共同通信がこの記事を配信した。

ロシア語：

http://www.interfax.ru/show_one_news.html?lang=RU&tz=0&tz_format=MSK&id_news=5615564

英語：

http://www.interfax.ru/one_news_en.html?lang=EN&tz=0&tz_format=MSK&id_news=5615587

Chechenwatch をいらんになった方にはわかると思うが、このサイトは平凡なMSNのサーバーに、個人が地道にチェチェン関係情報を集積し、公開している場であり、テロとはかけ離れた一般的な言論活動であ

る。インターファックスの英文記事では、その結びに「日本政府は以前から存在する国際テロ組織のサイトを放置している」と、わが国政府への非難も加えている。

今に始まったことではないが、チエチエンに関しては、あまりの見識のなさにあきれるような報道が、ロシア側だけでなく、日本でも大手新聞・通信社を経由して流されている。

たとえば一月十四日、毎日新聞と読売新聞は、「チエチエン兵士の遺体の所持品から、猛毒リシンの製造マニュアルが発見された」と報道した。この兵士は独立派のマスハドフ大統領の配下にいたという。

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20030114-00001009-mai-int>

この記事の根拠は、ロシアのヤストルジエムスキー大統領報道官の発表のみ。

さらに十九日、今度は共同通信と毎日新聞が、「英首相暗殺〱チエチエン独立派が画策? 英紙報道」との記事を配信した。

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20030119-00003014-mai-int>

四月一日にはまだ早い。これによると最近も「チエチエン共和国の独立派勢力がブレア首相の命を狙おうとしたが、ロシアの情報機関が察知して未然に防いだ」らしく、本当であると、このところはFSB（ロシア連邦保安局）も、ボンド顔負けの活躍を果たしていることになる。

以上、「報道されていること」の中でも、ひどいものを列挙した。それでは「報道されていないこと」は何だろうか。

たとえば以下の三項のような重要な事実がある。

◆二〇〇一年の一月十八日、日本に

も訪れ「チエチエンを考える集会」で、ロシア人として「チエチエン攻撃は人権問題」と鋭く追求、多くの日本人の心を動かししたロシア人の人権活動家ヒクトル・ポプコフ氏の死。

氏は、チエチエンの村落に救援物資の薬品を届ける途中、ロシア軍に銃撃され、重態になった。半年以上治療を受けた後に、八月にモスクワで死亡した。五十歳だった。ポプコフ氏は、ロシア人ながら、チエチエンの攻撃はあまりにも非人道的であり、理不尽だと、世界各地に訴えて回り、大きな感銘を与えていただけに、残念・無念というほかない。これは、ロシアのNGOであるロシア・チエチエン友好協会が伝えた。

◆昨年七月八日、チエチエンのアルハン・ユルト村でロシア連邦軍のヘリコプターが粉状の物質を散布した後、放牧していた数十頭の牛が異常

を来たして死んだほか、これまで健康だった住民が数日の内に四名が急死したと、カフカスセンターが報道した。

◆同じ月の十五日、モスクワで国際ラジカル党(RED)の活動家たちが、クレムリンの城壁わきを流れるモスクワ河の水上バスの甲板からクレムリンに向かって、「プーチン大統領は戦争終結に向けての交渉を直ちに始めよ！」というスローガンを大書して水上デモをした。これはTRP自体が報道した。

世界で報じられたことすべてを検証する手立てはない。だが、筆者の理解では、FSBの007まがいの活躍譚よりも重要なのは、こういった情報である。NGOや政党が発表した情報ゆえに掲載しないという論理は、ありえない。また、カフカスセンターがチエチエン軍寄りならば、

ヤストルゼムスキー氏はロシア側を代表しているはずだ。

こういうことになる原因はいくつか考えられる。

外信の見出しだけを読み、読者が「関心を持ちそうなこと」という基準で選択をしている可能性。そして、ロシア側発表ならば掲載し、チエチエン側発表では掲載しない、権威主義の存在。報道機関内部に、ロシア側の意向に意識的に同調するライターがいるという可能性については、さしあたって考えないことにしよう。いずれにしても、新聞の購読者数が減っていくのも無理のないことのような気がする。

私は「チエチエンニュース」を発行することによって、大手、地方紙を問わず報道機関に多数の知人ができた。その多くは、チエチエン紛争についてかなり近い問題意識を共有

できる人びとであり、私のようなアマチュアをはるかにしのぐ知識と経験を持っている。そして知見を記事にすることに努力をしている。その人びとが、こうした無責任な報道に関わっているとは思いたくない。

「日本語によるチエチエン武装勢力サイト登場」という記事のロシア語版の結びは、英語版のそれと異なっている。それは、ChechenWatchと実際に交流を持っているチエチエン人ジャーナリストのサイト、「カフカススキー・ベストニク」の編集者として、M・ツツァーエフという人物の名がさりげなく挙げられていることである。これは、当のサイト管理者、マイルベク・タラモフの本名である。タラモフは、バクーに避難しながらも言論活動を続け、ロシアのチエチエン侵攻に抗議を続けている人物である。最近筆者がアゼルバイジャ

ンのバクーを訪問した際にも、三泊ほど泊めてもらった。彼は一匹狼として、政府や野戦司令官などの後ろ盾もなく、公然と執筆活動が続けている。また、彼の友人は全カフカスにいる。だが、今回、インタヴァックスの記事が流されたことで、チエチエン・ロシアに残る彼の親族は、新しい危険を負ったことになる。すでにモスクワでは彼の縁者が、警察の妨害で事業を中断せざるを得なくなっている。

こうして三つのことが明らかになった。ロシア側は恒常的にチエチエンについてのディスインフォメーションを流していること。その中には、見かけ以上に陰險な意図が隠されている場合があること。そして、日本にも、問題のある姿勢で報道に取り組んでいる人びとがいるということだ。私は、これらの前提を理解した

（大富 亮『チエチエンニュース』
編集兼発行人）

「凜」として県政に取り組んでいます」

二月十二日から定例県議会が始まります。平成十五年度の予算案を提案するのですが、かつての急激な経済成長のつけともいえるさまざまな負の問題が次々と表面化し、県財政は危機的な状況にあります。こうした時には毅然とした態度で、勇気をもって難局に向かう以外にありません。「凜」として、千葉県づくりに取り組みます。

財政はきびしいのですが、うれしいこともあります。「里山の保全等に

関する条例」を二月定例会に提案することにしました。

千葉県には、高い山や原生林はありませんが、房総丘陵には毛細血管のように谷津がひろがり、古くから人が自然と共生し、里山をつくり、維持してきました。言ってみれば千葉県はオール里山です。その里山が生活様式の変化や産業廃棄物の不法投棄で荒れています。今回の「里山条例」は、もう一度豊かな里山を取り戻すことが目的です。

（千葉県知事 堂本曉子）

「退職しました」

大変おくれればせながら新年あけましておめでとうございます。良きお正月を迎えられたことと思います。

私たちも元旦には一応お雑煮をいただきました。（お雑煮のお汁の出来が

良いと家族に好評でした。」

私は、昨年、長期に寝込むようなことはなかったのですが頭痛が漠然と続くといったような、体調の悪いことが重なり、また他の外的要因もあったりで、思い切りここあたりで人生を変えようと、早期定年退職を決め、一月八日をもってシティ・バンクを離れました。

企業生活で萎縮しつつあった精神に新しい風を入れ、私はどんな人間だったのかと自分を見直したいと思います。そのために、優雅な引退生活が保障されているわけではありませんが、半々くらいは特に予定を入れずに過ごそうと思っています。怠惰の奈落に陥るか、結構生産的な毎日になるか様子をみてみるつもりです。

皆様ともお目にかかってお話できる時を楽しみにしています。皆様の

健康とお幸せ、そして世界の平和を願います。

(ニューヨーク・大石まゆみ)

世界のフェミニストへ

《あくら》がホームページで呼びかけ

日本語の原文は、下記のような文章です。

全世界、とくにアメリカとイギリスのフェミニストへ

日本のフェミニストグループ

《あくら》から

ミニスト、とくに米英のフェミニストに訴えます。どうか最後まで読んでください。

*

私たちは、生きている人間が、どのようにして焼き殺されるかを、この目で見ました。その悲しみの中で、私たちの父や兄がアジアの各地でどんなふうにも罪もない人びとを殺したかを、胸深く受けとめました。

日本人が痛切に感じているのは、「殺すよりも、殺されるほうがまだマシだ」ということです。原爆では、五八年たった今でも、その後遺症で毎年たくさんの方が死んでいきます。私たちの唯一の救いは、日本は、原爆を受けたけれども、原爆は使わなかった、そして今後とも、絶対に使わない、ということなのです。

日本の憲法は、核はもちろん、あ

らゆる破壊的な兵器や戦力を持つことを禁じています。だから、この前の湾岸戦争でも、日本の民衆は、戦争に大反対でした。私たちは、日本の首相が、「武力によらない解決を」と、真つ先に言うてくれることを期待しましたが、首相と国会は、「戦力は出さないけれどもお金を…」と、なんと一四五億ドルものお金を米国に供給したのです。これは日本じゅうの赤ん坊や病人までが全部、一人一四五ドルもお金を出した、ということです。

れました。今度もさつそく、イージス艦を派遣しています。私たちは、胸が張りさけそうです。

首相と外相は、また、「戦後の復興には力をつくす」と言明しました。これは一見、人道的に聞こえますが、

「どうぞ ボコボコにやつつけて下さい。傷の手当てはしますよ。こわれた橋は架けますよ」と言うのと同じことです。またもギャングを支援するとは！

残念なことですが、いま日本人の人間らしさは、地に落ちています。犯罪や不道徳は多発し、何とも情けない国になっています。

多くの日本人は、その理由の一つは、「今も日本は米国の占領下にあるためだ」と感じています。

「金を出して汗を出さない」と言われました。このため、その後、日本の政治家には、「後方支援なら、しなければならぬ」という考えが生ま

せんが、日本は首都の東京にさえも、

戦後五八年、日本は繁栄している。マサカ！とお思になるかもしれませんが、日本は首都の東京にさえも、

今度の、イラクへの攻撃準備に、

世界の中でも最も心を痛めている国民の一つは、日本人ではないかと思

います。十二年前、イラクは徹底的に破壊されました。そして厳しい経済制裁が十二年も続いています。湾

岸戦争前のイラクには、それなりの信義も規律もあったのですが、この

展開され、住民の半分が死亡した日本の最南端、沖縄は、そのテリトリのほとんどが米軍基地です。そして日本と米国は軍事同盟を結んでいます。これは、かつてのフィリピンと、ほとんど変わらない状況です。

選挙をする度に、日本の良心的な議員は落選し、米国を支持する金権候補が勝利します。今は、彼らが過半数を占めていますから、政治は、悪くなる一方です。

広大な米軍基地があります。

一九四五年、最も激しい地上戦が展開され、住民の半分が死亡した日本の最南端、沖縄は、そのテリトリのほとんどが米軍基地です。そして日本と米国は軍事同盟を結んでいます。これは、かつてのフィリピンと、ほとんど変わらない状況です。

選挙をする度に、日本の良心的な議員は落選し、米国を支持する金権候補が勝利します。今は、彼らが過半数を占めていますから、政治は、悪くなる一方です。

結果、フセインの独裁体制は逆に強化されました。

湾岸戦争当時、イラクは（イラク型社会主義）を誇りとしていました。

女性も完全な平等が保障され、老人

以外は、ベールもつけていなかった

のですが、今はアフガンのように、

女性の進学は難しくなり、多くの女

性がベールをつけるようになってい

ます。

私たちは、そういうイラクに、救

援物資を持って何度も訪れ、非常に

残念に思っています。

ブッシュ氏は「侵攻すればイラク

は民主的になる」とお考えのようで

すが、それは全く逆です。

まず経済制裁をやめ、イラクの人

が自由に国外に出、国外に去った人

も、自由に帰れるようにすることで

す。

武力で制圧しても、フセインは恐

らく生き残るだろう、あるいは、オ
サマ・ビン・ラーディンのように地
下にもぐって、地下から支配するだ
ろう、と、イラクをよく知る人びと
は考えています。

六〇〇〇年の歴史を持つイラクの

人びとは、本来、非常に誇り高い人

びとです。湾岸戦争になるまでは、

教育も、日本と変わらないくらい普

及していました。その人びとが今、

誇りを失いかけています。敗れ

れば、更に誇りを失うでしょう。大

きな社会的混乱が心配されます。

そして、世界じゅうのモスリムは、

アメリカとイギリスを憎むでしょう。

アメリカやイギリスの本土でテロが

起きるだけでなく、世界各地を旅す

るアメリカ人やイギリス人がねらわ

れる例も急増するでしょう。

二〇世紀は、戦争と破壊の世紀で

した。その反省に立つて、二一世紀

こそ、人間らしい、やすらかな世界
にしたい。だから、私たちは、どん
なことをしても、ブッシュさんに考
えを変えてもらいたいです。

ブッシュさんのおひざもとのアメ

リカのフェミニスト、そしてブッシ

ユさんと手を組んでいるイギリスの

フェミニストの皆さんに、心からお

願います。

戦争からは、悲しみと憎しみしか

生まれません。いま日本は、アメリ

カ風の繁栄の中にありますが、多く

の日本人は、自分の国に誇りを持て

ません。昔のように、二〇〇〇年の

歴史を誇ってきた穏やかで信義に厚

い日本にしたいのです。

アメリカはベトナムで敗れました

が、アメリカの方々は、ご自分の家

族が目の前で殺されるような戦闘を

目撃していない。だから、人が殺さ

れることの意味が、わからないのだ

と思います。

私たちは、もちろんテロには反対です。しかし、9・11の時、多くの日本人は、「これで、アメリカ人も、『人間の悲しみ』に気がついてくれるかもしれない」と、正直なところ、思ったのです。

9・11のビルの中で死んだ日本人の家族たちはみんな言っています。

「どうかこれ以上、一人も人が死なない社会にしたい」と。

私たちの声は届くでしょうか？

届いたら、ご自分の国の大統領や首相に働きかけてください。私たちも、日本の首相にどこまでも迫ります。直接的であれ、間接的であれ、戦争は人間を不幸にするだけです。しかも、侵された人以上に、侵した側は不幸になります。

どうか考え、行動して下さい。心からお願います。

編集後記

◆校正に秒読みしながら、イラク情報が気になります。酒井さんのインタビューに納得しながら、「とすると絶望的か……」とクラークなったり。

(N)

◆デモの数が、各地でどんどんふえています。「憲法九条を持つ日本だから、同盟国がどうであれ、日本は戦争には絶対に反対！」と、なぜ言わないのですか、小泉サン、川口さん！

(Y)

◆一分でも早くお伝えしたい情報が、またも予定より遅れました。経費削減が響いているだけに、クヤシイが、ホンネ。でも、休刊も廃刊もせず、続けていけるのは、全く

皆様のおかげです。めげずに続けます。

(千)

◆「ノー」の声を大きくあげて、「第二湾岸戦争」を阻止するために、この号を、できるだけご利用ください。三冊以上ご注文の方には、半額でお頒ちします。ご連絡をお待ちしています。

(K)

◆いま、午前六時です。眠い。ねむい。ねーむい……。

でも、一日でも早くお届けしたい。不出来ですが、真心こめてつくっている。『あごろ』です。たくさんのご投稿をお待ちしています。

(P)



目次で振り返る『あゝら』三〇年

(一九八八年一月～一九九〇年一月)

二二六号 (一九八八年一月) ￥400

〈鳥取〉美鈴選挙を振り返る

〈巻頭〉ひょうたんからコマ

美鈴選挙を振り返る

美鈴選挙ドキュメント ほか

鳥取を訪ねて

女から女たちへ 女たちから女へ

女の講座・女のつどい

芦谷美鈴

前田亨子

みずす会通信より

斎藤千代

二二七号 (一九八八年二月) ￥400

〈埼玉〉「夫育て」をめぐる

「夫育て」をめぐる

「夫育て」に関する多くの見解

〈拠点だよりから〉

今年の活動計画〈あゝら札幌〉／ローザ・ルクセンブルグを見て 谷百合子 『あゝら札幌だよ

山口のり子

村瀬 春樹

り』から／家族の解体・再編は静かに、そして深く進行する

塚崎美和子 『あゝら京都通信』から

〈あゝらのあゝら〉年賀状から／『新聞切り抜きに見る女の十六年』を読んで

〈女の講座・女のつどい〉

二二八号 (一九八八年三月) ￥400

〈東京〉女性の地位

〈巻頭〉Nさんの勇気

〈資料〉婦人の地位 労働省婦人局発行資料より その1

フェミニストおよび未来のフェミニストおよび非フェミニストのためのたのしいマンガ・映画・小説リスト

後藤晶子

〈拠点だよりから〉 原発についてどれだけ知っていますか？

タカハシヨシエ 〈あゝら札幌〉

〈あゝらのあゝら〉

〈女の講座・女のつどい〉

二二九号 (一九八八年四月) ￥400

〈愛知〉真宗大谷派における「女性差別」

真宗大谷派と「おんなたちの会」

羽向貴久子

教団と「おんなたちの会」の政治性

藤谷不三枝

「遠い夜明け」からのメッセージ 自らの解放へ向けて

日野浩介

真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの集いの
呼びかけ

坊守差別発言について

婦人の地位 労働省婦人局発行資料より その2

〈あいらのあいら〉

〈女の講座・女のつどい〉

一三〇号 (一九八八年五月) ¥400

〈大阪〉真宗大谷派における「女性差別」(2)

宗教がもたらす性差別

藤谷不三枝

集いあい・話しあい 報告集『真宗大谷派における女性差別
を考えるおんなたちの集い』より

声 なぜ男性を〈女性会議〉の議長に? 神奈川県民の疑問

〈かながわ女性会議〉

渋谷路世

集会から 日産自動車の「家族手当裁判」勝利判決を!

片岡陽子

原発なくそう一万人行動はなんと二万人行動に!

〈あいらのあいら〉

山口のり子

一三二号 (特集三四号) (一九八八年六月)

¥1800

有縁の女・無縁の女・選択縁の女

十五周年記念講演とパネルディスカッション

有縁の女

辻 和子

無縁の女

網野善彦

選択縁の女

上野千鶴子

討論 (司会・しまようこ)

〈あいら〉の十五周年を祝う夕べから

大槻壽子 中西珠子 中村智子 円より子 木下ユキエ

丸山 尚ほか

これまでの〈あいら〉を振り返って

『女学雑誌』と『あいら』

福田光子

孤立からグループネットワークへ

高橋ますみ

日本型フェミニズムと〈あいら〉

斎藤千代

「第二世代」の〈あいら〉を考える

「第二世代」に求められる情報誌像

細谷洋子

これからの〈あこら〉と『あこら』

三好久美子

節目に思い切った脱皮を。『第二世代』を提唱する理由

斎藤千代

全国の〈あこら〉の拠点

おもしろいですよ〈あこら〉可能性教室

アグネス／真理子 花の応援団 「子連れ子育て論争」

林真理子 上野千鶴子 松崎陽子 道下匡子 若桑みどり

長崎暢子 多賀幹子 笹野美知子 辻中若子 佐藤洋子

「禁児車」発言をめくって

宮迫千鶴（東京新聞） ますのきよし（週刊文春）

婦人週間四十周年記念全国会議から

佐藤ギン子 中村道子 有馬真喜子 縫田嘩子 牛尾治朗

猪口邦子

フォーラム「仕事と育児を考える」 小宮山洋子・汐見稔幸・

前田薫・ヤンソン由実子

〈あこら読書室〉「夜明けの奇跡 かながわ近代の女たち」か

ながわ女性史編集委員会編著 ドメス出版／『続わが道 こ

ころの出会い』藤田たき著 ドメス出版／『信州・女の昭和

史（戦前編）』青木孝寿著 信濃毎日新聞社編・刊／『大正・

昭和を飾った女たち（上・下）』遠藤憲昭編 国書刊行会／

「自分だけの部屋」ヴァージニア・ウルフ著 川本静子訳

みずす書房／『本音で生きよう 主婦の新しい顔』灘神戸生

協生活文化センター編 灘神戸生活共同組合／『第二回女の

からだから合宿一九八七』八二年優生保護法改悪阻止連絡会

〈ネットワーキング〉家庭科の男女共修をすすめる会

〈随想〉女よたわむれに姓は変えじ

池田玲子

〈あこらのあこら〉

資料1・均等法で職場の女はどう変わったか

資料2・婦人週間四十年間のテーマとスローガン

資料3・雑誌『あこら』のバックナンバー一覧

一三三三号（一九八八年八月）¥400

〈札幌〉全国ミニコミ特集1

ミニコミにこみMinicomunication PART1

細谷洋子

みにこみすべす あっちこっち①

女の本のスペース 東海BOC（スペース・ウイン）

ミニコミ喫茶ひらひら 高橋ますみ

猫の事務所 〈あこら札幌〉今村雅子

ミニコミの女たち 〈あこら九州〉平岡・石本・高山

『無名通信』

河野信子

『らんぱーだ』今泉幸子さん

高橋ますみ

『おひさまや野菜通信』堀野公子さん

三船照子

座談会 読み手から見れば……

インタビュ― 白保が危ない！ 山田征さんに聞く

聞き手 ナフィサ・ミナイ

めじゃーなりすとのめ かすかな声 布施優子 (NTV)

海外から ストップさせよう！フィリピン女性の商品化

ひろば〈あごらのあごら〉

〈わたしの仕事〉10 ソロバンからコンピュータへ

私立高校時間講師 手塚治子

意見「かながわ女性会議」事務局長選任について

かながわ女性会議 深沢淑子

最先端国際フェミニスト用語① 生きているフェミニスト英語

〈あごらのあごら〉

〈女のつどい〉

一三三三号 (一九八八年九月) ¥400

〈九州〉なあとこれ 配偶者特別控除を考える

二人はふたり

配偶者控除の不思議なからくり

三好久美子

なぜ女はパートにしたいの

池田保子

教育控除をどうして一緒に出したの

平岡靖治

高齢化社会と家族の愛

石本宗子

なぜ税制に“内助の功”を

福田光子

〈わたしの仕事〉11

家庭と両立させるために選んだ仕事

宮澤 光

意見／小学生の“ゲルニカ”

藤本朋子

めじゃーなりすとのめ 女形の話

松本侑壬子

続・白保が危ない！ 山田征さんに聞く

聞き手・ナフィサ・ミナイ

最先端国際フェミニスト用語② SEXとGENDER

女の講座・女のつどい

〈あごらのあごら〉

一三四号 (一九八八年一〇月) ¥400

〈旭川〉女が働くこと、自立すること

不当解雇裁判が問いかけるもの

〇さんの不当解雇裁判に思う

京田初美

もう一人のひとのこと

那須友子

〈座談会〉解雇問題にかかわって見えてきたもの

北野えり子、木村悦子、田代佳子、京田初美、水島麻美

川口かおり、水田桐子、中野広、江口直、那須友子、

三丸美智、O、A、圭 俊子

「でも、やっぱり不倫はいけない」からの脱却を 深尾勝子

労働事件の問題性および今後の見通し 弁護士・八重樫和裕

女のグルーブ（原発のない世界をつくる女の会） 渡辺嘉津子

「わたしの仕事」12 土器・石器・記事・考古学 岡田佳子

試写室 ハーフライフ（1985年オーストラリア・デニス

・オロウク監督）

あこら読書室 『男が変わる 一スウェーデン男女平等の現

実』ヤンソン由美子著 有斐閣刊／『文学伝習所の人々』井

上光晴編、講談社

海外から Isis-Wicca 子どもと買春観光

最先端国際フェミニスト用語③ SEXUALITY

意見 映像の暴力『華の乱』

『花の乱だより』から

（あこらのあこら）

（女の講座・女のつどい）

一三五号 （一九八八年十一月） ¥400

〈札幌〉ミニコミ特集Ⅱ

ネエ どうしてそんなにミニコミが好きなの？

（あこら札幌）細谷洋子

みにこみすべーす あっちこっちPart2

りーぶる・ど・ふあむ 斎藤千代・寺沢恵美子

ウイメンズ・ブックストア 松香堂 松本八重子

ミニコミの買える本屋 金榮堂本店

ミニコミの女たち（2）

『ウイメンズまいん38』久保和子さん

大原 涼

『ウイメンズブックス』木下明美さん

松本八重子

『WIL, JAPAN』久田恵さん

斎藤千代

地域別 全国ミニコミ広場

「わたしの仕事」13 私は化粧品店「シャンティ」の

吉祥寺店長だった

日吉和子

CINEMA 『あかちゃん』はトップレディが大好き』

ダイアン・キートン主演 チャールズ・シャイアー監督

（あこら読書室）『ふたりは女 母と娘のたたかいとエロス』

門野晴子著 学陽書房／『華やかにシングルライフ 独身婦

人連盟創立二十周年記念誌』独身婦人連盟編

海外から 「女性とエイズ」 Isis-Wicca

最先端国際フェミニスト用語

久富木原睦美 訳

④ WIFE、HUSBAND、PARTNER

意見 くちびるに言葉を取り戻そう

結城有子

緊急アピール！ このままでいいの？ 天皇の問題

女のグループ（ウキウキワクワク女性講座）

甲木京子

（あこらのあこら）

（女の講座・女のつどい）

一三六号（特集三五号）（一九八八年十二月）¥1600

特集 新聞切り抜きにみる女の16年II

メキシコ会議前夜 1973～1974

AGORAZEIN

新聞記事のうしろ側 女性記者に聞くII

有馬真喜子 東浦めい 深尾凱子 松井やより 矢島 翠

斎藤千代（司会・あこら編集部）

一九七三年

風潮 物価高・モノ不足 抵抗する消費者たち 欠陥商品・

食品公害 合成洗剤

進出

集会・活動

労働

法・制度・裁判

調査・統計

保育・教育

からだ

意見・投書

相談

人

本

繁栄のかげに

海外

一九七四年

風潮 物価狂乱・不況 抵抗する消費者たち 欠陥商品 合

成洗剤

進出

集会・活動 集会・活動 怒れる主婦たち リブも怒る グ

グループ 国際婦人年

労働 看護婦 内職・パート

法・制度・裁判 裁判・優生保護法 刑法改正 その他

調査・統計

保育・教育 育児・保育 保育所 富士学園 教育

からだ 妊娠 中絶 出展

意見・投書

相談

人 ひと 賞 計報

本

繁栄のかげに 子殺し 母子心中 世相 福祉の貧困

海外 韓国 シンガポール 中国 アメリカ

〈あこら読書室〉『人生を二倍に楽しむ 女の日常生活学』深

尾凱子著 三笠書房／『女縁』が世の中を変える 脱専業主

婦のネットワーキング』上野千鶴子編 日本経済新聞社／

『母性を問う 歴史の変遷(上)(下)』脇田晴子編 人文書

院／『青鞥時代 平塚らいていと新しい女たち』堀場清子著

岩波書店／『アウト・オン・ア・リム(OUT ON A

LIMB)』シャーリー・マクリーン著 山川紘矢・亜希子

訳 地湧社／『女たちが変えるアメリカ』ホーン川嶋瑠子著

岩波書店／『HELPから見た日本』大島静子 キャロリ

ン・フランシス著 朝日新聞社

めじゃーなりすとのめ 予感(ジャーナリストと天皇)

増田れい子

〈あこらのあこら〉新入会／三十四号を読んで

一三七号(一九八九年一月) ¥400

〈新宿〉天皇報道に驚くー

巻頭詩 願い 中野寿子『ジンジャー』より

緊急AGORAZEIN 天皇報道に驚く

井田恵子 荻澤礼子 岡田佳代 駒野陽子 池田千鶴子

大島ふさ子 堂本暁子 桑原ちゑ子 斎藤千代 布施優子

菅景 高宮弘子 増田れい子 竹内全子 中村宏子

〈女から女たちへのメッセージ〉

〈女の講座・女のつどい〉

一三八号(一九八九年二月) ¥400

〈新宿〉天皇報道に驚くⅡ

緊急AGORAZEIN 続 天皇報道に驚く

井田恵子 荻澤礼子 岡田佳代 駒野陽子 池田千鶴子

大島ふさ子 堂本暁子 桑原ちゑ子 斎藤千代 布施優子

菅景 高宮弘子 増田れい子 竹内全子 中村宏子

〈これが消費税だ！〉「増税なき財政再建」はオオウソだっ

た！

〈あこらのあこら〉年賀状から

一三九号 (一九八九年三月) ￥400

〈九州〉女にこだわる女たち

〈巻頭〉ひとつの検証

女にこだわる女たち

正しい生き方ってなんだろう

母と私

「ピッター」いいジャン

専業主婦も発言する

〈意見〉長尾小問題が問いかけたもの

のゲルニカ」その後

〈あこら読書室〉『私』探しゲーム 欲望私民社会論』上野

千鶴子著 筑摩書房／『平塚らいてうと日本の近代』大岡昇

平、丸岡秀子ほか 岩波ブックレット／『別冊宝島85「フェ

ミニズム入門』JICC出版局発行／CINEMA『ワール

ド・アパート』少女の捉えたアパルトヘイト 山下智恵子

あこら書房 ブックリスト1

集会から

意見

福岡市に女性センターオープン

ねえ、きいて！ 天皇制のこと 1989年

語り始めよう

日本女性会議88北九州

やりすぎじゃない上野さん

〈あこらのあこら〉

〈女の講座・女のつどい〉

一四〇号 (一九八九年四月) ￥300

〈新宿〉運営会議と拠点間会議報告

89・4月運営会議と第一回企画会議報告

拠点間会議に参加して

あ・こ・ら・す・る

インタビュー 生活からのフェミニズムを

〈あこら書房〉と(89夏合宿)を呼びかけた 大島ふさ子さん

めじゃーなりすとのめ 「主権在妻」は平和のシンボル？ 聞き手 池田千鶴子

〈わたしの仕事〉14 拒否は力 喫茶店経営 樋口礼子

青柳 亨

小島サカス

〔あこら読書室〕 『フランス女性の24時間』ドミニク・ド

アン／ルース・ペノー／ドミニク・プジュベレイラ・セバー

著、萩原葉詠 草思社

〔あきらめないで〕 消費税はストップできる！

〔女の講座・女のつどい〕

一四二号 (一九八九年五月) ￥400

〔新宿〕アジアの女と日本の女

〔巻頭〕マーガラビー 戦争責任雑感 桑原ちゑ子

〔アジアの女と日本の女〕

ベトナムへ、ミシンを送って 高橋ますみ

ベトナム旅行記 高橋 左紀

五・四 天安門前広場 中国の学生パワーを見た！

芦澤 礼子

〔集会から〕

〔恨(ハン)〕がきこえた／女性内閣誕生5・12集会に参加

して 石黒真貴子

〔TOPICS〕日本初の“フェミニスト党”が誕生！

一四二号 (一九八九年六月) ￥400

〔新宿〕女が動くとき日本が変わる！

〔巻頭〕心あるミニ政党は大同団結を 斎藤千代

〔AGORAZEIN〕身近になった参院選

池田千鶴子 石黒真貴子 大島ふさ子 桑原ちゑ子

斎藤千代 竹内全子 寺沢恵美子

〔アンケート〕〔あこら〕各拠点からの回答

〔立候補して流れを変えます〕

新しい民主主義の風を 金住典子

「生きてきて良かった」と感じられる社会を 日下部禧代子

国民連合政権を作りたい 久保田真苗

われながらどうなってるの？ こうなってるんデス

女性の感性と知恵を政治に 駒尺喜美

三〇年間の取材活動の結論として立ちます 清水澄子

参院選・比例区に挑戦！ 草の根ミニ政党の運動スポット 堂本暁子

手づくり選挙で女を国会へ 山口みつ子さんが語る大作戦

詩 いま、ここで 田井亮子

一四三号 (一九八九年七・八月) ￥400

124

〈新宿〉女が動くとき日本が変わるⅡ

AGORAZEIN 女たちの熱い闘い

参院選を終わって Ⅰ 私たちは、こうたたかった

Ⅱ 参院選を私たちはこう受け止めた

金住典子 木村結 日下部禧代子 堂本暁子 矢作滋子

井田恵子 江口裕子 桐本幸子 駒野陽子 佐藤洋子

増田れい子 松本侑壬子 大島ふさ子 斎藤千代 佐藤斉一

〈あゝ読書室〉 『INVITATION TO A NEW YARN 招待・新しい流れへ』しまよ(こ)／Barbara Summerhawk 土曜美術社

〈集会から〉 北沢杏子さんをむかえて

〈あゝらのあゝら〉 〈あゝら札幌〉

〈女の講座・女のつどい〉

一四四号 (一九八七年一月) ¥400

〈新宿〉女が動くとき日本が変わるⅡ

〈AGORAZEIN〉女たちの熱い闘い

参院選を終わって Ⅲ これから私たちは

金住典子 木村結 日下部禧代子 堂本暁子 矢作滋子

井田恵子 江口裕子 桐本幸子 駒野陽子 佐藤洋子

増田れい子 松本侑壬子 大島ふさ子 斎藤千代 佐藤斉一

“私”が見えてきました 信州・夏合宿

風がおいしい！ 〈歴史をひらくはじめの家〉

「あゝら夏合宿」に参加して

自分を変える契機ができた

一步をふみ出すために

勇気づけられたつどい

〈集会に参加して〉

アジア女性フォーラム／夫婦別姓／反戦マラソン演説

〈あゝらのあゝら〉

〈女の講座・女のつどい〉

一四五号 (一九八九年一〇月) ¥400

〈札幌〉男たちよ 女たちは怒っている！

性別役割分業ひとりこけたらみなこける

レイブを空想する女の「非」レイブ願望

ある「表現の自由」について

男社会を斬る

石のつぶてを 下半身事情を糾弾する

女たちはもう黙っていない

脱原発選挙を闘って見えてきたもの

高橋 芳恵

柏原満由美

荻野 京子

奥村さと子

細田英里子

渋谷 涼

吉田 悠子

岡本千香子

永高 純子

畔柳みち子

谷 百合子

NLP空港建設と三宅島― 桑原秀雄さんに聞く

聞き手 ナフィサ・ミナイ

沖繩に都市型ゲリラ施設ができる！？

“うない”たちの反戦「ゆい」を

斎藤千代

〈あこら読書室〉

『一九八〇年代パートタイマー白書 パ

ート・未組織労働者連絡会10年の活動記録』パート・未組織

労働者連絡会／『一葉の日記』和田芳恵著 野口碩補注 福

武文庫／『個人化する家族』目黒依子著 頸草書房

〈集会から〉真宗大谷派の僧と在党性差別を語る

〈あこらのあこら〉新入会 “ベトナムへ、ミシンを”第三

次始まる

〈女の講座・女のつどい〉

（一四六号以降、月刊（通称「ミニ」）を、随時増ページすることに

変更、以来、厚い『あこら』と薄い『あこら』を混在させながら、現

在の月刊に近いかたちになっていった。）

一四六号（一九八九年十一月）¥680

〈新宿＋沖繩〉沖繩を犠牲にした安保の上に眠れ

ますか

〈巻頭〉沖繩からの手紙

新里律子

AGORAZEIN 恩納村・沖繩・女・安保

〈あこら新宿〉の話し合いから

池田千鶴子 桑原ちる子 前田信子 石黒真喜子 斎藤千

代 与儀睦美 岸野美奈子 高宮弘子 江口裕子

娘が救急車で運ばれた日

浦崎 澄

女性たちのネットワークで平和な未来を

高里鈴代

恩納なべの未裔たち

もろさわようこ

資料 都市型戦闘訓練施設闘争経過報告

恩納村闘争委

参議院予算委員会会議録 一九八九年十月二十七日

沖繩発・女と戦争、そして平和

〈日本女性会議89なは〉平和分科会から

NLP空港建設と三宅島Ⅱ 桑原秀雄さんに聞く

聞き手 ナフィサ・ミナイ

オリンピックはいりません 長野市長選に女性が初挑戦！

〈あこら長野〉大島ふさ子

中絶できる期間が突然短縮される―堂本睦子さんが緊急質問

参議院予算委員会会議録（八九年十月二十六日）

私たちの提言 〈女の人権と性〉実行委員会

意見 鳥肌立った国会中継 藤原真佐子

あこら読書室 『聴く、観る、語る、私たちの沖繩』葛飾

《あこらのあこら》

一四七号 (一九八九年十二月) ¥400

《九州》セクシユアル・ハラスメントII福岡からの

報告

《巻頭》サイレントでは済まされない

福田光子

Aさんと《あこら九州》と《支援する会》

池田保子

《支援する会》で自分と出会えたのかもしれない

池田保子

サイパンウォッチング イン フクオカ

田村尅子

十一月十六日集会報告

《支援する会》北村原告の意見陳述の要旨 要約鳥谷敦子

第一回口頭弁論を終えて 原告Aさんにインタビュ

聞き手 池田・三好

《あこら九州》ティーチ・イン 性的いやがらせを考える

セクシユアル・ハラスメント線引きはナンセンス牟田和恵

自分の内外に問題提起を

藤 さゆり

支援する会に参加して

井手尾玲子

セクシユアル・ハラスメントはセクシユアリティの問題

三好久美子

女性のための女性による女性協同法律事務所 小島サカエ
リサと話したこと 甲木京子

意見 犯罪報道に見るセクシユアル・ハラスメント(SH)

市川雅彦

《あこら読書室》『セクシユアル・ハラスメント女たちの告

発』宮淑子著 教育資料出版／『女性史を拓くI 母と女

平塚らいてうと市川房枝を軸に』鈴木裕子著 未来社／

『女性雑誌を解説する』Compendium 日・米・メキシコ

比較研究／『女のせりふ』伊藤雅子著 未来社／『サンタ

クロースはおばあさん』佐野洋子著 フレーベル館

《集会から》12・8女たちのつどいに参加して 芦澤礼子

《あこらのあこら》

《女の講座・女のつどい》

一四八号 (一九九〇年一月) ¥400

《新宿》90年代わたしは

フェミニズムの、みぞ落ちを突つく 東京 しまようこ

すべての生きものを大切にする政治を 東京 井田恵子

初笑い 鎌倉 金森トシエ

不当解雇無効を勝ち取って 旭川 大西淑子

女と地方にこだわって 新潟 倉元正子

大谷派教団内の女性差別の変革をしたい

（みどり）の思想を自ら実践したい

女性が政治の場に30%

暮らしをたたみながら

多者沢多の社会を

女性学のさらなる発展をめざして

わたしもまぜて！

もっと自由に

女から女たちへ 年賀状交換

女どうしケンカさせてうしろで笑っているのは誰だ！？

仕掛けられた上野千鶴子VS曾野綾子を読む 谷 百合子

海外通信 クアラルンプール 藤井里子

（あこら文庫）ネットワークに参加しませんか。大島ふさ子

（あこらのあこら）

守口

藤谷不三枝

東京

矢作滋子

東京

清水澄子

東京

小林カツ代

東京

布施優子

川崎

井上輝子

東京

片岡悦子

名古屋

山下智恵子

小さな女性史

自分史を書いてみませんか
出版のお手伝いをします。
戦中派は特に歓迎。

03-3354-3941

BOC出版部

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

03-3402-3244

03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

リニューアルした
「ふえみん」を
プレゼントします。

大阪支局
〒530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404
& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ／毎月5・15・25日発行
購読料：年間9,000円・半年4,500円（送料込み）

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。

femin

〈あごろ〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる――。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌『あごろ』を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごろ』の誌代込みで月額七百円。一年前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千円。ハガキ・FAX・メール・電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉の登録も、どうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬を登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

どちらも〒160・0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル
☎ 03・3354・3941(代) FAX 03・3354・9014
Eメール XLV 05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp

あごろ 281号 今こそ言おう 戦争は「ノー」! ●発行2003年2月10日(1・2月合併号)

●編集 あごろ湘南+あごろ新宿

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,085円+税 ●振替 00100-0-5264



9784893061294



1920036010851

ISBN4-89306-129-1

C0036 ¥1085E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,085円＋税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 ☎3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集
校正・デザイン・レイアウト
各国語翻訳その他

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

ジェンダーってなあに？

フツの女たちがフツに語る
おもしろい わかりやすい 本です。
しま・ようこ編 ￥1,500

女性問題の 「根っこ」を考える

かつしか女性会議有志



サイレントマイノリティのBOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

03-3354-3941 FAX03-3354-9014

郵便振替 00130-3-39331

E-mail boc@mb.infoweb.ne.jp